
凌霄花

喜世

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

凌霄花

【Nコード】

N8615L

【作者名】

喜世

【あらすじ】

時は元禄十三年。水戸藩は大きな物を失った。悲しみを乗り越え、早苗と助三郎は静かに暮らしていくはずだった…。しかし、あの江戸で『事件』が勃発。二人はその渦中に巻き込まれ、翻弄されてゆく…。

「雪割草」「千日紅」「金銀花」「雪柳」の続編。当時の社会に衝撃を与えた『赤穂事件』を追う。

序章（前書き）

現在の構想上、サイトの意向に従い今回はR15相当とさせていた
だきます。

（時代劇は規定がゆるゆるな気がしますが…）

序章

「…秋も暮れか」

『水戸の黄門さま』こと、徳川光圀は旅先のある宿で、ぼんやりと窓の外を眺めていた。

彼は日を追うごとに日没の時刻が早くなり、空気が冷えて行くのを実感していた。

さらに彼は、自分自身の変化にも気付いていた。

「…わしも、そろそろかの？」

沈んでゆく夕日を見て、そんなことをつい口走った。

気弱な自分に自嘲し、後ろ向きな考えを振り払うかのように、再び美しい夕焼けに眼をやった。

しばらく美しい光景に見惚れていたが、違う物に興味が移った。

それは信頼する二人の供だった。光圀と同じように夕日を眺めていた。

その様子をほほえましく眺めた彼は、あることを思い立った。

「今回でやはり終いにしよう。あの二人の為にも…」

序章（後書き）

注意

? 助さん、格さん 42部)

? 作者は『大石派』です。『吉良派』の方には受け入れられない内容になる可能性があります。

? 『史実』が好きな方!! 『フィクション』（歌舞伎、ドラマ、et c...）NGの方はご注意。

? 作者は創作の時間がなかなか取れなくなりました。不定期更新になります。

〔01〕 前兆

ある秋の冷えた朝、光圀は江戸の手前、品川の宿に居た。

御供は助三郎、格之進、弥七にお銀。そして犬のク口。

その日もいつものように悪事を暴き、悪の親玉の屋敷の門前に居た。

「これが終わったら上屋敷ですね…」

助三郎は溜息交じりに呟いた。

そんな彼と光圀は同じ気持ちだった。

「行きたくないの…。そうじゃ、もう一泊こころで…」

そう言った途端、もう一人の家来である格之進からピシリと窘められた。

彼は万が一の鬭いに備え、身体を温めていたが、耳はしっかり二人の話を聞いていた。

「路銀が足りませんので、今夜は絶対に藩邸です。ですから昼には終わらせ、帰ります。良いですね？」

その言葉に二人は首を窄めた。
そしてこそこそ内緒話を始めた。

「助さん、格さんは大分ピリピリしておるの…」

「怖いんですよ…。一昨日くらいからまるで…」

助三郎が次を言う前に、噂の人物にキツイ口調で窘められた。

「助さん、黙って集中しろ」

しかし、そんなことで引き下がる助三郎ではなかった。

集中力をさらに高めるため、黙想し始めた相棒をしり目に、主にこそつと言った。

「男なんです。昨晚、風呂をこっそり覗いたら、男のままでした」

「…そうなのか？」

光圀は驚いた顔で真面目な供を眺めた。

「はい。しかも、今朝は廁からあの姿で出てきて…。私はどうしていいか…」

助三郎は項垂れ、情けない声を上げた。

「…また戻れなくなったのか？」

不安げに光圀は呟いた。

「怖いのです…。もしそうなら、『早苗に戻ってくれ』などと言えませんかし…」

そう言つて助三郎が不安げに眺める男、『渥美格之進』は仮の姿。本当は佐々木助三郎の妻、早苗だった。

本来は小柄な女。すっぱりと助三郎の腕に入り、笑顔で見上げる様子が彼は好きだった。

しかし、今その妻は大柄な逞しい男だった。

助三郎は溜息をついたが、光圀に耳打ちした。

「ですが、御隠居、あれだけ男っぽい後に女の早苗を見た時はそりやもう……」

格之進、否、早苗は眼を開けるや否や、怒鳴った。

「佐々木黙れ！ 工作中だ！」

すると、『佐々木』の助三郎は怒った。

彼は気心の知れた仲間に、名字で呼ばれるのが嫌いだった。

「佐々木って言うな！ 早苗、お前だって本当は佐々木だろ！」

嫁いで佐々木家に入っているので道理は通っていた。

しかし、早苗は反論した。

「俺は『渥美格之進』だ。姉貴は今居ない！ いいから黙れ！」

すると助三郎は大人しくなった。それを見た早苗は、続けて主に忠告した。

「ご隠居、そのお気楽男と一緒にふざけていないで、そろそろ御指図お願い致します」

この言葉に、光圀も気を引き締め、深呼吸した後、供二人に声をかけた。

「助さん、格さん、参るぞ」

「はっ」

予想通り抵抗された一行は、激しい乱闘を繰り広げた。

早苗は得意の柔術で。助三郎は剣で。次々と立ちはだかる敵を打ちのめし、戦意を削いでいった。

そして、頃合いを見計らった光圈からの合図があった。

「助さん。格さん。もうよかろう。」

二人はそれを境に、闘いを中断し、終結に持ち込んだ。

「静まれ！」

早苗は尚も抵抗を続け、刀を振りかぶった男に回し蹴りを喰らわせた。

「静まれ！」

助三郎はしぶとい悪者を刀の柄で殴った。

最後の抵抗者が居なくなると、二人は光圈を挟んで立ち、さつきまで闘っていた男たちを眼で制した。

早苗は懐から預かっている印籠を取り出した。

そして、見せつけた。

「静まれ！ この紋所が目に入らぬか！」

そのとたん、男どもはうろたえた。
その様子を確認した早苗は続けた。

「こちらにおわすお方をどなたと心得る。
畏れ多くも先の副將軍、水戸光圀公にあらせられるぞ！」

印籠をさらに目立つように見せつけ、ざわつく男どもに向かって
声を張り上げた。
それに助三郎が続いた。

「一同、ご老公の御前である。頭が高い！ 控えおろう！」

二人の発言に皆驚き、男どもは地べたに這い蹲り、屋敷は乱闘が
ウソだったかのように静かになった。

いつものように、悪の根源に裁きを下し、眼の前から遠ざけた。
一通りの片付けが終わり、助三郎は伸びをした。

「はあ…。終わった終わ…」

彼は驚くべき物を眼にし、欠伸を飲み込んだ。
隣に立っていた主、光圀が突如その場に蹲ったからだだった。

「…御老公！？」

すぐさま彼は主に駆け寄り、様子をうかがった。

少し離れていた所で役人と仕事の話をしていた早苗も、主の異常に気がついた。

「御老公！ どうされました!？」

主に駆け寄った。

しかし、当の光圀は笑いながら二人に向かって言った。

「ちと目眩がしただけじゃ。気にせんでもいい」

「お顔の色がすぐれませんが…」

本当に光圀の顔色は悪かった。

二人を不安にさせぬよう、無理をしているように見えた。

「気のせいじゃ、気のせい」

尚も気丈にそう言う主を無視し、早苗と助三郎は相談を始めた。少しの後、結論が出た。

結果は、藩の御殿医の診察。

すぐさま籠を手配した。

品川の宿から藩邸まではそう遠くは無いが、病人が歩ける道ではない。

しかし、不満ありげの黄門さまは早苗に向かって嫌味を言った。

「格さん。金が無いと言っておらんかったか？」

「御心配なく。この駕籠賃はタダでございます」

爽やかに笑みを湛えて返事をしたのを見た光圀は、しびしび藩邸への帰還を認めざるを得なくなった。

もつとも、歩く気力が既に彼にはなかったのだが。

文句を言いながらも、彼は小石川の藩邸へ籠で帰った。

藩邸に着くや否や、御供二人は主を医者に預け、与えられた部屋で診断結果を待った。

夕方、その知らせがお銀によってもたらされた。

神妙にお銀を囲んだ男二人に彼女は笑った。

「両手に花だわ。普段の仕事も男前ばかりだと良いのに……」

少しふざけたお銀に早苗はムツとした。

「お銀、俺は男じゃない。そんなことより、御老公は？」

「格さん。あんまり心配すると、また元に戻れなくなるわよ」

早苗の欠点は心配症。

それも大分収まってきてはいた。しかし、極度の不安や心配事を抱えると精神が不安定になり、変身の能力が落ちる。

それをお銀は心配していた。

しかし、早苗はそんなことは気にも留めていなかった。

「俺の事より、御老公の診断結果はどうなんだ？」

普段ふざけることの方が多い助三郎も同じように真剣にお銀に迫った。

「そうだ。それを知らせるために来たんじゃないのか？」

再びピリピリした男二人に詰め寄られたお銀は、半ばあきれながらも報告をした。

「ご老公さまは少しお疲れになっただけよ。心配するなって」

この言葉に、二人はホッと胸を撫で下ろした。そして二人で今後の予定について話し始めた。

「そうか。なら、しばらく休養しないとな」

「十日ぐらいかな？」

しかし、二人の会話にお銀が割り込んだ。

「いいえ。明後日には水戸へ帰るそうよ。支度しておけて」

「は!?!」

「そういうこと。じゃあね!」

お銀は部屋の障子を開けて帰らず、屋根裏に消えた。

「普通に帰ればいいのに…」

「だよな。弥七もそうだ」

忍びの不思議な行動を見た後、二人はいそいそと支度を始めた。

そして一行は予定通り、朝早く水戸へ向けて発った。

「さて、水戸じゃ!」

元気いっぱい前を歩く主に、早苗は声をかけた。

「本当に大丈夫ですか?」

「心配など要らん! 早く帰るぞ!」

「そうですか?」

しかし、早苗は不安を拭い去ることができなかった。

そんな彼女に、助三郎がそつと耳打ちした。

「格さん。あんまり心配するな。『年寄り扱いするな!』って怒って姿を消されたら、たまったもんじゃないだろ?」

「それもそうだな」

「そういうことだ」

二人で話に切りを付けた所、光圈がからかった。

「これ、男同士でイチャイチャするでない。まだ朝じゃ」

この発言に二人は声を揃えて反論した。

「してません! 夜でもしません!」

二人をおもしろがり、光圀は高笑いした。

「はっはっはっはっ！」

…光圀のこの元気は、そう長くは持たなかった。

〔02〕 喪失

水戸に帰って二日後の夕方、早苗は台所に居た。

本来の女の姿で、助三郎の好きな煮物を作っていた。

ほとんどの料理は下女たちがするが、最低一品は早苗か姑の美佳が作るのが日課だった。

「早く帰ってこないかな？」

早苗はウキウキしていた。

その晩は、水戸へ帰って来てから初めて『夫婦』として過ごせる夜だった。

朝から上機嫌の彼女を見て、義母の美佳が言った。

「助三郎にたつぷり可愛がってもらいなさい。でも、その前に煮物を完成させないとね」

「はい」

「味見はした？」

「お願いできますか？」

「少し辛い。そうね、水をもう少し足せば…あら。水が無いわ」

台所の水甕の水は底をついていた。

下女が慌てて謝りに来た。

「申し訳ございません！ 今から汲んでまいります！」

しかし、早苗は彼女に優しく言った。

「重いから、わたしがやるわ。…手伝いに来てくれるか？」

早苗は男に姿を変えると、水汲みに精を出した。

「よし。これでいっばいだ。義母上、終わりました」

下女の半分の時間で仕事を終えた早苗は、満足げに言った。
美佳は彼女の労を労った。

「ありがとう、格之進」

「やっぱり、力仕事はこっちに限ります」

そこへ若い下女が、一家の主の帰宅を知らせにやってきた。

「若奥…あ、格之進さま。旦那さまがお帰ります」

この言葉に早苗は喜んだ。

「やっと帰ってきた！」

そして女に戻ることを忘れ、袴で襷掛けの男の姿で助三郎を出迎えた。

「助三郎！ お帰り！」

満面の笑みで、その声をかけると彼は少し驚いた様子だった。

「格さん？ 試合にでも勝ったのか？」

そこではつと早苗は気付いた。

「あ。…お帰りなさいませ。助三郎さま」

早苗は女に戻り、行儀正しく助三郎を出迎えた。すると、彼も嬉しそうに呟いた。

「…やっぱり、そっちが良いな」

その晩の夕餉の席は楽しく過ぎて行った。

しかし、助三郎の深刻な話題に早苗は驚いた。

「…どういふこと？」

「また、倒れたんだ…」

それは、主光圈の話だった。

その日、光圈は西山荘で仕事をしていた。

助三郎に『大日本史』編纂の詳細について説明を終えるや否や、蹲り立ち上がれなくなった。

すぐさま医者を呼んだが、光圈はそのまま床についた。

早苗は一部始終を聞いた後、不安そうに窺った。

「…やっぱり、病気？」

「…わからん。医者はなににも教えてくれなかった。しばらくは安静にして、周りもそつとしておけと言われた」

「…だったら、お見舞いはダメ？」

「…それはいいんじゃないか？ 一度、行ったらどうだ？」

「じゃあ、明後日行ってみる」

その晩は何事もなく、穏やかな夜が過ぎて行った。

早苗はその日の朝、一通りすべき仕事を終えると、男に姿を変えた。

光圀を見舞いに行く予定だったが、『佐々木助三郎の妻、早苗』で行く以前に

『家来、渥美格之進』で見舞いに行かなければいけない。身支度を済ませた後、早苗はあることを思い立った。

玄関を出ると、クロが走り寄って来た。

彼は元気に吠えた。

「ワンワン！」

「西山荘に櫻と行くんだ。お前も一緒に行くか？」

「ウワン！」

「…道案内？ 確かに櫻には要るかもな。クロ兄ちゃんよろしく！」

「ワン！」

早苗はクロと共に庭の隅にある馬屋へ向かった。

そこでは白と黒の二頭の馬が仲良く飼葉を食べていた。

一頭は助三郎の馬、虎徹。もう一頭は早苗の馬。

「櫻、今日良いか？」

首を撫でてやると、彼女は気持ち良さそうに嘶いた。

助三郎から贈られたその白馬は雌馬。彼女は『櫻』という名前を貰った。

櫻は優しく、早苗のどちらの姿にも従順だった。

「久しぶりに乗せてくれ。御老公に会いに西山荘までだ」

留守が多い夫婦は馬を走らせる機会も多くは無かった。

そこで、その日早苗は愛馬の運動不足解消と自身の鍛錬を兼ねて、乗馬を決めた。

櫻に鞍を付け、いざ出発しようとして跨った途端、さっきまで食事中だった虎徹がそわそわし始めた。

早苗はその様子を笑った後、彼に言った。

「虎徹、心配しなくていい。すぐ戻ってくるから」

しかし、黒馬は櫻の傍を離れようとしなかった。

早苗はそれを見て、自分の白馬にこそっと耳打ちした。

「…虎徹殿は助三郎にそっくりだ。お前が居なくなるとそわそわしだす。心配症の兄ちゃんだな」

その言葉を聞いた櫻は、虎徹に向かって小さく嘶いた。すると虎徹は落ち着き、静かに再び飼葉を食べ始めた。

何を伝えたのか早苗には皆目見当がつかなかったが、うらやましそうに呟いた。

「…お前たちとも話ができたらしいのにな」

飼い犬のクロとは意思疎通ができるようになっていた。それは彼が一度人間の男の子に変身したおかげだった。

「よし。櫻、ひとつ走り行こうか。クロは…走ってこい」

早苗は馬を走らせ、クロを引き連れて西山荘に向かった。

「…誰じゃ？」

西山荘の奥、障子が閉まった部屋の中から、光圀が聞いた。早苗は低く、今の姿の名を名乗った。

「…渥美にございます」

「…構わん。入れ」

早苗は主の部屋に入り、彼の容態をうかがった。

「…御老公、お加減は？」

床に着き、お世辞にも元気だとは言えない姿に、早苗は一抹の不安を感じた。

しかし極力それを表に出さないように努めた。

すると、弱弱しい言葉が返ってきた。

「…まずまずじゃ。それより、すまんの。仕事でもないのに格さんやらせて」

「いえ。私は御老公の家来でございます。見舞いに参上するのは当然」

「お前さんは本当に真面目じゃのう…。助三郎ももう少し見習ってほしいのう。…」

すると、光圀は大きな溜息をつき、天井を眺めた。

しばらく静かな時が流れたが、彼はこう言った。

「…お前さんに、謝らねばならん」

申し訳なさそうに言う主に、早苗は気まぎれになった。

「…なにをでございますか？」

恐る恐る尋ねると、彼から驚く質問が返ってきた。

「仕事を、本当にやりたかったか？」

突然のその言葉に早苗は言葉を失った。

黙っていると、光圀が続けた。

「お前さんは有能じゃ、助三郎と組ませると倍以上の力になった。それ故、ちと側に置きすぎた。お前さんの気持ちも考えず、迷惑をかけた」

その謝罪の言葉に早苗は反論した。

「私は、好きでこの仕事をやっております」

「強がらずともよい」

「そのようなことは…」

光圀は、早苗の話を聞かず、続けた。

「とにかく、ワシが死んだら自分の意思で決めるのじゃ。仕事を続けるもよし。

止めるもよし。両立させるのもよし。わかったか？」

突然出てきた弱気な言葉『死んだら』に、早苗は驚いた。そして必死に訴えた。

「死ぬなどと、弱気なお話をおっしゃらないでください！」

光圀の顔は歪んでいた。

あまりに声が大きく、うるさかった様だ。

「お前さん、見舞いに来たはずじゃろ？ そんなに怒鳴られては、余計におかしくなる…」

はっとした早苗が頭を下げると光圀はぼそつと呟いた。

「…そうじゃ。早苗に戻ってくれんか？ …戻ってくれたら、良くなるかもしれん」

『格之進』よりも『早苗』を求める主に早苗は笑った。

そしてその望み通り彼女は元の姿に戻り、主に微笑みかけた。

「…ご老公さま。どうですか？」

すると、光圀はムクリと起き上がり、早苗の顔を眺めた。そして笑み浮かべた。

「だいぶ良くなった。お前さんの顔を見たおかげじゃ。助三郎はズルイのう…。毎朝眺めおって…」

「そのような御冗談を…」

少し拗ね始めた主を笑ってから、早苗は優しく言った。

「早くお元気になってください。そして、また旅に参りましょう」

しかし、光圀はいつものように乗り気ではなかった。

さつき浮かべた笑みは消え、再び深刻な顔になっていた。

「…いいや。もう、お前さんも助三郎も旅に出てはいかん。」

意外な言葉に、早苗は驚き光圈を見つめた。

「…なぜですか？」

すると彼は穏やかに言った。

「これからは夫婦らしく、ゆっくり国で過ごしなさい。それにな、もうワシも旅はせぬことにした」

「そんな…」

再びの主の発言に動揺した早苗は、元気づけようと考えた。しかし、その心配はなかった。

「なにしろ、もう行くところが無くなった。ハッハッハッハ」

「あ、そういえば…フッフ」

その言葉通り、行っていない所は無くなっていた。

光圈はしみじみと呟いた。

「三年か…。三年で回れるとは思わなんだな。最初はお前さん、助三郎と結婚してはおらなんだ」

「はい」

「本当の姿を隠して…。大変じゃったなあれは？」

「はい」

「知らない助さんが素っ裸でお前さんが入っている風呂に押し掛けて…」

「ご老公さま！ それは言わないでください！」

二人は思い出話に花を咲かせた。

しばらく話した後、光圀は真面目な顔で言った。

「…助三郎を生涯支えてやってくれ」

「はい」

「…子も諦めたらいかん」

「え？」

突然の言葉に、早苗は驚いた。

ついに主の口から『子』という言葉が出た。

「…お前さんはまだ十分すぎるほど若い。絶対に諦めるでない。親戚にも屈するでない」

子どもが出来ない早苗は、不安が募っていた

しかし、その不安は誰にも言えない物になっていた。

それ故、光圀の言葉は重く早苗に響いた。

「…助三郎とお前さんの血を受け継ぐ優秀な人材を水戸に残してくれ」

期待の込められた言葉に、早苗は圧され苦しくなった。しかし、返事はした。

「…はい」

そんな彼女の様子を見て、光圀は付け足した。

「…気負ってはいかん。お前さんは真面目すぎてすぐに気負う。それで精神を病んだら元も子もない」

「…はい」

「気長に励め。…まあ、子作りは楽しいじゃろ？」

最後の最後、おかしな言葉に早苗は真っ赤になった。

早苗が帰った部屋に、今度は年配の男が居た。

それは早苗と助三郎の上司でもある男、後藤だった。

「後藤…。紙と筆をここへ…」

「はっ」

「あれに、言い残しておかねばならん。あの者の事を…」

光圀は水戸藩藩主に文を書き始めた。

冬の寒さが厳しくなってきたある日の夕方、早苗は帰宅した夫に光圀の様子をうかがった。

「どうだった？」

「お加減が良くなってきたそうだ。年内に床払いできるといいが…」

「よかった…」

助三郎はあることを思い立った。

「明日二人で見舞いに行こうか？」

「うん」

「…あ、でもまた『仕事しろ！』って怒られそうだな。俺は格さんが居ないと怒られてはっかだ…」

それはある意味正しかった。

『格之進』が出仕をしていれば助三郎は仕事に集中する。

同年の同僚が居ることで張り合いが出て、やる気がでる。もっとも、格之進が怖いというのもあったが…。

「助三郎さま、ちゃんと仕事してるじゃない」

すると突然助三郎は早苗の手を取った。
珍しく、はつきりと早苗に己の気持ちを伝え始めた。

「…それはお前のおかげだ。お前が居るから俺は頑張れる」

ドキッとした早苗は、彼に聞いた。

「…それって、どっち？ わたしか弟か」

「両方だ。どっちも俺の大事な人だ…」

助三郎の顔が早苗に近づいていた。

早苗は眼を瞑り、夫を待った。

しかし、丁度その時人が走ってくる音が聞こえた。

ハッとした二人は眼を開け、耳を澄ませた。

足音は二人の居る部屋の前で止まった。

足音の主である下男は息を切らし、畳にひれ伏した。

「旦那様！ 火急の知らせにございます！」

「…どうした？」

「ただいま、後藤様から使いが参りました」

助三郎は胸騒ぎを覚えた。

「…何かあったのか？」

おそるおそる彼が窺うと、下男は頂垂れた。
そして弱弱しく、告げた。

「御老公が、お亡くなりにな」

夫婦はしばらく放心状態だった。
だが、早苗がポツリとつぶやいた。

「…どうして？ …良くなってきたんじゃないの？」

「…確かに、そう聞いた。…どうしてだ？」

二人で『どうして？』としばらく言い合った後、早苗が立ちあがった。

「…確認しましょ。ここでああだこうだいつてもしかたないわ」

「そうだな。その通りだ。今すぐ行こう」

早苗は格之進に姿を変え、助三郎と共に西山荘へと向かった。

途中、千之助を呼び出した。

「助三郎兄上に格之進兄上、お二人ともどうなされたのですか？」

彼は婿に入り、水野の姓を名乗っていたが、元は助三郎の妹、千鶴だった。

婿入りの際、光圀から受けた恩は少なくなかった。

それ故、西山荘への御供に加えることにした。

「…御老公が亡くなったと知らせが入った」

助三郎が手短にそう告げると、千之助は驚いて声を上げた。

「え！？ 本当ですか！？」

彼を、早苗が制した。

「静かに！ まだ確認が取れていない。これから行って確かめる。いいか？」

「はい」

知らせが来て数刻後、三人は光圀の前に居た。

…すでに彼はこの世の者ではなかった。

眠っているような主を目の前に、彼らは言葉を無くしていた。

そんな彼らを前に、後藤が静かに口を開いた。

「…お前たちには早々に知らせた方がいいと思ってな。藩には明日公にする」

少し立ち直った早苗は一言聞いた。

「…御最後は？」

「…眠るように逝かれた。お前たちを案じながら」

「そうですか…あの、最後の別れをお許し頂けませんか？」

「許す。それぞれ気の済むまですればよい…」

早苗は女に戻り光圀に誓った。

「ご老公さま。必ず水戸藩の力になります。見守ってください…」

数日後、光圀の葬儀が終わった。

西山荘には主はおらず、早苗と助三郎だけがぽつんと立っていた。がらんとした部屋を見渡した二人は溜息をついた。

「…帰るか」

「…ああ」

互いに何も話さず、ただとぼとぼと歩いた。

二人で冷えた夕食を食べ、早々に寢所に戻った。

しかし、助三郎は早苗が気がかりだった。姿が男のままだったからだ。

「…大丈夫か？」

「…なんで？」

「…その、格さんだから」

「ちゃんと戻れるから心配するな。」

二人は別々に布団に入ったが、寝付けなかった。しばらくして、早苗はそつと反対側の夫に声をかけた。

「助さん。起きてるか？」

「ああ。寝られん」

すると、彼はむくりと起き上がり早苗に言った。

「酒でも、飲むか？」

「いい考えだ」

二人で酒を酌み交わした。

しかし、強い早苗はもちろん、弱い助三郎でさえ酔えなかった。美味くもない酒杯を重ねた後、早苗は俯いた。

以前から彼女は助三郎に『泣き顔を見たくない』と懇願されていた。しかし、その晩は別だった。

「なあ、助さん」

「なんだ？」

「泣いても、良いか？」

「一緒に泣こうか」

そう言った途端、助三郎の胸に女に戻った早苗が飛び込んでいた。彼女は涙を流し、泣いていた。

そんな妻をしっかりと抱きしめ、助三も涙を流した。しかし、少し経つと、彼女に決意を告げた。

「早苗、泣くのは今晚だけにしよう」

「うん」

「いつまでも泣いてたら、御老公に叱られる」

「うん」

こうして、水戸の佐々木家では静かな時が過ぎて行った。二人の心も徐々に癒え、日常の生活が戻りつつあった。

…しかし、江戸では大きな事件が起ころうとしていた。

〔03〕 江戸の友

光圀の訃報は、いち早く江戸にもたらされた。

五代將軍徳川綱吉は驚き、悼みの言葉を述べたが、彼の傍に仕えるある男は違った。

…態度と口では同じ気持ちを表してはいたが。

その夜彼は邸の一室で空に掛かる三日月を肴に、一人静かに祝杯をあげていた。

「…ようやく死んだ。あのうるさいジジイめ」

手の中の盃に、細い月の姿を映し込みしばらく眺めた後、グイッとそれを干した。

「これでやっと俺の思い通りに事を動かせる…」

再び手酌で酒を注ぐと、側用人柳沢吉保（*1）は端正な顔で静かに笑った。

「…手始めに殿の御機嫌取りだ」

元禄十四年の年が明けた。

しかし喪中の水戸藩、祝い事とは無縁だった。

佐々木家でも、それは同じ。普段通りの暮らしを送った。

冬の寒さも大分和らいできたある日の夕暮れ時、助三郎は仕事帰りに後藤に呼び止められた。

怒られるのではと、少しびくびくしながら神妙に彼の指示に従った。

しかし、彼の目的は叱責ではなかった。

「お前に仕事だ」

この言葉に助三郎は、安堵と共に小さな溜息をもらした。

「なんだ、仕事か…」

「その口振りはなんだ？」

年配の後藤はギロツと若い部下を一瞥した。

怖い上司にギョツとした助三郎だったが、怯まず彼の思うところを述べた。

「…御老公がいらっしやらないので、気合いが出ません」

慕っていた光圀が亡くなった事による喪失感や職場の皆が背負っていることだった。

しかし、助三郎にはさらに大きな物が有った。

「お前の不満は、渥美だろうか？」

「…はい」

早苗は光圀の死後、一度も出仕していなかった。

それ故、助三郎の眼の前で変身する事もなかった。

親友に会えない、職場で一緒に働けない助三郎は、気合いと張り合いを失っていた。

しかし、後藤はその事よりも佐々木家の夫婦を心配していた。

光圀から、託されてもいたからだった。

「…もう少し、女の早苗殿を可愛がってやれ」

「…はい」

助三郎は神妙に返事をした。

その様子に、少し安堵した後藤は本題に入ることにした。

「さて、仕事だが…。お前と、渥美に出仕命令だ」

助三郎は表情が明るくなり、飛び上らんばかりに喜んだ。

「誠にございますか!？」

呆れ顔の後藤は釘を刺した。

「『仕事』だ。今から言う内容にも喜ぶではない。良いな？」

「…して、その内容は？」

助三郎は身を乗り出した。

「早苗！ 江戸で仕事だ！」

助三郎は帰って来るなり、早苗に告げた。
嬉しそうな夫に、彼女は聞いた。

「それって、わたしも？」

「ああ。明後日の朝出立だ」

急な出立に、二人は大わらわで支度を始めた。

江戸へ行くのに必要な路銀、着物、薬、などを早苗は真面目に
詰め込んでいたが、

助三郎は他所事をし始めた。

一人で将棋の碁盤の前に座り、駒を並べたかと思うと、一人で指
し始めた。

不可解な彼に早苗は近づき、覗きこんだ。

「…ねえ。なにしてるの？」

助三郎は集中した様子で、碁盤から目を離さずボソツと言った。

「…練習」

パチンと駒を盤に置く音が響いた。

「なんで？」

「…格さんに今度こそ勝ちたいから」

意外な言葉に、早苗は噴いた。

助三郎は今まで一度たりとも早苗に勝利したことが無かった。妻が笑い転げる様子を不満げにちらつと見たが、すぐに将棋盤との睨めっこを始めた。

くすくす笑いながら、早苗は彼をからかった。

「大丈夫？ 勝てる？」

すると助三郎は不機嫌そうに言った。

「格さんが強すぎなんだ！」

早苗が助三郎に勝てるのは、柔術と将棋。これだけは譲れなかった。

「フツツ。勝ち方教えてあげようか？」

早苗は悪戯っぽく笑った。

助三郎は真剣な眼差しで、膝を進めた。

「頼む」

そんな彼の耳元で彼女は意地悪く囁いた。

「…教えてあげない」

逃走を図った彼女だったが、助三郎にはすぐさま捕まえられた。

「言ったな！？ こいつ！」

彼は早苗をギュツと抱きしめ、離さなかった。
そんな彼に、早苗も笑うだけで反抗はしなかった。

「なにするのよ!？」

「離してやらない!」

…イチャイチャ夫婦の夜が過ぎて行つた。

「久しぶり!」

助三郎はしばらく振りの格之進を見た途端、満面の笑みを浮かべた。

しかし、当の本人はあっさり受け流した。

「ああ。じゃあ、早いとこ支度しよう」

その態度が不満な助三郎は膨れっ面になった。

「…なんだよ。久しぶりなのにその態度は」

早苗は、遠くを見る目付きで呟いた。

「…さて、今度は何時まで持つかな？」

「…どういう意味だ？」

「分からないのか？」

頭を捻り始めた彼の頭上から、声が聞こえた。
それはお銀だった。

「教えてあげるわ。枕抱き締めて『早苗…』って泣くのよ」

「なんだと!？」

助三郎は怒鳴った。

しかし、そんなことで怯むお銀ではなかった。

「だって本当の事じゃない。ねえ？ 弥七さん」

彼女の隣にはいつの間にもやら弥七がいた。

彼もお銀に便乗し、助三郎をからかった。

「ああそうさ。早苗さん一筋だからなあ。助さんは」

ニヤニヤする二人を見上げ、助三郎は顔を紅くして怒った。

「からかうんじゃない!」

一方、早苗はそんな騒ぎを他所に武士の旅装の仕上げをしていた。
特に身分を隠す必要のない江戸までの旅。

武士の格好のまま、向かうことになっていた。

ただ、一つ不満があった。

それは腰に差した大小だった。

引き抜いたり、差し込んだりと試行錯誤している姿に助三郎が声を掛けた。

その声は若干震えていた。

「格之進…」

「どうした？ …あ」

助三郎の視線は、早苗が触れている刀に注がれていた。

助三郎は格之進の『刀』の名が付く物を持っている姿に、恐怖し震える。

早苗の姿で『包丁』は平気になった。

しかし、彼の特殊な刃物恐怖症、完治してはいなかった。

すべては、早苗が起こした自害未遂が原因だった。

その負い目がある早苗はすぐに腰の刀を触るのを止め、助三郎を安心させようとした。

「これは絶対抜かないから。心配するな」

しかし、助三郎は申し訳なさそうに頭を下げている。

「すまん…。ほんとうに、すまん…」

水戸を出立し、江戸の藩邸に着いた二人は、正装に身形を改め謁見の間に居た。

中々現れない藩主を待っているうち、早苗は隣の男の視線を感じた。

「…どうかしたか？」

「いや、お前様似合うなって…」

「そうか？ お前の方が何百倍も似合う男前だろ？」

思った通りの言葉を口にした早苗の目の前で、助三郎は大きな溜息をついた。

「…はあ」

「なんだ？」

助三郎は、『格之進』に失礼なことを言った。

「…早苗に言われたら嬉しいんだよ。でも、お前に言われると惨めになる」

「なんで？」

「お前の方が男前なんだよ！ 女にモテるしさあ！」

「俺は女だ！ 男前でもないし、モテもしない！」

早苗が怒鳴ったと同時に、襖が開いた。

殿さまのそばに仕える、小姓だった。

彼は、二人に感情を抑えた声で言った。

「殿が御見えになります」

二人は口喧嘩を止め頭を下げた。
そして、少しすると声が掛かった。

「苦しゅうない。面を上げよ」

「はっ」

二人はこの時、自国の藩主、徳川綱條（*2）と初めて対面した。
彼等は、綱條に亡き主の面影を見出そうとした。

しかし、息子ではない。血は甥なので繋がってはいるが、あまり似ていない。

二人は少しばかり落胆した。

「…すまん。忙しくて、遅れてしまった」

「いいえ…。滅相も…」

恐縮していると、藩主自ら正座を崩し、二人にこう告げた。

「まずは、その方らに礼を言う。義父上の旅の供、ご苦労だった」

この言葉で、元お供二人の脳裏に数々の旅の出来事が浮かんで消えた。

楽しい思い出、悲しい思い出、つらかった思い出、様々あった。

その中すべてに、光圀がいた。

しかし、その光圀はもういない。

改めて、喪失が大きかったことに気付かされた二人だった。

その日は、時間が許す限り三人で光圀の思い出話を語り合った。忙しい綱條は、二人の話で気分転換が多いに出来たようで満足そうに部屋を後にした。

「また、話を聞かせてくれ」

数日間、二人は藩主の話し相手をしていた。今回の仕事は、ただそれだけだった。

綱條は、諸国漫遊の話に夢中になった。

江戸から出た事のない彼は、二人の話を中心に聞いた。その一方で、彼は二人に国の将来について語ることも多々あった。

そんなある日、綱條は大層疲れた様子でやってきた。

話中である男が出てきた。

その名前を聞いた二人はピンと来た。

「柳沢様でございますか？」

助三郎が確認を取ると、綱條は苦々しく吐き捨てた。

「様など付けないで良い。あのような小さい男……」

そんな姿を眼にした早苗と助三郎は顔を見合わせた。イライラした様子の藩主は、話を続けた。

「…あの男は、義父上が無くなってからやりたい放題だ。上様や御生母、桂昌院（*3）様の顔色をうかがい、政治を操るのが目に見えてきた」

「と、いいいますと?」

「毎年三月に勅使が京から来る。わしもそれで今忙しいのだが…。柳沢は朝廷の勅使に工作するつもりらしい。…なにをするか、わかるか?」

そう投げかけられた二人は首を傾げた。

「はて…。見当がつきませんが…」

「…桂昌院様の従二位（*4）をお授け下さるよう、打診するつもりだそうだ」

この答えに、助三郎がすぐさま反応した。

「では、もし許可が出て、従二位を頂ければ…」

「桂昌院様は喜び、上様も喜ぶ。そしてそれは柳沢の手柄」

吉保の事を毛嫌いしている水戸藩主は、家来を相手に日頃の鬱憤を発散していた。

少し迷惑な話だが、早苗と助三郎は興味深く彼の話を聞いていた。

「…して、殿はどつされるおつもりですか?」

助三郎がそう窺うと、綱條は天井を睨み不満げに漏らした。

「なにもできんから不満なのだ。だが、何かあの男を追い詰めるいい物が有ればいいな……」

江戸へ来てしばらく経ったある日、助三郎は町人の着流し姿でぶらぶら歩いていった。

藩主は江戸城に詰めており、佐々木、渥美両名の仕事は無かった。せつかくの休みを、早苗と過ごそうかと思っていた彼だったがその計画は潰えた。

彼女は親友の由紀の家で、町人の友、お孝を交えておしゃべりに熱中。男が入る隙間など無かった。

それならば、由紀の夫で紀州藩士の与兵衛と飲みにも……。と考えたが、彼は仕事で留守だった。

最後の頼みの綱、町人の友達でお孝の相手、新助の家まで足を運んだが彼も居なかった。

「なんで皆居ないんだ？」

そうぼやいて、助三郎は着物の袖に手を突っ込み、ぶらぶら歩いていった。

突然、閃いた様子で手を打った。

「そうだ！ 早苗と格さんを分離する方法を考えよう！ ……義父上に頼めば出来るのか？」

不可能に近い事を一人で考えながら、彼は散歩を続けた。

昼ごろ、襷掛けの侍が小走りで助三郎の隣を通りすぎて行った。喧嘩か何かと思ひ、受け流そうとしたがその顔に見覚えがあった。

「あれ？ どこかで見たような…」

考えていると、先ほどの男が戻ってきた。

息を弾ませ、肩で呼吸をする彼の顔を助三郎はとらえた。そして、彼が誰なのかを思い出した。

「ひょっとして、安兵衛さん？」

「ん？ なんだ？」

敵つく、怖そうな顔の男がじろつと助三郎の眼を見た。若干さつきだったその眼に、助三郎は驚いたが、逃げはしなかった。すると男は助三郎の顔をまじまじと眺めた後、ぱつと笑顔になった。

「あ、助さんか？ 久しぶり！」

「お久しぶりです」

やっと認知してくれたことにホツとした矢先、彼に男は真面目な口調で挨拶をした。

「そうだ。…助三郎殿、御老公の事、お悼み申し上げます」

「…安兵衛殿、お心遣い忝い」

武士同士の形式の挨拶を済ませた後、安兵衛は助三郎の肩を叩いて笑った。

「しかし、元気そうぞ何よりだ。よかったよかった！」

安兵衛と呼ばれた男は、播州赤穂藩（*5）藩士、堀部安兵衛（*6）。

以前、彼を悩ませた『嫌がらせ』を光圀が解決したことが縁で知り合った。

彼の妻、ほりと早苗は文通もしていた。

男同士の再会を喜び合ったが、助三郎は申し訳ない気持ちになっていた。

「…お忙しいみたいで。すみません、呼びとめてしまっ

「いいや。気にしないで。どうせ、時間が掛かる…。もしかしたら、ダメになるかもしれん…」

豪快に笑っていた彼の顔が曇った。

それに気付いた助三郎は、その原因は何か聞き出そうと試みた。

「今、なにをなさってるんです？」

「…畳職人を集めている」

武士の仕事では到底ない。

助三郎は不審に思った。

「集める？ なぜ？」

「だよなあ。誰だってそう思う。まあ、立ち話もなんだから……どうだ？」

安兵衛は手で、酒を飲む仕草をしながら助三郎を誘った。暇を持て余していた彼は躊躇することなく、その誘いに乗った。

「生き返る!」

安兵衛は一気に酒を飲み干し、さも満足といった様子でお猪口を置いた。

「良い飲みっぷりですね。もう一杯!」

助三郎は、そのお猪口に酒を注いだ。それをすぐさま安兵衛は飲み干した。

「やっぱり、酒は良い! 疲れが取れる! さあ、助さんも飲んで!」

二人で飲んでいると、店の女将が空いた酒瓶を取りに来た。そして新しい酒瓶の代わりに、小言を置いて行った。

「あんた、せっかく仕官できたのに、まだ飲んでんのかい?」

「いいだろう? 疲れがたまっちゃ、仕事は出来ない! そう言う

ことだ」

声を張り上げると、店の奥から中年の男がやってきた。

「おう。どこかで聞いた声だと思ったら、安兵衛さんじゃねえか。最近どうだ？」

彼は自分の酒瓶とお猪口を片手に、安兵衛の隣に座った。

「忙しい！ だから飲みに来れないんだ」

「お疲れだねえ。まあ、これは俺の奢りだ。一杯飲んで、頑張りな」

「忝い！ 親父！」

助三郎は、彼らの様子を傍らで見ていた。すると、安兵衛は嬉しそうに呟いた。

「皆、ちつとも変わらない。良いやつらだ」

「うらやましいです…。あ、ところで、なぜ畳職人を集めてるんですたっけ？」

「畳が要るんだよ…。大量に」

イヤな事を思い出した安兵衛は、酒の肴の胡瓜の漬物を箸で突き刺し、口に入れた。

仇を討つかのように、音を立てて噛み砕いた。

それを見届けた助三郎は、質問を続けた。

「一体、何置置が要るんですか？」

「聞いてあきれるなよ。これだ」

安兵衛は持っていた箸を突き立てた。

「…二十置？」

「いや。そんなに少しなら、俺は今頃家で寝ている」

再び、漬物を齧り始めた彼に、助三郎は半信半疑で言った。

「まさか…二百置？」

安兵衛はこくりと頷いた。

「二百置！？ 何なんですか、その途方もない数は！？」

漬物を酒で流し込んだ安兵衛は、そのいきさつを話し始めた。

彼の話から、主である赤穂藩藩主、浅野内匠頭長矩（*7）が大役を仰せつかった。

それは朝廷の勅使を迎え、接待する役目。

そして、彼の欲しがる『置』は、勅使を迎える増上寺（*8）の置ということだった。

「ですが、なんで急に一気に二百置も？ 普通、事前にわかるでしょ」

助三郎は素朴な疑問を投げかけた。

「そつだ。それが普通だ。だがな、普通じゃない奴がいたんだよ…」

不満気な表情を浮かべ、安兵衛は酒を飲み干した。

「それは？」

「ご指南役の吉良様（*9）だ。あの爺さん、置替えも最初はしなくて良いって言ったらしいんだ。

なのに、今朝の下見で『なぜ置が古いままじゃ!?!』って怒ってな」

「それで、今日安兵衛さんが？」

「ああ。仲間も走り回ってる」

「しかし、なぜ吉良様は浅野様にそのような仕打ちを？」

「…いじめられているような気がする。おそろく…」

その時、店に男が走り込んできた。

彼は、安兵衛を見つけるなり、走り寄ってきた。

「あつ安兵衛さん居た！ なに呑気にお酒…助さん!?!」

彼は目当ての男と一緒に酒を飲んでいる助三郎に気付き、驚いた。

「よう！ 新助、久しぶり」

男は新助だった。

「お久しぶりです。そうだ！ 安兵衛さん、畳屋の親爺たち、説得出来ましたよ！」

再会を喜ぶ間もなく、彼は安兵衛に告げた。すると、安兵衛は勢いよく立ちあがった。

「助かった！ 新助さん、恩に切る！ で、畳屋は？」

「源五さんたちに連れて行かれました」

「よし。俺もすぐに行かないと…。ここは俺が払…げ、財布が無い…」

安兵衛の勢いがピタリと止まった。

酒で赤らんだ顔が青ざめるのを助三郎と新助はどうしたものかと黙って見ていた。

しかし、そこへ店の女将がやってきた。

「なんだい？ 金が無いのかい？」

怒った様子ではなく、『またか』といった体で彼女は呆れ口調だった。

そんな彼女に、安兵衛は手を合わせた。

「頼む！ 今日はツケで！」

その姿に女将は笑い、快くツケを許した。

「仕方ないねえ。いいよ！ 早く仕事に行きな」

「忝い！ では、助さん、新助さんまた！」

安兵衛は勢いよく店を飛び出した。

彼の遠ざかって行く後姿を眺めながら、助三郎は呟いた。

「吉良様…。浅野様をなんで苛めているのかな？」

「え？ お武家でも、苛めってあるんですか？」

さも意外だといった様子で言った。

そんな彼を助三郎は笑った。

「そりゃあるさ。武士だって人間だからな」

しみじみと助三郎は言った。

生きる世界が、身分が違っても同じ人間。大差など無い。

「でも、厄介な事にならなきゃいいんですけどね…」

「だな…。武士はちよつと間違つと、命にかかわる…」

二人でぼんやり立っていると、新助が切り出した。

「そつだ、助さん。おいらと飲み直す気、無いですか？」

「有るに決まつてるだろ？ 女は放つてとことん飲もう！」

男二人の大事な相手は、今でもおしゃべりの真つ最中に違いなかつた。

「では、行きましょう！ いい店あるんですよ…」

数日後、助三郎と新助の心配は現実となった…

〔03〕 江戸の友（後書き）

補足情報

（*1）柳沢吉保やなぎさわよしやす

將軍綱吉の側用人。悪者として書かれることが多い。ドラマでは綱吉役より年上の方がやってたりするが、実際は綱吉の方が年上。

東京都文京区の六義園作った人。

（*2）徳川綱條とくがわつなえだ

光圀の甥。養子で光圀の後継ぎ、水戸藩三代藩主。

（*3）桂昌院けいしょういん

身分が低い娘（八百屋？）だったが、徳川三代將軍家光の側室になり、五代將軍、綱吉の生母に。その出世が『玉の輿』の語源になったとか、ならないとか…。

（*4）従一位じゆいいちい

元は女性に与えられる最高位。將軍生母などに与えられる位。

（*5）播州赤穂藩ばんしゆあつひつはん

播州＝播磨国、今の兵庫県

赤穂＝兵庫県の南西、岡山県との県境に近い。

塩で有名。その塩に由来する銘菓『塩味饅頭』は美味！

（*6）堀部安兵衛ほりべやすべえ

諱は武庸たけつね

赤穂浪士で一番有名且つ人気と思われる。

高田馬場の仇討で有名になり、堀部家へ婿入りし、赤穂藩へ仕官。剣豪。

(*7) 浅野内匠頭 あさのたくみのかみ

赤穂藩三代藩主

妻は阿久里 あくり

『仮名手本忠臣蔵』では塩冶判官 えんやはんがん

(*8) 増上寺

東京タワーの下にあるお寺。将軍、御台所のお墓もある。置替えの事件は創作。

(*9) 吉良様

吉良上野介義央 きりやまのすけよしひでお

領地は愛知県の吉良町、ここでは彼は良い者。

『仮名手本忠臣蔵』では高師直 たかしのなるなお

「綺麗…」

その日早苗は花見を楽しんでいた。

空は生憎の曇り空だったが桜は満開。

うっとりとして花が散る様を眺めていた彼女の幸せな時間を、あの男が食い気で打ち壊した。

「早苗さん。 お団子もらいますよ」

花より団子が言葉通り当てはまる新助だった。

「もう！ お花見なのに！」

美しい景色の中で、夢見心地になっていたのにもかかわらず現実に引き戻された。

その事が不満な早苗は新助を睨んだ。

しかし、彼はそんなことはお構いなしに団子を頬張っていた。

さらに、彼は仲間の二人と昼間から宴会を始めた。

「さあ酒だ！ 新助、与兵衛さん、まあ一杯」

助三郎は弱いにもかかわらず酒を飲み、仲間に酒を勧めていた。

そんな彼らを由紀は呆れた顔で眺め、言った。

「慶太郎、あんなのになつてはダメですよ」

「はい！」

由紀の膝の上で彼女の息子が元気に答えた。
可愛い彼に膨れっ面だった早苗も笑顔になった。

「偉いね、慶ちゃん。クロも見習わ…」

慶太郎より年上の黒い犬は助三郎から酒の肴をもらってがつついていた。

男の仲間になっている愛犬の背中に早苗は呟いた。

「…やっぱり、花より団子なの？」

しかし、人間の大きな欲求である『食欲』に早苗も勝つことは出来なかった。

隣にやってきたお孝の手に、先ほど新助が食べていた団子があった。小振りだが艶やかな団子は、早苗の眼にその美味さを主張しているかのように見えた。

「これ、おいしいって評判なんですよ。食べませんか？」

甘いものが好きな早苗は、折れた。

「…食べる」

女同士でおしゃべりしながら甘いものを食べていると、男たちの中から声がかげられた。

「早苗、格さんは？」

「そうですよ。今日格さんもお仕事無いって言ってませんでしたっ

け？」

「だったら、来ないと。こんなおいしい酒があるんだから」

口々に言う男たちに早苗が流されることは無かった。

昼間から酒を飲むためにだけ男になるなどという馬鹿らしいことはしたくなかった。

花を眺めながら女同士でおしゃべりの方が何倍も魅力的だった。

「あの人は来ないわよ。昼から酒はイヤだって」

そう返事をする、男たちの中から残念がる声が上がった。

昼過ぎになると、どんよりとしていた雲行きは怪しくなりはじめた。

雨に濡れてしまう前に引き揚げようかと検討してた所に、侍が数人走り寄ってきた。

「居たぞ！」

「居たか!？」

物々しい雰囲気、助三郎は早苗を背後に隠した。

「…離れるなよ」

「うん」

何事かと身構えたたん、年配の一人が助三郎に焦った様子で言った。

「佐々木！ 早く屋敷に戻れ！」

「…はい？ どちらさままで？」

助三郎の身形は完全に町人だった。

それにもかかわらず、助三郎の姓を呼び捨てにする。知り合いに違い無いのだが、当の助三郎は皆目見当がつかなかった。

「わしがわからんか？ 一昨日、挨拶しただろう」

その言葉を聞き、記憶を掘り起こそうとした助三郎だったがすぐに諦めた。

「…申し訳ございません。様々な方とお会いして顔と名前がくつきません」

それも事実だったので、『酔って頭が回りません』という返事は捨てた。

助三郎の返事の手ごたえの無さに、呆れた様子の男だったがすぐに切り替え怒鳴った。

「とにかく、今すぐ屋敷に戻れ！」

焦った様子が眼に見える男、彼と一緒に来た男も同様だった。何かイヤな予感がした助三郎は、男に聞いた。

「一体何事ですか？」

「細かいことは後だ。とにかく一刻も早く藩邸に戻れ」

「はい。では、さっそく……」

助三郎は背後の早苗を由紀に任せると、身支度をし始めた。その様子を見ながら、男はまたも話しかけた。

「渥美の居場所は知っておるか？」

「…渥美ですか？」

助三郎は由紀の隣の『渥美』をちらつと見た。

彼女は不安そうに彼を見返した。

一方の年配の男は、一緒に来た男と相談し始めた。

「…いつも一緒だから、今日もそうかと思ったが外れたな。どこを探せばいい？」

「渥美は到って真面目と聞いております。遊びになど行ってないと思われませんが……」

「そうか？ わしはどうもあいつがよく分からん。今までの若い者とは大分違う……」

助三郎は『渥美』の居場所を把握していたので、二人を安心させ

る事にした。

「居場所は知っておりますので、同行させます。ご心配無く」

真面目にそう言うと、男二人は安堵し他の所在不明の水戸藩藩士を探すため、去って行った。

「…何かあつたんですかね？」

傍で一部始終を聞いていた与兵衛が助三郎に聞いた。

「何でしょうね？　うちの藩に災いでも無ければいいが…」

「ですね。うちの藩も一悶着ありましたから。あの時は御老公が助けて下さった…」

与兵衛の藩、紀州藩で起こった揉め事を光圀が収めた。

感謝している与兵衛はもちろん、一同皆で亡き光圀を偲んだ。

しかし、のんびりそんなことを続けてはられない。

「助さん。早く行ってください。ここの片づけは私たちがやりますから」

「すみません。では、お言葉に甘えて。行くぞ、早…」

助三郎が振り向いたところに、早苗はいなかった。

代わりに、行方知れずの『渥美』が立っていた。

「早いな。もう変わったのか？」

「こつちの方が速く走れるからな。さてと皆さん、いきなり現われてなんですが、お先に失礼します」

「お仕事がんばってね」

由紀は膝の上の息子と一緒に手を振った。
可愛い男の子に、早苗も手を振った。

「慶ちゃんまたな」

慶太郎は元気に答えた。

「かくにいちゃん、またね！」

挨拶を終えるや否や早苗は助三郎を挑発した。

「俺に勝てるか？ 助さん」

「何だと!？」

二人は藩邸まで突っ走った。

「お前たちはこの一大事に何をしておった!？」

息を切らして藩邸に到着した二人に、雷が落ちた。
その場に居合わせた中で一番位が上の男が怒鳴る男を宥めた。

「…そうカツカと怒るな。二人とも非番だった。遅れても仕方あるまい」

穩便に済ませてくれた彼に、早苗と助三郎は頭を下げた。
頭を上げると、早苗は億さずに男に聞いた。

「…不躰ながら、本日の急な呼び出し、何用でございますか？」

すると、先ほど怒鳴った男はまたもや怒り始めた。
それをまたも先ほど彼を宥めた男が制し、早苗に話し始めた。

「江戸城で、刃傷事件だ」

吃驚した二人は、続きを待たずして質問した。

「誰と誰がでございますか!? まさか…」

助三郎が眼で自分の考えを訴えると、男は溜息をついた。

「まだわからん。それ故こう慌てておるのだ」

不安が皆の心に暗い影を落としていた。
気付くと、部屋に集められていた藩士皆が不安がり、皆同じ言葉を発していた。

「我が殿ではあるまいな？」

「もしそうだったらどうなるんだ？」

早苗と助三郎も不安に苛まれたが、じっとこらえ部屋の隅で報せを待った。

程無く、部屋に向かってくる足音が聞こえた。

「来たぞ！」

「誰と誰だ！？」

一時騒がしくなったが、報せを持ってきた男が上座に立ったこと
でしんと静まり返った。

皆、最悪の事態を覚悟し身構えた。

良く通る声で、男は事件の当事者を告げた。

「赤穂藩浅野様が高家吉良様に刃傷！」

「え！？」

一人だけ、声を上げた者がいた。
それは、助三郎だった。

「ん？ どうした？」

じろりと一同の視線を集めた助三郎は、必死に弁明した。

「なんでもございませぬ。お気になさらず」

すぐに皆の助三郎への興味は失せ、部屋には安堵の音が響いた。

「よかった…。うちには関係が無いか！」

「殿がそのような短慮な真似をする筈が無い」

「浅野様も、乱心が過ぎたな」

一人、また一人、部屋から去って行った。

最後に残ったのは早苗と助三郎。

助三郎は先ほどと同じ場所に、俯き加減で座っていた。

様子がおかしい夫に、早苗は声を掛けた。

「…助三郎。大丈夫か？」

「え？ あ、ああ。なんともない。ちよつと疲れたみたいだ。酒飲んで突つ走ったのが間違いだな」

笑ってそう言った彼の眼の奥に、なにかモヤモヤしたものが見えた。

「…ちよつと来い」

早苗は助三郎を引っ張り、人気の無い縁側に腰掛けた。

「…何か知ってるみたいだな？」

「…何が？」

視線を逸らす彼に、早苗は怯まず言った。

「刃傷事件の当事者を聞いた時のお前の顔、すごく驚いてた。何も知らないって顔じゃなかった」

あるきっかけで耳にした藩の頭同士のいざこざ。

それについて話すには、少し恐れ多かったが、信頼できる『親友』に打ち明けることにした。

「…聞いてくれるか？」

「ああ」

助三郎は早苗に一から話し始めた。

あの日、赤穂藩土堀部安兵衛と会った出来事を早苗に語った。

「…浅野様が、吉良様にいじめられてたって事か？」

早苗もその話に驚きを隠せなかった。

藩の一番上に立つ者がいじめ、いじめられる。

『藩主』の人間臭さを彼女は垣間見た気がしていた。

「…乱心じゃない。何か訳があつて、それはいじめられてたからってことか？」

「安兵衛さんの考えだ。事実かは分からない」

いじめが定かだとして、どうして『刃傷』という行為に及んだの

か。助三郎には理解できなかった。

その根拠である、自身の経験を早苗に語った。

「俺も、ガキのころいじめられた。『仕事ができない』『生意気だ』
って。でも、刀で傷つけようなんて、これっぽっちも思ったことは
無い」

「…そうか。」

「刀は、人を殺す物。人を傷つける物だ。それをその通りに使う心
理が、俺には理解できない」

早苗は覚えていた。

助三郎が剣を使うのは、『守るため』

彼は言った『あいつの笑顔を守るため』

その『あいつ』は、『早苗』だった。

言葉通り、何度も彼に守られ、助けられた。
物理的にも、精神的にも。

そこで早苗は有る考えに至った。

「何かを、守りたかったからじゃないのか？」

「…何か？」

助三郎は早苗を見た。

「殿様の守りたい物なんて俺にはわからないが、なにかあったんだ
と思う」

「浅野様の、守りたいものか…」

二人でそれが何なのかと、思いを巡らせた。

静かに二人で過ごしていると、辺りは薄暗くなっていた。不安になつてきた早苗は、そつと隣の助三郎に聞いた。

「…助さん、浅野様はどうなるんだ？」

「まず、理由を調べるだろうな。どうして抜刀して、斬りかかったのか」

「それで？」

「乱心と故意で処分が別れると思う」

「…無罪放免、なんてならないよな？」

「ああ。殿中での抜刀は御法度。御咎めは絶対に逃れられん」

「そうか…」

二人は大きな溜め息をついた。

早苗を元気づける為に、助三郎は少しでも希望が持てる話をした。

「だが、武家の決まりの喧嘩両成敗って良いやつがある。浅野様だけ痛い目に遇うなんてないさ」

「そうか。吉良様がいじめていたら、吉良様にもお咎めがあるってことか」

…しかし、助三郎の考えは当たらなかつた。

縁側に座っている二人の所へ、殿に仕える小姓がやってきた。

「殿がお呼でございます」

城から一時帰宅した藩主は、蠟燭一本だけの暗い部屋に居た。上座に座ってはおらず、部屋に面する庭で咲いている桜を眺めていた。

「…お呼びでございますか？」

「来たか。近こう寄れ」

言葉に従い、二人は綱條の傍に寄つた。彼は、眼を外の桜にやっただまま呟いた。

「…桜は散り際が美しいと言う、その方らはどう思つっ？」

「私は、そう思います」

「私は、そう思いません」

二人の意見が食い違つた。

「ほう。渥美、思うところを聞かせてくれ」

早苗は、はつきりといった。

「花は、満開が一番元気な時でございます。力を最大限に出し、美しさを主張します。それ故、その時が最も美しいかと」

「そうか。…男にしては珍しい意見だ」

早苗はギクリとした。

ボソツと言った一言が引つ掛かった。

しかし、綱條は違う話題に入っていた。

「それが当てはまるなら、人間も死に際ではなく、生きている時が一番美しいということになるな」

「…それは？」

「…刃傷事件を聞いたであろう？」

「はい」

続きを期待した二人だったが、藩主は黙ったまま何も話は進まなかった。

耐えきれず、助三郎が切り出した。

「…浅野様は、如何相成りましたか？」

少しの間を置いた後、藩主は重い口を開いた。

「残念だが…」

二人は膝の上の両手を握りしめ、覚悟を決めた。

「今宵、切腹だ…」

藩主の思いがけない言葉に、二人は絶句した。

〔05〕 松の廊下

遡る事その日の朝、ある男は天を仰いで呟いた。

「曇りか…」

それは播州赤穂藩藩主、浅野内匠頭長矩。

彼の呟きを傍で聞いていたのは、彼と同じ播州の龍野藩藩主、脇坂淡路守安照（*1）。

「浮かぬ顔だな。浅野殿」

「これは、脇坂殿…」

淡路守に、丁寧に挨拶をした。

先輩に当たる彼は、腕を組み空を見上げてこう言った。

「また奥方の事を考えておったな？」

その言葉に、照れた内匠頭は頭を掻いた。

言われた事は事実。

彼は正室、阿久里（*2）と仲睦まじかった。

美しく優しい彼女と幸せに暮らしていた彼の唯一の悩みは、子が出ない事。

仕方なく弟（*3）を養子にしている。

その日、彼はある約束を彼女として来たばかりだった。

「羨ましい。俺のは嫉妬深くていかん」

彼は指で角がニョキツと出る仕草をして、内匠頭を笑わせた。

「そのような事おっしゃって、叱られますよ」

「あ、もっと角が伸びるかもしれん。おお怖い」

笑い合った後、内匠頭は大きな溜息をついた。

彼の心情をよく理解している淡路守は、穏やかに励ましの言葉を掛けた。

「…お役目お疲れ様。あとひと踏ん張りだ」

「はい…」

しかし内匠頭は酷く思い詰めた暗い顔になってしまった。

彼を元氣付ける為、淡路守は自身の経験から語った。

「…俺もあの爺さん大嫌いだな。お役の時、何度張り倒してやろうと思っただ事か」

苦々しい顔を見て、内匠頭の顔は少し明るくなった。

「某だけが、嫌がらせを受けているだけかと思っておりましたが…」

内匠頭への執拗な嫌がらせは、日々悪化していた。

畳替えの一件もその一つ。

淡路守は続けた。

「どうやら苛めが生きがいになっておるようだ。高家の悲しい性かもしれんな…」

高家は大名に比べ石高が低い。

吉良家と浅野家のそれには大きく開きがあった。

旗本が『指南』という大義名分で大名に大きな顔が出来る。

もつとも、『指南』に対する『礼』を尽くせば良かった。

しかし、内匠頭は『礼』即ち『賄賂』を渡すことを家臣に認めなかった。

この事が、彼への苛めの原因の一つだった。

「…では、そろそろ支度に参加しよう」

内匠頭は淡路守と別れ、支度部屋へと向かった。

少しの後、内匠頭は二人の近習に着替えを手伝ってもらっていた。年長の方の男の名は片岡源五右衛門（*4）内匠頭お気に入りのお家臣だった。

それ故、億さず忠告もできる。

この時も、主にずっと同じ事を念押ししていた。

「…殿、成らぬ堪忍、するが堪忍でございます」

「わかっておる」

もう一人の近習から扇子を受け取り、帯に差しこんだ。

「本日の儀式が終われば、お気持ちが楽になります。今少しの辛抱を」

内匠頭は、子どものようにふてくされた顔で溜息交じりに言った。

「わかった。吉良には辛抱する……」

「殿！」

指南役で、しかも年長の男を呼び捨てにする無礼を窘めた。しかし、主は反省などしなかった。

「言っておくが、源五、俺は何も悪くない。悪いのは吉良様だ。指導もろくにして下さらないですぐに叱責する。理不尽だとは思わんか？」

「…それは、そうかもしれないませぬが」

彼はいつも主の傍にいたので、良く分かっていた。指導を請うため、訪ねて行っても何かしら理由をつけて面会さえほとんどできなかった。

それ故、内匠頭の不満も尤もだった。

「もう良い。それより、晩の花見の為に酒を用意しておいてくれ」

「はっ。心得ました」

阿久里とした約束は、花見だった。

屋敷の庭に咲く桜が満開。

妻の琴の調べを聞きながら、今夜は花見を楽しむ予定だった。

その楽しみを思つてか、内匠頭の顔はすこしばかり穏やかになつた。

そして、支度を済ますと近習に告げた。

「頼むぞ。では、行つてくる」

「行つてらっしゃいませ」

主を送り出すと、部屋には近習二人だけ。

主の袴をたたみながら、源五右衛門は隣の男に声を掛けた。

「十郎左（*5）、殿のお気に入りの酒を買わねばならんな」

「はい。馳走も、用意せねばなりませんな？」

そう言いながら、彼は主の為に用意した予備の衣装を奥から取り出し、眼の前に置いた。

「…片岡殿、これを使うことなど、あるのでしょうか？」

「まだ気を抜いたらいかん。もしもの場合があるからな」

その言葉通り、内匠頭は突然部屋に戻ってきた。

顔は酷く青ざめていた。

動揺している主と反対に、源五右衛門は穏やかに窺った。

「殿、いかがなされました？」

「…烏帽子大紋（*6）であった。…もう終りだ」

その時、内匠頭が身に付けていたのは熨斗のしめ目の着物（*7）に麻あさが袴みしも。

吉良から伝えられた服装のはずだった…。

しかし、待つてましたとばかりに源五右衛門は同僚に目配せし、先ほど彼が眺めていた着物、烏帽子大紋を差し出した。

「…これは？」

「このようなこともあるうかと、持参致しました」

不測の事態に備え、彼は手を打っていた。

内匠頭は喜び、近習に頭を下げた。

「源五、十郎左、本当にかたじけない！ お前たちのおかげで、恥をかかずに済んだ！」

今にも泣き出さんばかりの震える声で、彼は礼を述べた。
家来二人も頭を下げ、部屋はしんみりとした空気が流れた。

「頭をお上げください。某は当然のことをしたまででございます」

「そつでございます。殿、早く御召し替えを」

「わかった…」

二人に促され、素早く着替えを済ませた内匠頭は、笑顔で二人に別れを告げた。

「行ってくる」

「行ってらっしゃいませ」

…これが、主従で言葉を交わした最後になった。

内匠頭は、指南役である吉良上野介義央を探していた。しかし、彼はなかなか見つからない。

焦り、苛立ち、緊張、怒りが混じり合い彼の心は酷く荒れていた。

松の廊下（*8）で、彼の眼はようやく探す人物を捉えた。

素早く彼に近づき、挨拶をした。しかし、彼はそっぽを向きろくに挨拶を聞いてはいなかった。

苛立ちを覚えた内匠頭だったが、ぐっとこらえ本題に入った。

「お教え願います。勅使のお出迎えは、式台の上で致しますのでし
ようか？ それとも下でございましょうか？」

「…はて。ご自分でお解りにならぬか？」

「経験がござらぬゆえ…」

上野介は溜息をつき、余所を見ながら厭味つたらしくぼやいた。

「どうして近頃の若い方はご自分で考えようとなさらぬのかの？
それに、なぜ柳沢様はこのような阿呆を勅使に任命されたのか…」

内匠頭は彼を睨みつけた

阿呆呼びわりされた屈辱に、必死に耐えようとした。
唇を噛み締め、手を握り締め深呼吸をした。
すると、そこへ男が駆け寄って来た。

「ああ。ここに居られましたか、殿」

「どうかしたか？」

上野介の家来らしき男が、なにやら手に持っていた。

「この文を…」

「少々失礼…。ふむ…」

文に眼を落した彼だったが、その眼が冷たく光った。
文を突然、内匠頭に見せつけた。

「そなたの奥方からこのような返歌が来ましたぞ」

「…返歌？ なぜ？」

「わしが送った物の返答ではござらぬか？」

不可解な言葉に、内匠頭は動揺し始めた。

「…失礼ながら、阿久里に？」

「…この前、寺参りではったりお会いしてな。美しい奥方じゃ。…
田舎侍には勿体無い」

ここで、内匠頭は眼の前の老人が自分の大切な妻に、横恋慕して
いるという恐ろしいことに気付いた。

「余計な、お世話かと…」

猛烈な怒りを感じてはいたが、挑発には乗らずに感情を押し殺そ
うと努力した。

そんな彼が面白くなく、返歌の内容も気に入らない上野介の眼は、
意地悪く光った。

「しかし、情けないのう…。そなたの奥方は、ご自身で歌を考えら
れぬようじゃ。誰ぞと同じじやのう」

「…はい？」

なにかが空を切って飛んできた。

内匠頭の袖の上に、先ほど上野介が手にしていた短冊が乗ってい
た。

そこに書かれていたのは紛れもない、妻の文字。

さらぬだに をもきがうへに 小夜衣

わがつまならぬ つまな重ねそ（*9）

内容を理解した内匠頭は、上野介を見上げた。

彼は人を小馬鹿にした笑みを浮かべ、内匠頭の妻を愚弄した。

「お解りにならぬか？ 本歌取り（*10）はおるか、丸のまま取って来ただけではござらぬか？」

妻の上野介に対する拒絶と抵抗、自分に対する貞操を内匠頭はその歌に見た。

老人の横恋慕に、自身で頭を捻って歌を詠む価値などない。

阿久里はそう判断したのだった。

冷静な妻を思い、目の前の男を蔑んで内匠頭はフツと笑った。

一方、目ざとく見ていた上野介は厭味を続けた。

「…見た目だけ美しくとも、中身が無ければ意味が無い」

この言葉に、カチンと来た。

顔の表情にそれが現れ、上野介を喜ばせてしまった。

「浅野殿はご自分で物事を考えられぬ。奥方様も同じこと。あここの殿様があほうなら、その奥方もあほうか。ハッハッハ！」

「おのれ…」

老人に更に強い怒りを覚えた。

彼の我慢の限界が近づいていた。

知らぬ間に、彼の左手は脇に差した小太刀の鞘を、右手は柄を握っていた。

「…おや？ 刀を抜く気か？」

上野介は内心怯えた。

しかし、彼は解っていた。刀を抜けば、お咎めは必定。普通の武士ならば、身を滅ぼしかねない行為は慎む。それ故、自分の身は安全。

強気を装いながら彼は苛めを続けた。

「…そのような物を抜いたら、どうなるかお解りにならぬか？」

内匠頭は我に返った。

手を刀から離すと、畳に手を尽き無礼を詫びた。

「…御無礼、つかまつりました」

「…一応は、解っておられるようじゃな」

内匠頭は心を落ちつかせる為、眼を瞑った。

彼の脛に、今朝自分を見送ってくれた妻の顔が浮かんだ。

「お帰りをお待ちしております」

次に、国元の留守を任せた家老の顔が浮かんだ。

「短慮はいけませんぞ。殿」

そして、最後に先ほど別れた家臣が。

「いつてらっしゃいませ」

彼らとした約束を守るため、彼らの命を守るため、内匠頭は耐え

た。

一時の気の迷いで、すべてを失い、傷つけることもある重要な立場にある己の身を自覚した。

呼吸を整え、己の心の平安を取り戻したと思われた。

しかし、老人は卑劣だった。

大人しくなった若者を挑発し、再び虐めるべく、悪口を並べ立てた。

「この世には美しく賢い女子が山と居る。それなのに、目の前のあほうな奥方だけを可愛がる。まるで…あれじゃな、あれ… そうじゃ、『井の中の蛙』あ、鮒じゃな、鮒」

再び怒りに震え始めた内匠頭を見て、上野介は子どものおどけはじめた。

「内匠頭殿にちょうどいい。鮒じゃ、鮒、鮒侍じゃ！ 鮒殿は雌鮒と国の井戸で仲良く泳いで居られる方がよろしかろう？ はっはっはっは！」

ついに、内匠頭の堪忍袋の緒が音を立てて切れた。

自分を愚弄し、更には大事な妻に不埒な想いを抱いた。

そして、上手くいかなかったと見るや彼女の散々な悪口を並べ立てた。

その陰湿極まりない老人を、彼は許せなかった。

「上野之介！」

「なんじゃ？ ああ！」

内匠頭は抜刀していた。

この段階でお咎め間違いなし。しかし、後戻りは出来なかった。逃げようとする憎い老人目掛け、刀を振りかぶった。

「この間の遺恨覚えたか！」

怒声と共に、彼は老人の脳天めがけ、刀を振り下ろした。

その切先は額を切り裂いた。

パツと血飛沫があがったものの、被っていた烏帽子の縁が短刀が深く斬り込むのを食い止めた。

内匠頭の手には、ガツンという鈍い手ごたえが伝わった。

しまったと思った彼は、二の太刀を繰り出した。

しかし、狙われた上野介は身の危険を感じ、身を翻して逃げ出した。

その老人の背中に向かって再び大きく刀を振りかぶり、一太刀浴びせた。

その衝撃で上野介は、豊に倒れ込んだ。その留めを刺そうと、刀を持つ手に力を入れ、刀を構えようとしたが、腕はピタリと止まっていた。

内匠頭の背後で、男が猛烈な力で羽交い絞めにしていた。

「浅野殿、殿中でござる！ 刀をおしまいなされませ！」

耳元で怒鳴る男の言葉は、怒りに燃える内匠頭の耳には届かなか

った。

彼は羽交い絞めから抜け出ようともがいた。

しかし、男はひるまなかつた。

「浅野殿！ しっかりなさいませ！」

もう一度耳元で大声をあげた。すると、内匠頭は最後の力を振り絞り持っていた刀を投げつけた。

彼の眼には、その場から人々に守られながら立ち去る上野介の姿が映っていた。

彼は悔しそうに叫んだ。

「卑怯なり、上野介！ 待て！」

「しまった！ やってしまつたか！」

内匠頭の友で先輩の淡路守は、騒ぎを聞きくなり松の廊下に急いだ。

そこでは野次馬の各藩の大名がひしめき合い、騒がしかった。

彼らの隙間を縫い、ようやく彼の眼に内匠頭が映つた。

彼は駆けつけた侍たちに囲まれ、身動きが取れる状況ではなかつた。

ぐったりと力無く頂垂れて畳に座りこんでいた。その彼の近くには刀が落ちていた。

そして畳には血の跡が。

赤い点々を眼で追って行きついたのは、刀傷を負つた上野介。

「あの、若造めが…。ああ、痛い…。死ぬ…」

彼はみつともなく額を抑え、茶坊主（*11）に両脇を抱えられ泣き言を言いながらよるよると歩いていった。

その光景に、淡路守の怒りが沸々と沸き起こった。

そして、彼は行動に移した。

彼らにつかつかと歩み寄ると、わざと正面にぶつかった。

「申し訳ございませぬ…」

茶坊主はすぐに謝った。しかし、憎い上野介は無言。

淡路守はこれ幸いに彼を睨みつけ、自身の身に付けている大紋の袖を見た。

そこに白く染め抜かれた輪違い（*12）の家紋には、真っ赤な血が。

それをこれ見よがしに、上野介に見せつけた。

「無礼者！ 当家の家紋に血をつけるとは何事だ！？」

手に持った扇子で老人の頭をパシンと強く打ちつけた。

「ああ…御無礼を…」

老人は大げさにうめき声を上げながら歩み去った。

それを禍々しく睨みつけた後、淡路守は天を仰いだ。

内匠頭は彼を取り囲んでいた侍たちに、取り調べのため別室に連行されて行くこうとしていた。

その様子を、短慮だ、乱心だと鼻で笑う大名もいたが、彼に同情する大名も少なからず居た。

彼等は、内匠頭を哀れそうに眺め、溜息をつくると各々の持ち場へと戻って行った。

人氣が無くなった松の廊下に残っているのは淡路守ただ一人となつた。

彼は、血が染みついた畳の傍に立ち友の無念を慮つた。

「無念であろう…」

我慢が出来ないほどの、酷いいじめ。

それに気付いていながら、助けられなかった自分を悔いた。

そして、何者かに羽交い絞めにされたことで、憎き敵に止めを刺せなかつた武士としての無念さに心を痛めた。

その彼の傍に、男が寄つて来た。

「…殿、早く御召し替えを」

「…あ？ ああ」

淡路守は家臣であるその男と、控室に下がって行った。

彼はこの後、着替え所ではなくなった。

先ほどの男を怒鳴りつけ、有り余る怒りで一発殴つた。

なぜなら、彼こそが内匠頭を羽交い絞めにした男、梶川与惣兵衛

(*13)であつた。

「…殿は、その現場をご覧に？」

大まかな事件の流れを藩主綱條から聞き終えた助三郎は、そう聞いた。

すると、藩主は顔を歪め手を握り締め不快を露わにした。

「すべて終わってから、報告だけを聞いたのだ。あの、あの腹黒い柳沢に！」

あまりにすさまじい形相に、それまで黙っていた早苗がそつと声を掛けた。

「殿。あまり苛立ちますと、お身体に障るかと…」

その声で我に返った綱條は、深呼吸をすると穏やかな口調に戻した。

そして事件後、内匠頭が切腹の沙汰を受けるまでを話し始めた。

〔05〕 松の廊下（後書き）

（*1） 脇坂淡路守安照 わきさかあわじのかみやすてる

現在の兵庫県たつの市周辺の藩の藩主。

松の廊下以外にもあと一回登場。

彼が吉良に対してとった行動は映画やドラマで定番。

（*2） 阿久里 あくり

浅野内匠頭長矩の正室。広島之三好藩出身。

後に落飾して瑤泉院に。

（*3） 弟 あさのだいがくながひろ

浅野大学長広

内匠頭の弟

（*4） 片岡源五右衛門 かたおかげんごえもん

諱は高房 たかふさ

内匠頭一番のお気に入り側の側用人。あの《・・・》シーンで有名。

（*5） 十郎左 いそがいでいじゅうさぶざえもん

礒貝十郎左衛門

諱は正久 まさひさ

源五右衛門同様、内匠頭お気に入り側の側用人。

（*6） 烏帽子大紋 えぼしだいもん

大名の礼服。

家紋は計10カ所（一部違う場合あり）染め抜かれている。

背中、両胸、袖の後ろ、袴の尻部分、袴の前側2カ所。

歌舞伎の『勸進帳』の『富樫泰家』やささまなドラマ、映画の

浅野内匠頭の青い着物が有名。

(*7) 熨斗目のしめの着物

武士の礼服、袴の下に着る着物。

(*8) 松の廊下

好きな人には、松の廊下のしめに刃傷の公式。

正式名は松之大廊下。

大広間（本丸御殿）から白書院（将軍との対面場所）につながる全長約50m、幅4m。畳敷の廊下。

(*9) さらにぬだに をもきがうへに 小夜衣 わがつまならぬ
つまな重ねそ

寂然法師作

『仮名手本忠臣蔵』で使われている設定から引用。
つまのしめ妻、なのしめそのしめで否定を表す。妻を重ねるなのしめ不倫は言語道断というような意味。

(*10) 本歌取り

昔の有名な和歌を取り入れて自分で新たに歌を作ること

(*11) 茶坊主

あまり目立たない人たち。お茶に関する仕事をしている。

(*12) 輪違い

丸が二つ少し重なった家紋。数学のベン図みたいな物。

(*13) 梶川かしかわよそへえ与惣兵衛

加古川かこがわほんぞう本蔵

梶川は旗本、加古川は塩谷判官の友達の桃井若狭助の家臣。

名前だけ前者、設定だけ後者を採用。

〔06〕 春の名残

事件はすぐさま柳沢吉保の耳に届いた。その瞬間、彼は感情を露わにして怒った。

「なぜこんな時に刃傷沙汰など！」

手にした扇子を押し折り、畳に投げつけた。

主の怒りに恐れおののいた彼の家来は、慌てふためき周囲を走り回った。

折れた扇子の代わりに運んで来る者、茶を淹れる者……

しかし、当の本人はすぐさま怒りを抑え静かに皆に告げた。

「少しの間一人にしてくれ」

彼はそう言い残すと、狭い部屋に閉じこもりドカッと胡坐をかいた。

壁と睨めっこをしてなにやら考えた後、突然ニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

「ただでは済まさんぞ、赤穂の若造が……」

そして彼は部屋から出ると、まっすぐに主の元へと向かった。

「なんだと!？」

將軍綱吉も報告を聞くなり、驚きと不快感を表に出した。そんな主に乗じ、吉保は先ほど考えていたことを口にした。

「…勅使の儀式は大切なもの。それを血で穢すとは言語道断」

「そつだ。大事な儀式であつたのに。母上はさぞ嘆かれるに違いない…」

「いかにも。ましてや桂昌院様が忌み嫌つておられる殺生まがいの行為、許されるべきではございません」

大真面目にそう述べ、主の怒りを煽つた。すると、綱吉は声を荒げて言い放つた。

「即刻切腹だ！」

吉保は、心の中でニヤリとした。しかし、面は違つた。

「…切腹でございますか？　しかし、もう少し取り調べを行つてからでも？」

吉保は驚きの表情を浮かべながら言った。彼の思い通りの方向に事は進み始めていた。

「情けは要らん。浅野は今日中に切腹、吉良は…褒美でもやっておけ」

「そつでございますか？」

最後の詰めで、やんわりと確認を取った。
すると、主は吐き捨てた。

「命令だ。浅野切腹、吉良咎め無し。問答無用！」

苛立つ五代將軍は、吉保の前から足音を立てながらを去っていった。

忠実な家来である彼は、行儀正しく頭を下げた。

「はっ。仰せのままに」

少しの後、顔を上げた彼は静かな部屋の中で怪しく笑い始めた。

「…これで良い。」

綱吉の弱みに付け込んだ作戦は、まんまと成功した。

おもしろくて仕方が無い彼は、笑いながら部屋の奥へと進み、いつも主が座る上座には腰掛けた。

そしてふんぞり返って広い部屋を眺めた。

「俺の天下だ…。俺の時代だ…」

政の実権を握っているのは、柳沢吉保。將軍のお気に入りも柳沢吉保。

彼に怖い物はもう無かった。

唯一の目のたんこぶ、なにかと口出しをしてきた水戸藩の老人はこの世にすでにない。

完全に彼の天下だった。

「さて、どれくらい儲かるものか…」

彼は『赤穂』で儲けるつもりだった。

赤穂藩を潰し、藩士を追い出し、領土を幕府の直轄地である天領に変える。

しかし、なぜたった五万石の領土で儲かるのか？

その答えは、赤穂では良質な『塩』が生産されるからであった。塩の権利を幕府が牛耳れば、儲けることができる。

そこから得た富を政に使えば、国が潤う。

しかし、吉保はそんな男ではなかった。

「すべて、俺の物だ。俺にできない事は無い！」

再び高らかに笑い声をあげた。

権力の絶頂にある彼に、何も怖い物など無かった。

赤穂藩が彼の餌食となった。

屏風で囲まれた狭い空間に、内匠頭は座っていた。

少々疲れた様子は見えるものの、彼の眼は座っており佇まいは凜としていた。

そこから『刃傷沙汰の理由は乱心』と導き出せる筈はなかった。

そんな彼の取り調べを行ったのは、近藤平八郎（*1）と多門伝八郎（*2）。

神妙な様子で部屋に入り、深呼吸をすると口を開いた。

「御役目によつて、言葉を改めさせていただきます。

…その方、本日松の廊下にて吉良上野介義央に刃傷。なにか理由があつてのことか？ もしくは乱心か？」

近藤平八郎が気乗りしない顔で、尋問した。

内匠頭は、はつきりと落ち着いた声で返答した。

「本日の刃傷は、恨みあつてのこと。それがすべての理由でござい
ます」

この言葉を聞いたとたん、近藤平八郎は驚き顔になつたが、その隣の多門伝八郎は膝を進めて低く内匠頭に言った。

「…乱心では、ござらぬのか？」

「はい。決して乱心などでは御座いませぬ」

近藤は落ち着くと、多門を突つ突いた。

「少しお時間を頂く。…多門、ちょっと」

内匠頭を見張りに任せ、二人は廊下に出た。
途端に、近藤は困惑を口にした。

「…先ほど吉良殿は『何も恨まれるようなことはしておらん』と言
つておった。どっちが本当だ？」

二人は上野介にも話を聞いていた。

困惑する近藤とは対照的に、多門は力強く言った。

「そこを調べるのが我らの仕事」

「だが…。恨みあつてのことだと、厄介だぞ」

「恨みであるうと、乱心であるうと確かな真実を突き止めるのです」

「そうか？」

「では、そろそろ続きを」

二人は精一杯の努力をした。

念入りに話を聞き、一言一句漏らすまいと調書を取った。

しかし、事件の当事者である浅野と吉良の言い分の食い違いは消
えなかった。

内匠頭は『恨みがあつた』と淡々と述べ、上野介は『何も恨みは
無い』と泣き言を言う。

どちらかが嘘をつき、どちらかが本当のことを言っている。

しばらく頑張った後、二人は内匠頭の前を辞し、別室で相談し合
った。

「…結論は今日中には無理だ」

「そうでしょうな。このような事件は時間を掛けて取り調べねばなりません」

「どつする気だ？」

「…もう少し時間を取ってくれと、上に掛け合いましょう」

「そうするか？」

…しかし、『上』は待つてはくれなかった。

「切腹!？」

二人は吉保に呼び出されるなり、そう告げられ驚きのあまり声をあげた。

「上様の命だ。仕方あるまい」

彼は冷徹に言い放ったが、そこには哀れみの欠片もなかった。それに億さず、多門は意見を述べた。

「しかし、短慮ではございませぬか？ まだ調べが足りず…」

そのとたん、側用人は声を荒げた。

「浅野は即日切腹、吉良はお咎めなし。それで決定だ！」

「そのような…」

「浅野殿は田村殿（*3）に預け、そこで切腹。検死（*4）を滞りなく行うように」

そう業務命令を下すと、彼はその場を後にした。

残された多門は両手を強く握りしめ、齒を食いしばった。

「なぜだ？ なぜ切腹など…」

己の力の無さを悔い、若い藩主を哀れに思った。

しかし、彼にできることは何も無い。

ただ、彼の最後を見届けるだけだった。

「佐々木。頼みがある」

綱條は、庭を見ながら低く言った。

助三郎は、間髪おかず返事をした。

「はっ。なんなりとお申し付けくださいませ」

彼は何の感情も込めず、形通り述べた。

主の命に従うのは、武士として当たり前。

しかし、家来のその言葉を受けた綱條は満足げに助三郎を見て続けた。

「では、赤穂の動向を見張ってくれないか？」

意外な言葉に、彼は驚いた。

徳川宗家に繋がる水戸徳川家の主が、西国の小藩へ肩入れする。

彼の頭をあることが過ぎった。

「…殿は、まさか？」

助三郎は思った。

主は『仇討ち』を望んでいる。

少し恐ろしさを感じていた彼の心情が表情に表れたのを、綱條は見逃さなかった。

「…武士には、そうあって欲しいのだ。泣き寝入りなどして欲しくは無い」

それは、武士として誰でも思うこと。

主を理不尽に失い、仇は無傷で生きている。

恨みを晴らすのが、武士としての忠義である。

しかし、同時に助三郎はある事に気付いていた。

主が異常にこの事件に肩入れする理由。

「…恐れながら、柳沢様の件も原因ではございませんか？」

恐る恐るそう窺うと、彼の思った答えが返って来た。

「それもちろんある。あの男の行為が間違っていたと言うことを、わしは知りたい」

その言葉の奥に、『柳沢失墜』という言葉を助三郎は感じていたが深く追求はしなかった。

大人しく、素直に命に従うことにした。

「…わかりました。…殿の御命に、従います」

助三郎の返事を満足げに見た後、水戸藩藩主は早苗を見た。

「…して、渥美はどうだ？ この仕事、受けてくれるか？」

早苗は、ぎくりとした。

二人の様子をただ見守っていただけだった彼女は、突然の話題振りに驚いた。

しかし、同時に違和感が彼女に沸き起こった。

なぜ藩主は自分だけ、別に伺いを立てたのか。

しかし、深く考えず早苗は返答した。

「はっ。佐々木と共に受けいたします…」

「二人ならば、心強い」

安心した様子の綱條だったが、再び表情は浮かない物に変わっていた。

庭へ向かつて歩き出し、彼は手を虚空に差し伸べた。

その手に、ひとひらの淡い色の花卉がそつと降つて来た。
それを見つめ、呟いた。

「…可哀想にな。まだ若いのに」

丁度その頃、身柄を田村右京大夫の屋敷に預けられた内匠頭が白装束を身に纏い、死出の道を歩み始めていた。
迎えに来た多門の後に続き、ゆつくりと歩いていると彼は突然歩みを止め、庭を見た。

「浅野殿、桜が見頃でございますなあ」

その途端、『桜』という言葉に猛烈な罪悪感を彼は抱いた。
その日の晩の、妻との花見の約束を守れなかった。
ましてや、自分が無言の帰宅をすることになるとは、彼女にとつて酷過ぎる。

大きな溜息をついた彼だったが、せめて妻が庭の桜を眺めてくれていたらと、桜を眺めた。

すると、風で散る桜の中に妻の顔が浮かんだ。
それは泣き顔ではなく、優しい笑顔だった。

しかし、彼は突然現実を引き戻され、桜の木の下のある物に釘づけになった。

「…お前は、源五!？」

桜の木の根元で、袴姿の男が涙を流していた。

それはまぎれもなく朝別れた家来、片岡源五右衛門。

彼は多門の計らいで、声を掛けぬという条件付きで最後の目通りを許されていた。

「…殿」

彼は最後に見る主の姿を必死に目に焼き付けようとした。しかし、それは涙で滲んだ。

対する内匠頭も、涙をこらえ独り言のように言った。

「…約束を守れず、すまなかつたな。皆に、阿久里と内蔵助によるしく伝えて欲しい物だ」

源五右衛門の涙は激しくなった。

嗚咽を漏らしながらも、彼は声を絞り出し返事した。

「…はっ」

その様子を見た後、内匠頭は寂しげな笑顔で呟いた。

「…ちらば」

そして、庭から姿が見えなくなった。

「殿！」

後に一人残され、突っ伏して泣きじゃくる源五右衛門の上に、桜

の花びらが静かに降り注いでいた。

風誘う 花よりもなお 我はまた
春の名残を いかにとかせん（*5）

桜吹雪の中、赤穂藩藩主浅野匠頭長矩の命は散った。
元禄十三年三月十四日の夜のことだった。

〔06〕 春の名残（後書き）

（*1）近藤平八郎

諱は重興しげおき

吉良、梶川、浅野三人の取り調べをした人。
旗本。

（*2）多門伝八郎おかどてんはちろう

諱は重共しげとも

内匠頭の取り調べで有名。

・源五右衛門の面会許可

・内匠頭の切腹場所（部屋ではなく庭だった）に対して猛抗議

・『吉良はいかが相成った？』と聞いた内匠頭に対し、『重傷で虫の息』と優しい嘘をついた
等の逸話有

（*3）田村殿

田村右京太夫

陸奥岩沼藩、一関藩の藩主

芝の愛宕下（築地の辺り？）に屋敷があった。

（*4）検死けんし（検視）

切腹を見守る役目

多門は副検視役

（*5）風誘う 花よりもなお 我はまた 春の名残を いかにと
かせん

浅野内匠頭辞世の句

多門の創作の説も有

「助さん。なに鼻唄歌ってる？」

その日、まだ日も昇らないうちから、二人は旅に出る支度の最終確認をしていた。

しかし、助三郎は昨晩から浮かれ気味だった。

「だって、初めての夫婦水入らずの二人旅だ。お前は嬉しくないのか？」

その言葉には緊張感の欠片も無かった。

にやけて締まりの無い夫に呆れた彼女は『格之進』として彼に向きあった。

「俺はお前と夫婦じゃない」

「…え」

酷く驚いた顔で、彼はその場に立ち尽くした。

早苗はそんなことお構いなしに、続けた。

「俺とお前は同僚だ。わかってるよな？」

建前上、世間体はそうなっている。

ホッと安心した助三郎だったが、減らず口を叩いた。

「クソ真面目が…」

「なんだと？ 不真面目野郎が」

男同士の妙な夫婦喧嘩が勃発する寸前に、元気よくクロが飛び込んできた。

彼は二人の間でピョンピョンと跳ねて二人を和ませた。

「クロ。お前も一緒に行くよな？」

早苗が優しく彼を撫でると、クロは元気よく吠えた。

「ワン！」

「よし、良い仔だ。行くぞ佐々木」

冷たく言い放つと、佐々木は怒った。

「佐々木って言うな！ 渥美！」

「おお！ 俺の名字ちゃんと覚えてたんだな。誉めてやろう」

口喧嘩しながら、二人と一匹は朝靄の中江戸の藩邸を後にした。

日が昇る頃、二人と一匹は海の上だった。

行く先は西国、播州の赤穂。先を急ぐ旅なので、徒歩で東海道を…という手段は即却下。

一番早く、体力が温存できる手段、海路を選択した。

その船旅、男と犬にはそこそこ快適だったが、女の早苗は不満が

山積。

船内は男のみ。まともな間仕切りも無いので着替えもままならない。

更に、彼女の好きな風呂が無い。

『仕事だから文句は無し』『今は男』

そう頭で自分を説得したが、三日目で我慢が出来なくなった。

そこで彼女は助三郎を見張りに立て、身体を拭くことにした。

支度をしながら、彼に釘を刺した。

「しっかり見張っててくれよ」

そんな彼女の隣で、助三郎はクロとじゃれあいながら言った。

「はいはい…。でもさあ、明日の午後には陸に着くんだから別に良いだろ？」

男はそういう考え。しかし、女は違う。

「汗くさいのはイヤなんだ！」

早苗は水を張るための盥を音を立てて置いた。

大きなその音に驚いた助三郎は、ボソツと言った。

「俺は気にならないけどなあ、ちよつとぐらい…」

それは、自分のことを述べてまでだった。

激しい鍛錬をして汗をかいた時、彼は大抵井戸端で手拭いで拭いて済ます。

早苗は必ず風呂に入ったが…。

その早苗は、自分の事を言っていると思い込んだ。夫に『汗くさい』と思われたと感じた彼女は勢いよく水を盥に張った。

そこに移ったのは、半泣きの男の顔だった。

あまりに多い水の量に、助三郎は振り向いた。クロも興味津々で早苗を見ていた。

「お前、まさか髪も洗う気じゃないだろうな？」

夫をキツと睨み、彼女は答えた。

「洗わないよ。出る前日に洗った。黙ってあっち向いて見張りしてくれ」

怖い妻に、助三郎は首を竦めた。

そしてクロの眼をそつと手で覆い、彼に言った。

「クロ。格さんの裸は誰も見たらいけないんだ」

「クウン？」

「恥ずかしいんだってさ」

そう言った助三郎の頭にコツンとなにかが当たった。

「いてっ」

それは笄だった。

彼女は男の姿の時、乱れた髪を整える際それを使っていた。

「危ないだろ！　こんなもん刺さったら死ぬぞ！」

そう言った途端、助三郎はゾツとした。

早苗は、簪を飛ばせる…。お銀直伝の技だった。

その気になれば笄も凶器に変わる…。

「とにかく黙ってる！」

早苗が『身体を拭く』と宣言してからかなりの時が経った。

あまりに長すぎる行水に、助三郎のしびれがきれた。

一緒に遊んでいたクロはいつしか隣で夢の中。

呑気な犬と一緒に彼も寝たいと思ったが、見張りの重役が終わっていない。

「格さん…。まだ終わらんのか？」

「…まだ」

高く澄んだ声が返って来たことに、彼は驚いた。

それは紛れも無く『早苗』の声。

「…おい、女に戻ってるのか？」

「…だって、格之進の身体見るのイヤだもん」

女の声に交じる盪の水の音。

その音は、彼の想像力を刺激した。

男が鍛錬の後にその精悍な肉体の汗を拭きとるより、女がその柔らかな白い肌を清める方が絵になる。

妻の妖艶な姿を妄想し始めたが、すぐに頭を切り替え窘めた。

「男だらけで危ないだろうが！」

しかし、背後からは穏やかな優しい声が返って来た。

「なんで？ 助三郎さまが見張ってるから大丈夫よ」

彼は振り向いて妻の姿を拝みたくなつたが、ぐっところえた。

彼女を怒らせて騒ぎを起こしては、自分たちの身が危ない。

「……だつたら早くしろ。俺は眠いんだ」

「寝たらダメよ！ もうちょっとだから頑張つて」

二人でそう掛けあっていると、人影が。

その者は、船内を見回っていたが、聞きなれぬ音に訝しげな表情で歩みを速めた。

そして、助三郎を呼んだ。

「兄ちゃん、ちょっとこつち来な」

蔽つく、よく日に焼け、いかにも海の男といった風体の彼はその船の頭だった。

呼ばれた助三郎は寝ぼけ眼のクロに早苗の護衛を頼み、彼に従つ

た。

「なんでしよう?」

そう窺うと、頭は低く重く言葉を発した。

「聞こえたよな?」

「なにがです?」

「女の声だよ」

助三郎はギクリとした。

早苗の声が聞かれていた。

妻を守るため、彼は白を切った。

「さあ? 気付きませんでしたか?」

すると、頭は厳しい顔で助三郎に迫った。

「兄ちゃん。もし姿を見たら教えてくれ。俺は女を乗せない主義なんだな」

その言葉に、彼は不安を感じた。

「もし見つけたら、海に突き落としたりするんですか?」

「そんなことはしない。次の港で船から降ろすだけだ。兄ちゃん、俺はそこまで野蛮じゃないぞ。ハハハハハ!」

ニツと豪快に笑った彼に合わせ助三郎も笑った。

「そうですね…。ハハツ…」

無事、逃れたと思ったその時クロが大きな欠伸をした。そして、それに気付いた早苗は彼に声を掛けた。

「あれ？ クロ、助三郎さまはどこ？」

「キャン！」

「なに？ どうかしたの？ 何が危ないの？」

当然、早苗の声とクロの驚いたような鳴き声は船の頭の耳に届いた。

彼の笑っていた顔は厳めしいものへと変化し、脚は早苗の居る場所へと向いた。

「…やっぱり居るぞ！」

妻の危機を感じた助三郎は突っ走り、先回りをして妻に危機を知らせた。

「格さん！ 変われ！」

一か八か早苗に向かって飛び掛かった。

「居たか!？」

頭は助三郎の飛びかかった相手を見て、敵めしい顔を緩めた。

「…なんだ兄ちゃんの連れか。…やっぱり幽霊でも間違つて連れてきたのかもしれない」

なぜかそう一人合点した頭は、傍でおろおろするクロの頭をグシヤグシヤツと撫でた。

「ワン公。幽霊見たら絶対に吠えるんじゃないぞ。地獄に連れて行かれちまうからな」

「キャン！」

クロは怖がってどこかに逃げてしまった。

飛びかかった助三郎の身体の下には、格之進がいた。しかし、かなり気まずい物が有った。

行水の為、諸肌脱ぎになっていた早苗は突然「変われ」と言われたので慌てて格之進に変わった。しかし、脱いだ着物を着こむ間が無く、片肌脱ぎの状態で夫に飛び掛かれていた。

一方、飛び掛かった助三郎はどうすべきか皆目見当がつかず、黙って妻の眼を見詰めていた。

男の身体を見られる事を極端に嫌がる妻の事。必死に眼だけを見て、身体は見えていない事を主張した。

しかし、彼の口は墓穴を掘った。

「…もうちょい日焼けした方が、男らしくてかっこいいんじゃないか？」

次の瞬間、船内に頬を張る盛大な音が響き渡った。

夜中。助三郎は船室ではなく、外で海を眺めていた。

「痛いなあ……」

格之進の『手』で、格之進の『馬鹿力』で張られたせいで赤く腫れていた。

怒り心頭の妻から離れ、痛む顔を海風で冷やそうとのことだったが、あまり効果は無かった。

少しすると、人の気配が。

それは早苗だった。

「助さん……」

背後に彼女は座った。

「格さん、また怒りに来たのか？」

助三郎は痛む顔に耐え、笑い顔を作った。

その彼が振り向いて眼に入っただのは泣きそうな男の顔だった。

「……泣くなよ。お前は何も悪くない」

早苗はそつと腫れた夫の頬に触れ、謝った。

「……ひつぱたいで、悪かった。こんなゴツくてデカイ手で、痛かったら？」

「……気にするな」

暗い雰囲気か二人の間に漂ったが、助三郎は持ち前の明るさで冗談を言った。

「早苗の柔らかい手で触ってくれたら、直ぐに治るんだがなあ」

その言葉で早苗はやっと笑った。

珍しく怒らない彼女に、ホツとした彼も笑った。

しかし顔が痛んだのですぐに止めた。

落ち着いた様子の早苗は背後からある物を引っ張り出した。

「詫びにこれ持ってきたんだが、やっぱり姉貴に甘えるほうが良いか？」

早苗は酒を持っていた。

いつもなら悩む助三郎だったが、制約がある今答えは一つ。

「早苗って言いたいが、今は危ない。今夜は酒だ」

「わかった」

二人は男同士で酒を酌み交わすことに決めた。

よく晴れた海の上に、綺麗な月が掛かっていた。

穏やかな波の音しか聞こえない中、二人はその穏やかな景色を肴に酒を飲んだ。

「海って本当に広いな……」

「だよな……。池や湖とは大違いだ。今は穏やかだが、荒れたら怖い。人間なんかひとたまりも無い」

その言葉に、早苗はふと思った。

「助さんは、泳げるよな？」

「まあな。お前は？」

「泳げない」

女は泳ぐ鍛錬などしない。当たり前のことだった。

助三郎はそのことに気付いたが、酒の席では二人は男。なにも聞かず、さわやかに言った。

「まあ、万が一溺れたら助けてやるから、心配するな」

優しい言葉と表情に早苗はホツとした。

「ありがとう。でも、その前に危ないところには近付かないでおく」

「それが賢明だな」

二人で笑い合った後、助三郎は真剣な面持ちで早苗に酒を注いだ。

「…今回の仕事、長くなるかもしれないが、よろしく頼む。格之進殿」

早苗も、彼に倣った。

「こちらこそよろしく。助三郎殿」

グイツと二人で杯を干し、これからの仕事に思いを馳せた。

「さて。朝まで飲むぞ！」

そう言った助三郎を早苗はいつものように止めた。

「ダメだ。ほどほどが一番」

そう言いながら、船上の酒宴は朝方まで続いた。

次の日、日暮前に二人が乗った船は赤穂に着いた。
潮の香りが漂う港を歩く二人の眼に城が見えた。

「あれが赤穂城だな」

助三郎が足を止めた。

「天守が無いな。規模はでかいのに」

天守が有ればかなり見ごたえのある代物になったであろう建築物を前に、早苗は不思議に思った。
すると、助三郎が彼女に言った。

「天守作る前に金が無くなったらしいぞ」

「へえ。そう言うことが」

「お前ならちゃんと予算やりくりできそうだよな？」

「いや。金の額が違う。難しいと思う」

そんな話をしている二人に、女が声を掛けた。

「お二人さん、お船の旅は楽しかった？」

それはお銀だった。

「え？　なんで居るんだ？」

助三郎は驚いた。

一方、早苗は把握済みだった。

「早かったな。いつ着いた？」

「昨日の朝。弥七さんはもっと前。やっぱり敵わないわあの人には」

「弥七も居るのか？」

助三郎は二重に驚いていた。

その姿に、お銀は訝しげな顔をした。

「ねえ、助さん。貴方なにも格さんから聞いて無いの？」

その言葉に、助三郎はジロリと同僚を睨めつけた。

「…格さん、どういうことだ？」

いつしか仕事の顔になっている夫に、早苗は詫びた。

「すまん。ついつつかり…」

業務連絡が滞っていたことに、早苗は反省した。

「まあいいわ。住む家は確保できたし、最初の早駕籠の到着からの動向はすべて把握済み」

お銀がそう報告すると、二人はまたも彼女たち忍びの仕事の良さに感心した。

「すごいな。さすがお銀」

ほめられた彼女は、鼻高々にはならなかった。

その代わり、少し疲れた顔で言った。

「二人とも、この仕事は覚悟した方が良いわ。長丁場になりそうだから…」

「そうなのか？」

少し不安げに窺うとお銀は間近に見える城を見やり、溜息をついた。

「御城代がね、『昼行燈』で有名だから…」

助三郎はその言葉に引っかかりを感じた。

「大石内蔵助殿。色々と功績を聞いた事あるが…。本当に『昼行燈』なのか？」

お銀は彼の言葉に驚いたようだったが、見解を変えることは無かった。

「わたしはそう思う。弥七さんは違っていて言うけど…。一度二人で一度見てくると良いわ」

二人は彼女の言葉に従うことにした。

早苗と助三郎は赤穂城の屋根裏で弥七と合流した。
ク口は隠れ家で御留守番。

「いつ来た？」

「昨日の夜中で。刃傷の報せは今朝来ましたぜ」

二人は弥七の足の速さに驚いた。

浅野内匠頭刃傷の知らせは、事件が起こってすぐ早駕籠で出された。その早駕籠よりも早く着いたというのは、並の人間にできる事ではない。

「切腹の知らせは？」

浅野内匠頭の切腹が決まったのはその急使が発った後。到着には時差がある筈だった。

「まだです。まあ、明日ぐらいには着くと思えますがね。あの面々がどう混乱するんだか……」

三人は静かに眼下の部屋の様子を見下ろした。
そこには男が二人。

早苗が小さな声で、弥七に窺った。

「あれが、大石殿か？」

「いいえ」

「…じゃあ、誰だ？ 身分が高そうだ」

助三郎が身を乗り出した。そのせいで屋根裏の板が軋み、一同血の気が引いた。

しかし、下の赤穂藩士たちはそれどころではないらしく、気に留めることはなかった。

「助さん。気をつけて下せえ。これだから素人は…」

珍しく文句を言う彼に助三郎は驚いた。

彼は再び怒られないよう、頑丈な柱の上に身を置いた。

「…で、あの方は？」

忍びの血を少しながら持つ早苗は、弥七に叱られることなく屋根裏での見張りを続けた。

先ほど気になった男の正体を再び弥七に問うた。

「家老の大野殿です。ケチで有名」

ニヤリと弥七は笑った。

「…ケチ？」

早苗がキョトンとしていると、弥七は手で何かを弾く真似をしなから言った。

「これが友達ってやつでさあ」

動きに見覚えがある彼女は、すぐに理解した。

「算盤か」

すると、隅で大人しくしていた筈の助三郎がふざけ始めた。

「誰かさんと一緒だな。気が合うんじゃないか？」

そんな夫に、早苗がムキになることはなかった。
微笑を浮かべ、さわやかに仕返しした。

「…助平さん、それは誰の事でございますか？」

「…助平じゃない！」

二人の妙な夫婦喧嘩を呆れ顔で眺めた弥七は、仕事に戻る事に決めた。

眼下では、『ケチの大野殿』が文句を言い始めた所だった。

「大石殿は何処に行かれた？」

眉間に皺を寄せて、大野九郎兵衛（*1）は傍で書き物をしていた男に聞いた。

「はて？ 廁かと…」

その返事に、大野は盛大に溜息をつき眼頭を抑えた。

「またどこぞへふらふらと… この忙しい時に…」

「はあ…。まあ…」

男は、仕事の手を止めず生返事。

そんな彼の隣で、大野は愚痴を言い始めた。

「殿もなぜ刀を抜かれた？ 短慮が過ぎたことだ…」

それは誰でも一度はふと思うこと。

しかし、自分の主の批判など、まして一国の家老がする物ではない。聞いていた男は書き物の手を止め、筆を置くと身形を正し、大野に詰め寄った。

「…少し御言葉が過ぎませぬか。仔細は解りませぬが、殿も何も考えずにした事ではないはず！」

威勢よく意見を述べた彼を胡散臭そうに見やり、溜息をついた。

「声が大きいのう…」

「御家老！ 御家老は殿の事を…」

真剣に何かを話し始めようとした彼の出鼻をくじくように、大野は話を逸らせた。

「八十右衛門殿、勘定が狂いますぞ」

この言葉に、岡島八十右衛門常樹（*2）は猛烈な腹立たしさを覚えた。

そして、彼にきっぱりと言いつつ放った。

「では、御家老、ここは私の仕事場でございますので、早々に御退願いたします」

「なにをそんなに怒っておる？ わしは書類を…」

「一冊の書類を探しに来て、一体いつになったら見つかるのです？ 本当にあるのですか？」

「ここでも喧嘩が始まった。」

屋根裏でも、下でも喧嘩。

呆れた弥七は、仕事を打ち切ることにした。

「御二人さん、今日はここらで引きあげだ」

「助さんも格さんも、もうちつと真面目にやってくださいよ」

二人は城郭の外に出るなり、弥七に御叱りを貰った。

「はい…」

「仕事と私生活をごっちゃにしないでほしい。いいですかい？」

「はい…」

「明日からはしっかりして下さいよ」

「はい…」

仲良くしよげる二人に、弥七は気分を改め今後の計画を話し始めた。

「で、明日だが、おそらく朝には第二陣が来るでしょう。それからが仕事ですぜ。しっかり見張って、赤穂藩がどういう動きをするか見届ける。いいですかい？」

「わかった」

仕事を全うしようという意欲を二人の顔に見る事が出来た弥七は、二人に笑い掛けた。

「じゃあ、今日はここらで帰りましょう。ちっと汚ねえ家なんで片付けないとならねえんですよ」

この言葉に、助三郎は驚いた様子だった。

「お銀が掃除してくれなかったのか？」

「助さん、お銀は掃除なんかしませんぜ」

「え？」

二人の会話の隣で、早苗は黙っていた。

彼女はお銀の事をよく知っていた。

彼女の忍びの腕は一流だが、料理洗濯裁縫はからきしダメな事。

彼女の悪口を言つと身の危険にさらされるといふ事。

「料理もしませんぜ」

「えっ!？」

「食べたもんじゃねえんで」

弥七がニヤリとした時、ひゅつと後ろから何かが風を切つて飛んできた。

早苗と助三郎の間をすり抜け、それは弥七の手の中で止まった。

「おつと危ねえ…。簪はこういう使い方をするもんじゃねえ」

そう言いながらも彼は手の中の簪を投げ返した。

すると、女の声が返つて来た。

「さすが弥七さん。見えなくても掴めるなんてすごいわ」

簪の凶器の持ち主はお銀だった。

彼女は関心した様子で弥七に言った。

「お褒め頂きありがとう。そうだ、お前も飯食いに行くか？」

「ええ。一緒に一緒にするわ」

夕餉に最適な店を探し、四人は街へと向かった。

軽い夕餉を済ませ、これからしばらく使つてあるう隠れ家へ向かう途中、弥七が歩みを止めた。

彼は、少し先から歩いてくる男を見ていた。

「大石殿のお帰りだ……」

「あれか？」

赤穂藩家老、大石内蔵助がどういふ人物なのが知りたい助三郎は、食いつくようにその男を見た。

彼の眼に入ったのは、釣竿を片手に魚籠を腰に下げて歩く着流しの男だった。

腰には小太刀のみ。家老らしからぬ身形に助三郎のみならず、早苗も驚いた。

光圀の供をし、様々な国の藩主や家老に会つてはいたが、ここまで軽い感じの男は二人にとって初めてだった。

あつけにとられて見ていると、内蔵助は傍を通つた魚の棒手売に声を掛けられていた。

「おや、御家老様。今日はどうでした？」

その言葉に、内蔵助は頭を搔いて笑った。

「いやあ、坊主だ。今日がついてなかった」

そして、棒手売の身形を眺め、残念そうにつぶやいた。

「残念、売り切れか……」

暗くなり始めるこの時間に残っているわけがない。

「もうちょっと早うお会いしたら、売ってあげましたのに」

「でもなあ……。すぐ諦めるのもなあ……」

気まずそうに言う彼に、棒手売は一つ提案した。

「御家老様は、一向に上手くならん。一度、名人に習ってはどつやな？」

この妙案に彼は手を打って賛同した。

「おお。それは良い考えだ。知り合いはいるか？」

「そうですなあ……」

二人の立ち話を見ていた早苗と助三郎は、大いに落胆した。

なぜならば、二人には『大石内蔵助良雄』は偉大であるという人物像が有ったからだった。

それは、助三郎が仕事の際、資料で『大石内蔵助良雄』の功績を眼にした事から来たものだった。

内蔵助は、備中松山藩（*3）改易の折、城の明け渡しを拒み徹底抗戦の構えに入ろうとした水谷家家臣を説得し、無血開城に導いた（*4）。

感心した助三郎は、家に帰るとこの事を早苗に語って聞かせた。それ故、彼女も夫と同じく内蔵助に期待をしていた。

しかし、現実はず違った。

「…やっぱり、噂通りの、昼行灯か？」

幻滅した様子の助三郎が、弥七に聞いた。彼からは否定の返事が返って来た。

「いいえ、違います。あの方は、本物だ。昼行灯じゃねえ…。闇を照らす行燈になる筈だ」

人一倍、人の心、中身を見る彼の言葉に、早苗は期待した。

「昼間の行燈じゃなくて、闇夜の行燈か…」

再び、内蔵助を見やると彼は家路に着く所ようだった。

それに倣い、四人も隠れ家へと足を向けた。

その時、彼らの背後から大声が聞こえた。

「退いてくれ！ 急ぎだ！ 怪我したくなかったら退け！」

驚いた四人は思い思いに身を守るため、道の端に寄った。すると間もなく、猛烈な速さで二つの駕籠が走りすぎて行った。

「助さん！」

早苗はすぐにその籠の意味を察知すると、高鳴る胸を抑えながらその名を読んだ。

これからは仕事。助三郎とは夫婦では無く、同僚。

すると、すぐに声が返って来た。

彼もまた、早苗と心は同じだった。

「格さん！ 行くぞ！」

二人は弥七とお銀と共に、『浅野内匠頭切腹』の報せをもたらした早駕籠を追った。

〔08〕 赤穂（後書き）

（*1）大野九郎兵衛おおのくろへえ

ケチで有名、了見が狭い男。見方を変えれば、現実を見て物事を考え、行動を取っただけの人。

『仮名手本忠臣蔵』では斧おのくだゆう九太夫かなり悪いキャラ

（*2）岡島八十右衛門常樹おかじまやそえもんつねしげ

赤穂藩士。藩札交換で活躍。

（*3）備中松山藩びっちゅうまつやま

岡山県中西部、高梁市

（*4）

水谷家の家老が鶴見内蔵助という名前。彼を浅野家の家老大石内蔵助が説得したことから、『両内蔵助の対決』として有名

早苗と助三郎は大広間の屋根裏に陣取った。

忍び二人は何処へとなく姿を消した。

しばらくすると、藩士たちが続々と集まり始めた。

彼らの表情、話し声から、不安な気持ちが生々しく伝わってきた。

「……いよいよだな」

「……気の毒だな」

成行きをすでに知っている二人は、眼下の男たちに同情した。主を失う悲しみは経験済み。

しかし、その喪失は晴天の霹靂。

二人の予想通り、とんでもない衝撃が赤穂城に走った。

男たちの中に、最初声をあげて泣くものはいなかった。

何が何だかわからない彼らは、感情任せに怒声を上げていた。

疑問や憤り、怒りが悲しみに勝った。

「なぜ殿が腹を召さねばならんだ!？」

「吉良は、吉良はどうなった!？」

「殿が亡くなったこの藩はどうなるのですか!？」

「御家老、なにか御意見を!」

多くの者が疑問を口にする中、家老大野九郎兵衛は騒ぎを鎮めよ

うと躍起になっていた。

「わしも分からん！ とにかく静かにせんか！」

しかし、人望が無い彼では男たちを収めることは出来ない。

若い者が、一際大きな声でその場で彼を無視し、彼より身分が高い者に向かって言った。

「大石殿！ 何かおっしゃって下さい！ さっきからだんまりではないですか！」

これに便乗するものが多く現れた。

「そうです。御城代！」

「御家老！ 眠っていらっしやるのではあるまいな？」

「大石殿！」

若い者が次々に内蔵助に視線と罵声を浴びせ始めたが、年配の者たちが窘めた。

「静かにしろ、騒いでは話が聞けん」

その言葉で、大広間は水を打ったような静けさに包まれた。皆、大石内蔵助の言葉を待っていた。

屋根裏の二人も、下の様子に興味津々だった。

「お、ついに昼行燈が化けるか？」

「だといいな」

内蔵助は衆人環視の中、瞑っていた眼をゆっくりと開けた。そして口を開いた。

「…少し静かにせんか。夜更けに煩い」

それだけだった。

それだけを気だるそうに言うと、再び眼を瞑った。

この、なんとも期待外れの展開に、広間は再び騒がしくなった。

「そのような悠長な事を言っておる場合ですか!？」

「そうです！ 殿が、亡くなられたのですよ！」

「これだから昼行燈家老は…」

口々に文句や不満を述べ、落ち着くどころかさらに騒がしくなった。

屋根裏の二人はがっかりしていた。

「あーあ。やっぱり昼行燈なのかな？」

あくび混じりに、助三郎がぼやいた。

その欠伸が早苗に移ったが、彼女はそれをかみ殺した。

若くて体力があつても、船旅で疲れた二人に夜の仕事は辛かった。

「…疲れたな」

思わず、口に出してしまっていた。

すると助三郎は急にしゃきつとして言った。

「俺がやつとくから、お前は帰れ」

「…だつたら我慢する」

「…なら、一緒に帰ろうか。こんな喧嘩見ても仕方ない」

「そうかな？」

二人で帰るの帰らないのと言っている最中に、大広間では動きがあつた。

ついに『昼行燈』に火が灯されたのだった。

内蔵助は眼をかつと見開き、大広間に響き渡る声で男たちを諫めた。

「黙れ！　ここで大騒ぎしても、何になる！」

一瞬で騒ぎは静まった。

広間には決まりが悪そうにうつむく男たち。

そんな彼等に、内蔵助は説いた。

「…殿が生き返るか？　…吉良様への刃傷沙汰が無くなるのか？」

この言葉に反論する者は誰もいなかった。

「…起きてしまった事は変えられない。元には、過去には戻れない」

内蔵助は穏やかに男たちを諭した。

ようやく落ち着きを取り戻し始めた男たちに変化が見られた。

一人、また一人と、鼻を嚙ったり眼頭を押さえたりする者が現れたのだった。

「殿を責めてはいかん。吉良様や上様、幕府を責めてもいかん。…詳しい沙汰があるまで、耐えるのだ」

とつとつ嗚咽を漏らす者が現れた。

突然の主の死、それが遠く離れた江戸で起こった。

信じられない、信じたくない気持ちたちが彼らの中にあつた。

静まり返った広間を見渡し、内蔵助は告げた。

「今夜はこれで解散だ。明日以降、今後の対応を決める。早く帰って休め」

この言葉を最後に、内蔵助は広間を後にした。

「…案外やるな。大石殿」

屋根裏に潜む早苗と助三郎の眠気は吹き飛んでいた。

期待はずれだと失望していた男の姿は、本物ではなかった。

今見た物こそ、本当の『大石内蔵助』
そう信じる二人の顔は明るかった。

「言ったでしょう？ 人をみかけで判断しちゃいけません」

いつしか弥七が助三郎の隣に居た。

助三郎は大いに驚いた。

「あ、弥七。どこ行ってた？」

「見張りですよ。ちっと厄介な奴らのね……」

彼は手に手裏剣を持っていた。

物騒な武器を触る彼の姿に、助三郎はなにか引つ掛かる物を感じた。

「……見張り？」

「……まあ、この話はまた後で。それより、あっち行きましょう」

二人を何処へ連れて行くかというのか、早苗は疲れていたの少し躊躇した。

「何処へ？」

「あっちです」

しきりに先導しようとする彼に、二人は続いた。

三人は弥七に先導されるまま歩き続けた。

城の本丸を出、いつしか城の隅の屋敷の屋根裏に連れていかれた。
た。

そして、その屋敷の奥の一室の屋根裏で弥七は歩みを止めた。

「下を覗いてごらんなさい」

二人は言われるまま、眼下に眼をやった。

そこは、大石内蔵助の屋敷だった。

彼は城から帰るとすぐさま奥の薄暗い一室に籠り、江戸から届いた文を眺めていた。

「…殿、短慮はいけませんと昔から申し上げておった筈ですぞ」

何度も彼は『切腹』という文字を撫でていた。

彼自身、突然のこの出来事に驚き、受け入れきれたはいなかった。

「…なぜ、刀を抜いてしまわれたのですか？」

彼の眼は、『刃傷』という文字を見つめていた。

「…何か、理由があったのですか？ 殿」

その時、一粒の水滴が紙面に落ちた。

その雫は、『松の廊下にて…』の事件現場を伝える文字を滲ませた。

「…いけないいけない。濡らしては駄目な大事な文だ」

彼は文をそれ以上濡らさないよう大事に懐にしまった。
その行為は正しかった。

彼の眼からは、次々と涙が溢れだしていた。

「なぜ刀を抜かれたのですか？ …吉良様と何があったのですか？」

それに答えるものは誰も居ない。

内蔵助は我慢が出来なくなり、とうとう嗚咽を漏らして泣き始めた。

「殿…。どうして、どうして…。」

いつしか灯りは消えていた。

暗い部屋の中、内蔵助はさめざめと涙を流し続けた。

その姿は屋根裏の早苗の涙を誘った。

彼女の脳裏に、光圀と言葉を交わした最後の言葉、最後に見た彼の優しい笑顔が浮かんだ。

二度と聞けないその声、二度と見られないその笑顔。
それを思うと、酷く悲しく辛かった。

泣くまいと我慢していたが、鼻を齧る音で助三郎に気付かれた。

「格さん。大丈夫か？」

「…なんでもない」

彼女は乱暴に眼に溜まった涙を拭った。

その姿に、助三郎は何も言わなかった。

彼も彼女と同じように亡き主を思っていた。

共に過ごした時間は、早苗より長い。

一緒に酒を飲み羽目を外し、早苗に叱られた旅の思い出。仕事で失敗して酷く叱られた苦い思い出。

いい事も悪い事もすべてが懐かしかった。

亡き主を偲び、一つ小さな溜息をついた。

しかし、彼の気持ちの切り替えは早かった。

「二人とも、そろそろ帰ろう」

いつまで居ても悲しみが増すだけ。

そう思い彼は腰を上げた。

「お先にどうぞ。少ししてから行くんで」

弥七は再び手裏剣を触っていた。

ギョツとした助三郎だったが、彼は彼の事情があると割り切り、同僚に声を掛けた。

「格さん、帰ろう」

二人は混乱と悲しみに包まれた赤穂城を後にした。

小気味良い包丁の音と、美味しそうな匂いに釣られ、助三郎はフラフラと寢床を出た。

それは寢坊助な彼にはとても珍しい事。

彼はいつしか台所に来た。

そこには、女の姿が。

手際良く朝餉を作る妻に見惚れ、彼はフラッと近寄り、幸せそうにその姿を眺めた。

「早苗だ」

彼女を背後からギュッと抱き締めた。

「早苗」

しかし、何かがおかしかった。

抱き締めたその身体は、異様に硬かった。

「あれ？」

妻がこんなにゴツゴツしていた筈はないと、彼は再び抱き締めた。しかし、柔らかさを取り戻すどころか、よりゴツゴツした感触が伝わって来た。

おかしいと思いつつも、身体を離さない彼だったが、耳に届いた低い声で現実を把握した。

「助さん、さっきからなにやってる？」

「え？」

見ると、彼が抱き締めていたのは、早苗ではなかった。襷掛けし、手に菜切包丁を握りしめた呆れ顔の男だった。助三郎はすぐさま身体を離し、弁明を試みた。

「…ち、違うんだ。寝惚けたただけだ！」

平手打ちが飛んで来るのを恐れ、身構えた。

しかし、早苗は上機嫌だった。

再び朝餉の支度の手を動かしながら、彼に話しかけた。

「珍しいな。一人で起きて来るなんて」

「え？」

叱られない、手が飛んでこない、睨まれない事に驚いた助三郎はポカンと立ち尽くした。

その彼の開いた口の中に、早苗は卵焼きを一切れ押し込んだ。

「ほれ、褒美だ」

「…ん？」

「どうだ？」

優しい甘さ。

助三郎が作る菓子のように甘い物とは格段の差がある。

「…美味しい」

それはいつもと変わらない、早苗の卵焼きだった。
しかし、作り手は男の姿…。

「よし、助さんこれをそつちに持って行ってくれ。弥七とお銀はもう食べたから、二人分で良いぞ」

「了解…」

助三郎は素直に朝餉の準備を手伝った。

「はあ…」

助三郎は茶碗を片手にこっそりと溜息をついた。

「やっぱ、我慢しすぎたかな？」

寝ぼけ眼で見た妻の幻は欲求不満の成せる技。
そう信じた助三郎は、溜息を再びついた。

朝からあまり元氣のない夫に早苗は気付いた。

「我慢つて、なんの我慢だ？」

「…なんでもない」

男の我慢がなんたるや、見せかけだけ男の早苗にはわかる筈が無

い。

それは、助三郎の悩みの種だった。

親友の『格之進』にできない唯一の相談が『男の悩み』

男の助三郎から見ても、『渥美格之進』は良い男。

頭は良い。腕は立つ。女が放っておかない男前。

しかし、その彼が本当は男ではなく、自分の大事な可愛い妻。そのことに彼は何度目かわからない疑問を抱いた。

「…早苗と格さんが一緒だなんて、やっぱりおかしい」

作る味噌汁は全くもって早苗と同じ。

先ほど口に突っ込まれた卵も一緒。

違うのは姿だけ。

早苗と格之進が分裂し、『格之進』が本物の男になって欲しいとこっそりと願った。

そうすればより深い友達関係を築ける。

そう信じてやまない助三郎だった。

その日の昼、お銀から報告があった。

赤穂藩の藩札の交換が始まったという物。

二人は疑問を口にした。

「赤穂藩は、取り潰しってことか？」

「大石殿は、そう見込んでいるみたいだな」

藩の中でしか使えない藩札。

これが赤穂藩が潰れる事で紙屑同然になってしまふ前に、銀に変える。

混乱に乗じて踏み倒す事も出来なくはないにも関わらず、それを行つ内蔵助に、早苗は感心した。

「やっぱり、『昼行燈』殿ではないみたいだな」

すると、先日『昼行燈』と言つた張本人のお銀が、内蔵助を褒め始めた。

「すごいよ。ケチケチ大野さまが猛反対したんだけど、それを押し切つて満額の六割で交換ですつて」

「…すごいな」

早苗は改めて大石内蔵助の人となりに感心した。

彼女が面白そうにお銀と話している傍で、助三郎は立ち上がった。

「俺はちよつくら偵察がてら散歩行つてくる」

彼は、まだ見ていなかった町人たちの『藩主切腹』に対する反応が見たかつたのだった。

早苗は彼を送り出すと、部屋の隅の机に座り、荷物から取り出した帳面を開いた。

「なにするの？」

覗き込んだお銀に、早苗は快く答えた。

「日誌だ。今回はちょっと分厚い帳面にしたんだ」

嬉しそうに話す彼女に、お銀は笑った。

「…好きねえ。面白い？」

「好きって言うよりも、日課だな。後で絶対役に立つし、何年か経って見返すと色々思い出せておもしろい」

彼女の言葉を聞いた後、お銀はなぜかにんまりとしていた。

「ふうん…。でも、一番最初に書いたのって、『助三郎さま観察日誌』でしょ？」

「…違う！」

それは嘘ではなかった。助三郎の眼に着く行動が多く書き綴ってある。

早苗は猛烈に恥ずかしくなって、お銀に喰ってかかった。しかし、彼女はそんなことに動じない。

「恥ずかしくがらなくて良いでしょう。愛しの助三郎さまをずーっと見守っていた証なんだから」

「知らん！」

早苗は恥ずかしさを紛らわせるべく、墨を摺り始めた。

力任せに…。

「ああ…。そんなにゴリゴリ摺ったら、墨が無くなっちゃっわよ」

その日の夕方、四人となぜか一匹が額を寄せて会議を開いた。
議題は、『赤穂藩は潰れるか』

「…殿様が喧嘩しただけで改易になりますかい？」

弥七が疑問を投げかけた。

「だが、相手の吉良様が死んでないのに、浅野様は切腹だ。極刑だぞ。なにがあってもおかしくない」

助三郎が答えた。
お銀からも質問が。

「だけど助さん、浅野様には後継ぎの弟さんが居るんでしょう？
お取り潰しまでとは行かないじゃないの？」

「…そうだな。大学様が居るからな。でもなあ…」

「だよなあ…」

早苗と助三郎は『改易』という予想をしていた。

「なに？ なにか考えてるなら、言っ頂戴」

唸る二人にお銀がけし掛けた。

その彼女に、早苗が答えた。

「…殿が、『仇討ち』を望んでおられるからだ」

「って事は…？」

「仕える藩を無くした武士は浪人になる。縛る者も、責任を感じる物も無くなる。…そうしたら、やりやすいだろ？」

「そういうことなのね…」

早苗の話に助三郎が補足した。

「当代の上様になって、潰された藩はかなり増えたる？」

「…柳沢様の影響ですかい？」

「そうだ。ちなみに殿は柳沢様を毛嫌いしておられる。今回の浅野殿切腹にも、柳沢様が一枚噛んでいるとおっしゃっていた」

「で、取り潰しは間違いないと？」

「ああ」

「取り潰しになるのはほぼ確定。だけど、それで仇討決行って流れになるかはわかりませんぜ」

「そうだよな…」

一同は溜息をついた。

しばらく沈黙が続いたが規則正しい寝息が聞こえた。

それは会議の一員、クロの物だった。

犬には難しい話が続き、耐えきれずに眠ってしまったのだった。

可愛らしい寝姿に一同は癒された。

これが思考回路の活力源となったのか、動きが見えた。

「助さん。一度江戸に戻っていいですかい？」

「そうだな。殿に報告が要るしな」

「では早速行って来るんで、お銀よろしく」

突然立ち上がり、玄関へ向かう弥七にお銀は驚いていた。

「え？ 今すぐ行くの？」

「当たり前よ。善は急げってね」

弥七はその言葉通り、すぐに姿を消した。

部屋に残されたのは早苗、助三郎、お銀そして眠り続けるクロ。

一人抜けた所で、新たな作戦会議に移ることになった。

しかし、二人はすぐさまお銀から仕事を振られた。

「あなた達に明日からしてもらふ事は、逢引きね」

「は？」

お銀の突然の言葉に二人の眼は点になっていた。

商談かと思つて受け流そうとしたが、彼女は真面目に続けた。

「今後、どう転ぶかわからないでしょ？」

「どついつ意味だ？」

「あなた達の話が当てはまるなら、お家存続が決まったら、あなたたちの密命は無くなる。」

でも、お取り潰しだったら……。気が遠くなるほど長い仕事になる」

その通りだった。

『仇討』と一言に言つてもそんなに簡単な物ではない。

何年も駆けて仇を取つた話もあれば、出来ずに終わる悲しい話もある。

改めて二人は藩主から受けた密命の重大性を感じた。

結局二人は『逢引き』の仕事を受けることにした。

早苗も、少し嬉しそうな助三郎の顔を見てまんざらでもなかった。

その夜、お銀は早苗を風呂に呼んだ。

二人で湯に浸かっていると、お銀は真面目な顔で早苗に話し始めた。

「…今回のお仕事、本当に長くなるかもしれないわ」

「はい」

「だから、これだけは守ってちょうだい」

「なんですか？」

「毎日早苗さんに戻ることに。要はね、一日のうち一時でもいいから、必ず夫婦で居るってこと」

早苗はそれを守れていなかった。

江戸を出てから数日、一度も夫の前で女に戻ってはいなかった。

「仕事だからって言って、ずっと男だとダメですよね？」

根を詰めすぎ、精神を病んだ経験が彼女にはある。

二度とあのような事を起さないよう、気をつける心構えはあった。

「わかってるなら、それで良いわ。お互いに息抜きは必要だからね」

「はい」

早苗は先輩の助言を守ろうと心に決めた。

次の日の朝早く、隠れ家の玄関には女の姿に戻った早苗と助三郎

が居た。

嬉しそつに早苗を見詰める助三郎をお銀は笑い、からかった。

「動きがあつたら連絡するわ。だからそれまで思う存分イチャイチャして来なさいね」

「冷やかすな！」

赤くなりながら助三郎はお銀を軽く睨んだ
お銀はそれも笑つて受け流した。

「では、お土産期待してるわ。行ってらっしゃい」

夫婦は『逢引き』という幸せな仕事に出かけた。

〔10〕 白鷺城

「早苗」

助三郎は黒い犬を少し重そうに抱っこしながら歩く妻に、そつと声を掛けた。

すると可愛らしい黒い眼が四つ、彼に向けられた。

「なに？」

「…なんでもない」

彼はニヤケた締まりのない顔を伏せた。

「あ、なんでもない訳ないんじゃないの？」

彼女は夫のふやけた顔を見て笑った。

「ワン！」

クロも主をからかうように吠えた。

助三郎は正直に言った。

「…ずっと『格さん』だったからさ、呼んでみたくなっただ」

そんな夫に、にっこり微笑んだ。

「じゃあ、助三郎さま」

「なんだ？」

「呼んだだけ」

しかし、助三郎の顔はパツと明るくなった。本当にうれしそうな彼に、彼女は伺った。

「わたしと一緒に、嬉しい？」

彼は即答した。

「嬉しい。初めての二人つきりだから余計……」

突然、早苗の腕の中でクロが吠えた。

「ワンワン！」

彼は主に文句を言っていたのだった。

助三郎はクシャクシャと愛犬の頭を撫でて、彼の機嫌を直そうとしました。

「……怒るなよ。お前も家族だ」

「ワン！」

嬉しそうに吠える犬に、彼は続けた。

「だがな、早苗が重いつてさ。お前も仔犬じゃないから歩けるだろ？」

クロは少し反省したように地面へ飛び降りた。
彼もまた、早苗に甘えたかったのだった。

「…ウワン」

少し残念そうに唸ると、彼は二人の行く遙か先へ走って行った。

「クロ。あんまり遠くへ行っちゃダメよ！」

助三郎は朝からずっと妻に見入っていた。

旅装の妻に新鮮さを感じたからだった。

いつも仕事の旅で隣に居たのは旅装の『格さん』

金銭管理にうるさく、ちよつと主とふざけただけで日誌に書き小
言を言う。

しかし、今回は『遊山』縛られる物は何もない。

助三郎はそつと早苗の手を取った。

「…で、俺たちはどこ行くんだ？」

彼は何も考えていなかった。

頭にはただ、早苗と会える、早苗と過ごせる、しかなかった。

そんな夫の事など百も承知の早苗は、考えていた計画を提示した。

「姫路城、近くで見たいの」

助三郎は二つ返事で快諾した。

久しぶりの妻にデレデレの彼は、どんな無理を言っても通じそうな勢いだっただ。

「わかった。 姫路だな」

「うん」

二人は進路を東へ取った。

…実をいうと、早苗の真の目的は城ではない。

本当の事を言えば、助三郎が嫌がる。

本当にしたいことを胸に秘めたまま、早苗は助三郎と目的の地へと向かった。

城下に宿を取った次の日、城を近くで見ると歩く歩いていた。

二人は諸国をめくり様々な城を見てきた。

しかし、姫路の城は格別。

人気のない見晴らしのいい小高い丘につくと、おもむろに助三郎が呟いた。

「俺は、どの城よりもこの城が好きだ」

隣の早苗も賛同した。

「わたしも。どんなお城よりも、綺麗で優しい感じがするから」

「優しいか…」

妻らしい言葉に、助三郎は笑みを浮かべた。

「あれ？ おかしい事言った？」

彼はキョトンとする妻の顔と優雅な城を見比べ、こう言った。

「いいや。あの城は、早苗みたいだな…」

言われた本人は驚いた。

「なにそれ？」

助三郎は城を眺めながら彼の思うところを述べた。

「お前は優しい。だけど格さんは強い。二人で一人、強さと優しさ
両方兼ね備えている。そういう事だ」

真面目にクサイことを言う夫に照れた早苗は頬を赤らめた。

「もう！」

助三郎はその紅い頬を愛おしげに撫でた。

甘い言葉が続くと思いきや…

「やっぱり、訂正だ。格さんよりお前の方が絶対強い！」

ニヤリとそうのたまつた夫に早苗は食つてかかった。

「なによそれ!?!」

助三郎は走つて逃げだした。

「ほら、怖い!」

「待ちなさい!」

この幸せいつぱいの夫婦を邪魔をする物は、なにも無かつた。

真剣に走る早苗とは対照的に、助三郎はゆっくりと走つた。

格之進相手では死ぬ気で走らないと捕まるが、早苗では着物のせいもあつてかかなり遅い。

それを彼は知っていたし、なにより彼女に捕まりたかつた。

「捕まえた!」

飛びかかつてきた早苗を助三郎はしっかりと受け止めると、二人は原っぱに倒れ込んだ。

「…不覚。捕まつた」

そういう顔は何とも嬉しそうだった。

身体の上の早苗を抱き寄せた。

「…俺は、幸せだ」

妻の温もりを感じたい彼は、さらに強く抱きしめた。

「…早苗だ」

しかし、少しすると早苗から打診が。

「…ねえ、もう、いい？」

「…イヤか？」

驚いた助三郎は、ぱつと妻の身体を離した。
しかし、彼の恐れていた答えは帰ってこなかった。

「ううん。助三郎さまの着物汚れちゃう…」

二人は大人しく、風通しの良い木陰で行儀よく座ることにした。

目の前の城を黙って見ていたが、何を思ったか、早苗がとんでもないことを言い出した。

「そつえば、あのお城、色々居るのよ」

助三郎はイヤな物を感じ、顔をこわばらせた。

『居る』という言葉には何とも怪しい雰囲気か漂っていた。

「…怖い話は無しだぞ」

しかし、彼女は話を止めなかった。

「前、九州の方まで言った時、ご隠居さまとあのお城に上がったでしよ？」

「…あ、ああ」

助三郎の眼が泳ぎ始めた。

猛烈にいやな予感がしていた。

そんな夫を知ってか知らずか、早苗は笑顔で面白げに言った。

「その時ね、色んな気配してすつごく面白かったの！」

助三郎が大つ嫌いな話のネタだった。

すぐさま話を大きく逸らし、それ以上の怖い話が妻の口から出てくる事を阻止しようと試みた。

「…そうだ！ 腹減つたる？ 何か食いに行かないか？」

そう言っておもむろに立ち上がり、一人町の方へと歩き始めた。

「何食おうか？ 何か食べたいものあるか？」

逃げるように先を歩く彼の背中を眺め、早苗は溜息をついた。

「…怖がりなんだから」

その言葉に、言われた本人は振りむいた。

「怖いんじゃない。キライなんだ！」

意地っ張りの屁理屈に早苗は暖めていた計画をそのまま決行する

ことに決めた。

「…やっぱり、一人で行くしかないわね」

なんだかんだいいながら、二人は町の中心に戻り腹ごしらえをした。

助三郎の怖がりはどうしようもないので、早苗は彼が好きそうな話題を持ちだした。

「宮本武蔵も、姫路城に関係有るわよね？」

「ああ。本多忠刻に仕えてたからな」

大日本史を編纂する生業の彼だけある。
歴史は大好き。

「武蔵ってどんな人だったんだろ？」

その中身ではなく、容姿に思いを馳せていると、夫はあることに気付いた。

「良い男だったっていう小次郎鬘貞が女には多いよな。お前もそうか？」

「ううん。あの人名前だけだもん」

「…名前だけ？」

佐々木小次郎はその名字が想う男と一緒にだけ。

真剣に剣の道突き進んでいった男らしい武蔵の姿勢に、その想う男の姿が重なり、早苗は惹かれた。

「…なんでもない」

少し恥ずかしくなって、誤魔化した。

「ふうん。でもさ、宮本武蔵は憧れる。文武両道、芸術も嗜む。凄い人だ」

いかにも彼らしい言葉だった。

「そうになりたい？」

「ああ。剣の腕をあげて、もっと仕事を真面目にやって…」

早苗は向上心が強い夫に、感心した。

少年のように眼を輝かせて己の夢を語る彼を見た彼女の心は、全身全霊で応援したいという気持ちでいっぱいになっていた。

宿へと帰る道すがら、助三郎はやたらきよるきよるする妻が気に掛かった。

「…どうした？」

「ううん。なんでもない」

「…そうか？」

「早く宿に帰りましょ！」

早苗はギュツと夫の腕に抱きつき、宿まで離れなかった。

…そのせいか、宿での夕餉はクロが眼を前足で隠すほどのイチヤイチャぶりだった。

しかし、どうしてかこの少し変わった夫婦の間の甘い雰囲気は、長い間続かない。

早苗はベツタリくっついていて夫に、風呂に入ることをしきりに勧めた。

それを、妻からのお誘いだと思った助三郎は意気揚々と汗を流しに風呂へと消えた。

クロも他の部屋で寝てしまい、部屋には誰もいなくなった。

そして、早苗は計画を実行に移した。

「ごめんね、助三郎さま。…俺一人で行ってくるからさ」

早苗は男に姿を変え、暗闇へと消えた。

目的の地に着くや否や、早苗は背後に殺気立った気配を感じた。それが何ものなのか探ろうとした矢先、声が掛けられた。

「格さん」

その聞き覚えのある声、呼び方に振り向くと、それは助三郎だった。

風呂上がりらしい浴衣姿の彼の顔は怒っていた。

「…あ、風呂上がったのか？」

助三郎は何も言わなかった。

口がへの字に曲がったまま。

「…湯冷め、するぞ。風邪ひくと大変だろ？」

ようやく彼は口を開いた。

「…なんでこんな夜に出歩く？」

「ちょっと用事が…」

早苗は夫の眼を見ずそう言った。

しかし、あまりにも怖い彼の眼に、声がよく出なかった。

「なんの用事だ？」

表情が穏やかにならない彼からの質問に、早苗は思いついたことを口にした。

「…お、男にはいろいろあるだろ？」

誰かさんが良く使った言い訳。

胸を張ってそれを真似て言っただけはみたが、それを使ったことのある本物の男は容易く見破った。

「格さん、それはお前には絶対使えない良い訳だ」

「…なんで？」

「だつてお前、女買えない、博打は金が勿体無いから出来ない、酒は一人で飲まない。だろ？」

すべて正解。

ウソがばれた早苗は打つ手が無くなり、溜息をついた。

すると、助三郎は無茶な妻を叱った。

「抜け出すなら、俺みたいにもうちよつと上手い言い訳を考えろ」

「…わかった。ん？ お前、反省してなかったんだな？」

夫の言葉を逆手にとって逃げようと彼女は試みた。

しかし、上手くいかず。

「…そんなことより。抜け出した本当の理由は？」

二人の攻防戦が始まった。

「ちょっと見たい物が有ったんだ…」

「だったらなんで昼に来ない？」

「…昼じゃ、無理そうだから」

「そんな物があるのか？」

「ある」

「なんだ？ それは」

「言つと、お前が可哀想だからやめとく…」

「はあ？」

早苗はいつになく厳しい夫に、ご機嫌伺いを立てた。

「…怒つてる、よな？」

「当たり前だ。意味が全くわからん理由で抜け出したんだから」

助三郎は大きな溜息をついた。

「…仕方ない、一杯飲みに行こう」

その誘いに早苗は渋った。

「でも…」

「なんだ？ 何がしたい？ はつきり言え」

助三郎はとうとういらだちを見せ始めた。

怖い夫を見たくない早苗は、本当の目的を言うことにした。

「…一枚、二枚って知ってるか？」

そう言ったたん、助三郎の顔には焦りの表情が浮かんだ。

「…し、知らん！」

「…ほら、怖がる。だから黙ってたのに」

「キレイなだけだ！」

本当の怖がりな旦那を笑い、早苗はちょっと彼をいじめた。

「あ、あそこになんか居る！」

「イヤだ！」

助三郎は早苗にヒシと抱き付いた。

夫に抱き締められるのは大歓迎な早苗だったが、しがみつかれるのは好きではなかった。

夫のみつともない格好を見たくなかったのだ。

「…なんだよ。しがみつくなよ」

イヤそうな顔を見ると、助三郎も嫌味を言った。

「やっぱり、柔らかい早苗が良い…」

その彼にすかさず反撃した。

「俺だって、ゴツイお前より美帆にキヤーってくつつかれたい」

「美帆なんかいない！」

「…義兄上、早く私のところにあれを戻してくださいよ」

『格之進』の可愛い『妻』

彼女が助三郎に戻ってから一度も顔を見ていない。

本人は二度となりたくないと拒み続けた。

しかし、早苗の中の『格之進』が彼女を忘れることはできなかった。早苗が助三郎を思うのと同じ強さで、『格之進』は『美帆』を想っていた。

いつか、いつかと、『格之進』は機会をうかがっていた。

「うるさい！ こういう時だけ義弟面するな！」

二人はおバカな口喧嘩を始めた。

この二人を女が見ていた。

「…何をなさっているのです？」

「口喧嘩ですので、お構い無く」

しばらく二人を無表情で眺めていた女はある事に気付いた。

「夫婦喧嘩ができてうらやましい。…でも、じきにできなくなる」

妙な言葉に早苗はドキツとした。

女は憐れむ様子で早苗を眺めた。

そして、その女は行燈も持たず、暗闇へと消えた。

すでに喧嘩はどこへやら。

早苗の興味は、消えた女に移っていた。

「助さん。あの人、お菊さんかな？」

眼を輝かせる妻に助三郎は焦った。

「…なら、今すぐ帰るぞ！」

「…なんで？」

「わからないか！？ あれがお菊さんなら、殺された幽霊だ！ た
かが皿一枚で殺された恨みが有る女だぞ！」

わめく怖がりな夫を笑い、冗談半分に言った。

「…そんなに心配ならついて来てくれ」

助三郎から返って来たのは意外な言葉。

「…わかった。ついて行く」

これに早苗は驚いた。

「大丈夫なのか？ 怖くないのか？」

助三郎は少し顔を赤らめ、ぼそつと言った。

「お前を失う方がずっと怖い」

早苗はドキツとした。

恥ずかしさと嬉しさに頬が熱くなった。

「ありがとう、助三郎」

たまらず、助三郎に抱きついた。

昼間にいちゃいちゃしすぎて、男を演じようという気持ちですっかり失せていた。

ギュツと抱き締め夫に囁いた。

「…大好きだ」

しかし、男の『親友』に怪力で締め上げられ、低い声で甘い言葉を囁かれても、助三郎はあまり喜べなかった。

何より、苦しい。

「…く、苦しい。…死ぬ」

夫の蚊の泣くような悲鳴に早苗は気付き、身体を離した。

「あ、すまん！」

「久しぶりに死ぬかと思った…」

息を整える夫に、早苗は喝を入れた。

「まだ死んだらダメだ！」

助三郎はすぐに立ち直った。

「わかってるよ。早苗と一緒に寝るまでは死ねんからな！」

二人は『お菊』を追うために、暗闇へと足を踏み出した。

〔11〕 怨念

二人は女を追った。

女は、月明かりに照らされている場所で佇み、早苗を見ていた。距離が近くなるや否や、女は物凄い形相で助三郎を睨んだ。

「来るな！」

あまりの恐ろしさに睨まれた助三郎は足を止めた。氷のような眼差しと声。

しかし、早苗に対するものは違った。

「…用が有るなら、その女子だけ。男は来るな」

「…早苗、行くのか？」

妻が自分の手の届かない所へ行く恐怖、幽霊を眼の前にした恐怖。その二つに押しつぶされそうになった。

彼は『行かない』という答えを切に願った。

しかし、彼女が言うわけがない。

「…行く」

助三郎は縄で縛ってでも連れて帰りたかったが、妻の意思は固かった。

「…調べたいんだ。お菊さんがどうして殺されたのか」

「そんなこと…」

「…御老公の遺志でもある。この国の歴史を調べ、まとめる事。それに役立つかもしれないだろ？」

「それも、そうだが…」

「それにな、あの人が俺に言った言葉の意味を知りたい…」

「…どうしてもか？」

「…ああ、どうしてもだ」

妻の硬い意思に、助三郎は折れた。

しかし、己の命に変えても妻を守ると誓った決意は変わらなかった。

「…魔除け、ちゃんと持ってるか？」

それは結婚前に彼が早苗に持たせた御守りだった。

常人がどう頑張っても退治できない、助三郎自身も捕らわれかけた人成らぬ者から彼女を守るための物。

早苗は夫を安堵させるため、それを見せた。

「…いつでも持ってる。お前のくれた魔除けだ。絶対大丈夫」

助三郎は彼女のその笑みを信じた。

「気をつけるんだぞ。無理だけはするな」

「わかった。行ってくる」

早苗は一人、女に近寄った。
やはり、女は人ではなかった。

「…わたしに、何用ですか？」

「お菊さんに、お話しが聞きたくて」

「…わたしの名を？」

「…有名ですから」

悲しそうな笑みをうつすらと浮かべ、お菊は言った、

「…そうですね。では、聞きたいのは皿の話？」

「はい…」

「皆それを聞きたがる…。皿など見たくもない…」

「それは…？」

意外な言葉に、早苗は興味をさらに抱いた。

お菊は悲しみを湛えた眼で何処か遠くを見ていた。

「あの男の父親がわたしを嵌めるために皿を使っただけ」

「…あの男？」

お菊は遠くを眺めたまま語り始めた。

「あの男は、最初は本当に優しくかった…。わたしを好いてくれた…」

お菊の優しい声を聞いた早苗は、遠くで自分を見守る助三郎を眺めた。

恐怖に耐えながらも、そこに居続ける夫に心の中で感謝した。

「『お前以外は要らない』そう言ってくれた」

しかし、そこでお菊の声は悲痛な物に変わった。

「…すべては、身分のせい。わたしが、下女だったばかりに」

早苗は『身分』という言葉にどきりとした。

彼女の先祖は忍び。その血を引くからこそ、男に変わる。

時たま脳裏をよぎる『身分』という言葉。

今、その身分こそ士分で夫と一緒にだが、実家の家格は嫁ぎ先より低い。

早苗の心の隅にあるこの影の部分をお菊も持っていた。

さらに、彼女はその辛さを身をもって体験したようだった。

早苗は、お菊の話に耳を傾けた。

「…ある時、あの男に見合いが来ました。しかし、あの男は断わった。…わたしを妻にすると行って」

お菊は続けた。

「…一番幸せだった。…赤子もできた」

意外な言葉に、早苗は驚いた。

下女と武家の男の恋愛。すなわち、悲恋。

「…打ち明けたら、あの男は喜んでくれた。でも」

「…でも？」

悲しい笑みをたたえ、お菊は早苗に言った。

「下女とまともに結婚するお武家がどこにいます？」

「確かに…」

「わたしは邪魔以外の何物でもなかった」

次第にお菊の声には怒りが含まれ始めた。

「それ故、わたしたちの關係に気付いたあの男の父親が、わたしを亡きものにしてしようと画策したのです」

「…皿と、どのように關係が？」

「わたしは、道具の管理の仕事をしていました。そこに目を付けられて…」

「…お皿を、細工したのですか？」

「そう。ある日突然、『家宝の皿が一枚無くなった。お前のせいだ』と問い詰められ…」

それは早苗が聞いたことのある話。

しかし、それが直接的なお菊の死因ではなかった。

「わたしはそんなことと関係は無かった。でも、あの男は父親には逆らえない。それで…」

早苗は悲運なお菊を憐れんだ。

愛する男の手にかかって殺される気持ちは、彼女には想像できなかった。

「『すまん』それがわたしが最後に聞いたあの男の言葉…。わたしはその時許しました。身分違いの恋に道はない。あの人の本当の幸せのためには、この身は要らない。死んでも、わたしはあの男に愛され続けるって信じていた…」

悲しい恋の結末に早苗は涙しそうになった。

しかし、恐ろしい笑みを浮かべたお菊に、その涙は止まった。

「…わたしがなんでこうやって彷徨っているかわかる？」

早苗は嫌な予感がしたが、あえて答えなかった。

「あの男を恨んで殺したせい…」

「殺した…？」

恐ろしい言葉に、早苗は身をすくませた。
お菊は面白そうに話し始めた。

「わたしが死んだ次の夜、あの男は祝言を挙げた」

「…いきなりですか？」

「そう。おかしいでしょう？ あの男は嘘つきだったの…」

「嘘つき？」

「そう。嘘つき。祝言の席であの男は笑って言った。『腹の子諸とも処分してやった。やっぱり、身分の有る女と結婚するのが得だ。父上の策略はうまく行った』って」

とんでもない男の話に、早苗は愕然とした。

お菊は怨念のこもった眼差しで話を続けた。

「『お前以外は要らない』毎晩そう囁やいた言葉は口から出まかせだった」

「憎くて憎くて、あの男を愛する気持ちは一気に消え失せた。それで、気付いたら、一族もろとも殺していた…」

さすがの早苗も、恐怖と絶望、恨みに満ちた血みどろの話に耳をふさぎたくなった。

しかし、聞いてしまった。

「毎晩恨み事をあの男の傍で言った。そうしたらあの男は、気が狂っていった…。そしてある闇夜の晩、あの男は新妻に手に掛けた…」

彼女は面白そうに笑った。
そして、清々した表情で言い放った。

「ある雨の激しく降る晩に、実の父親も斬り殺した…」

最後にお菊は懐かしそうな眼差しで言った。

「そして最後の月夜の晩、あの男はわたしに気付いた…。そしてまたわたしに同じことを言ったの。」

『…すまん』って「

…それで？」

どうにか早苗は声を出した。

「許すわけないでしょう？」

お菊は恐ろしい眼で結末を語った。

「あの男は勝手に腹を斬った。苦しみ悶えて血溜りの中死んでいった。それでおしまい」

絶望や悲しみを通り越し笑みを浮かべる彼女が早苗は恐ろしくてたまらなかった。

女の怨念より恐ろしいものはこの世にない。

お菊は少し落ち着くなり、早苗を見つめて言った。
その表情は彼女を憐れむものだった。

「貴女も、お気をつけて…」

「…どうして？」

「貴女も同じだから…。わたしと同じ…」

恐ろしい言葉に早苗の声は震えた。

「…なんで？」

「一人の男に、あの男に、いつまでも変わらず愛されるなんて思わない方が身のため…」

あの男というのは間違いなく、助三郎。

夫が自分を捨てる。

絶対にあり得ない。

そのようなことを早苗は思っていなかった。

しかし、お菊の言葉を信じたくはなかった。

「…イヤだ」

「イヤも何も、あの男はもう少ししたらあなたを必ず捨てるの…」

「…怖い」

「…そう、怖い。誰だって怖い。だから、覚悟しなさい」

お菊の絶望と遺恨に満ちた眼に見つめられるうち、早苗は眩暈に襲われた。

愛する夫に捨てられる。そんな日が来ることを早苗は恐れた。

しかし、脳裏に浮かんだのは夫の優しい顔。

『早苗』と優しく呼び、やさしく触れてくれる、やさしい夫だった。

「…助、三郎」

愛する彼の名を呼んだ瞬間、早苗の意識は途切れた。

お菊の狂ったような笑い声と、助三郎の絶叫がこだました。

「…大丈夫か？」

次に早苗の眼に入ったのは夫の不安げな顔だった。

「…助三郎さま？」

彼女が呟くと、助三郎は強く彼女を抱きしめた。

そこは宿の部屋だった。

クロモ心配そうに早苗を見ていた。

「良かった…。いきなり気絶したから、心配したんだ」

泣きそうな声でそう言う夫の腕の中で、早苗の記憶がはっきりしてきた。

「お菊さんが…」

助三郎は即座に彼女を止めた。

「話さなくていい。思い出すんじゃない」

「…「じめんざい」」

助三郎は早苗を布団に寝かせると、自分は畳の上で正座した。

「…念のためだ、明日朝一でお払いしに行こう」

「…うん」

「…もう眠れ。疲れたろ？」

しかし、早苗は眼を瞑らなかつた。

「…助三郎さまは？」

「…朝まで見張ってる。変な物が来たら困る」

すると、早苗は彼に懇願した。

「一緒に寝て」

「え？」

「怖いの…」

助三郎は妻が『怖い』と言う姿をほとんど見たことがなかった。

驚いた彼は、すぐさま彼女と一緒に布団に入り、彼女を抱きしめた。

「…俺がついてる。怖くない」

「…うん」

早苗は夫の胸に顔をうずめると、眠りについた。

「俺が絶対に、守るから…」

助三郎は一晩中早苗を離さなかった。

助三郎は夜が開けると早苗を連れて人伝に魔よけに効く神社へ向かい、払ってもらった。

効き目が薄れたと見える魔除の守りも納め、新たな守りを早苗に持たせた。

その日の夕方、元通り元気になった早苗に、助三郎は夜のお誘いをした。

しかし、いざとなるとどうしても奥手の性が邪魔をする。

「…早苗」

もじもじしながら、切り出した。

「なに？」

「…今晚、その」

「今晚？」

早苗も早苗だった。

恥ずかしいので、夫が何がしたいのかをわかっていても、自分から言わない。

「今晚、一緒に…」

「寝るの!？」

助三郎の目の前でそう声を上げたのは、お銀だった。

「げっ！」

盛大に助三郎は驚いた。

「なによ? 『げっ』て」

お銀はムツとした様子で助三郎を見た。
気不味い彼は眼をそらし、知らんぷり。

「お銀さん、どうかしたんですか？」

「…言いにくいんだけど、お仕事になっちゃった」

「嘘だろ……」

助三郎は激しく項垂れた。

何も夫婦でまともなことが出来ていない。

夜のお誘いはペア。

「……で、どういう状況だ？」

早苗はすかさず格之進に変わった。

横目に、夫が猛烈にがっかりする様子が映った。

突然男に変われば仕方が無い。

「……赤穂藩は潰れる。明後日皆で何か決めるみたい」

「そうか。じゃあ、明日朝にでも帰らないとな……」

「うそだろ！？ まだ何もしてないのに……」

彼の辛い気持ちは早苗も重々承知。

しかし、心を鬼にして『格之進』にして同僚を窘めた。

「助さん！」

「……わかったよ。仕事、だ」

一息入れて、三人で茶を啜っていたが、突然お銀が言いだした。

「驚きだわねえ」

「なにが？」

「助さん、見かけと全然違って酷い奥手」

「は!？」

「プツ」

言われた本人は突拍子もない声を上げ、妻は吹いた。

「だって、その辺の女の子にクサイ事平気で言うのに、早苗さんにはちっともじゃない」

お銀は笑ってそう言った。

早苗もうんうんとうなずき、茶請けの煎餅をかじった。

「それは…その…」

どう弁明すべきかと助三郎は迷ったが、お銀はさらっと言ったのけた。

「はいはい。早苗さんが大事だからでしょ？」

「フン！」

助三郎はそっぽを向いてしまった。

「幸せだな。姉貴」

そうからかう早苗に、お銀は続けた。

「そういう格さんは真逆じゃない」

「…へ？」

「だって、他の女の子一切ダメだけど、美帆ちゃんにはガツガツしてるでしょ？」

固まった早苗を見て、助三郎は大笑いした。

「ハハハ。ガツガツだとき。さすがムツツリ助平殿だ」

助平呼びわりされた彼女は、反撃した。

「助平はお前だ助三郎！」

「俺は助平じゃない！」

「あ、奥手は助平もくそもないか」

「ひるんこー！」

お銀は部屋の隅でつまらなそうにしていたクロにおやつをあげ、そっと聞いた。

「クロ、夫婦喧嘩は犬も食わないって言うけど、あれは食べられる？ 食べられない？」

クロ自身もそれが夫婦喧嘩なのか、男同士の喧嘩なのかわからなかった。

ただ首を傾げて二人を眺めるだけだった。

次の日、まだ暗いうちに宿を立つことになった。

早苗の姿は見納め。

残念そうに眺め、助三郎はため息交じりに妻の名を呼んだ。

「早苗」

「なに？」

「また今度な」

「うん。また今度」

夫婦の楽しい旅をまたいつかと約束を交わし、二人は暗雲たち込める赤穂へと戻った。

〔12〕 約束

「…どうだ？ 様子は？」

助三郎は一足先に赤穂に帰って見張りを続けていたお銀を労いが
てら、眼下の様子を聞いた。

早苗はクロと家で留守番。故に、久しぶりに妻に見送られての出
勤だった。

すこしばかりだが幸せな気分を味わった助三郎だった。
彼とは対照的に、お銀は不満があったようだ。

「…どうもこうも無いわ。全然話し合いに進まないの」

その日は赤穂在藩の藩士皆を集めての大評定。

すこしくらい屋根裏で声を上げても気付かれないくらい、大広間は
うるさかった。

「休憩してる。俺が見張ってるから」

眼下はお銀の言葉通り、『評定』ではなく『混乱』だった。

「大学様が閉門！？」

「だそうだ。しかもな…」

「なんだなんだ？」

「…吉良様は存命だと!？」

「だったら、なんで殿は腹を切らねばならんだ!？」

赤穂には様々な情報が次々に届いていた。

一つは、浅野内匠頭の弟で嗣子であった大学長広が謹慎処分にされた事。

それは、御家存続が絶望的である事を示していた。

それに追い打ちを掛けるように、赤穂城を受け取りにやって来る大名の名前も報せの中にあつた。

そして、二つ目。

それは、吉良上野介の生存。

『喧嘩両成敗』の世でこれは異常な事だつた。

互いに同じ罰を受けるのが普通。一人が切腹もう一人はなんのお咎めも無し。

許せる筈がなかつた。

「許せん! 吉良め!」

若く、血気盛んな者たちは、吉良を恨み始めていた。

しかし、年配の物はもっと大きな、もっと厄介な物を考えていた。

「…お上は、何を考えている？」

深刻な大広間の上、屋根裏で見張りの男、助三郎はうつととし始
めていた。

ただ男たちが怒鳴って、喚く。

つまらないことこの上ない。

そんな彼の目蓋に、愛しい妻の姿が浮かんできた。

早苗がク口を抱っこし、助三郎に手を振る姿だった。

それは今朝見送ってくれた、妻の姿。

『早く帰って来てね。助三郎さま』

可愛い妻の姿に、彼はニヤケた。

「すぐに帰るから…」

その彼を呆れ顔で見ていた者がいた。

その者は助三郎の幸せな夢を邪魔した。

「助さん。見張りの最中に寝るんじゃない!」

揺すり起こされ、助三郎は眼を開けた。

その瞳に映ったのは、同僚だった。

「…あれ、お前、こんなところでなにしてる。今日休みだろ?」

「休みだ。だけど、姉貴から差し入れ持ってけって頼まれたから来たんだ」

そう言つて、格之進の姿の早苗は背後から大きな風呂敷包みを取り出し、助三郎の眼の前に置いた。

「弁当？ お前が作ったのか？」

いつもの乗りでそう聞くと、否定された。

「俺じゃない。姉貴の手製だ」

酒の席でもないのに、己の本来の姿を『姉貴』と呼ぶ。

これも、早苗の気遣いと助三郎は合わせた。

眼の前の『格之進』を『男』と思えば、『早苗』に恥ずかしくて言えない事も言える。

「やった！ 早苗の弁当じゃないと喰つた気しないからな！」

「そうか。そういえば、やけに張り切つて作つてたぞ」

「…へえ。で、お前はおこぼれに預かれたか？」

「いいや。一口もくれなかつた。姉貴はお前の事しか考えてない」

早苗も助三郎と一緒に笑つた。

己を『男』『助三郎の親友』『同僚』と思えば少し恥ずかしい事も言える。

「そうか…。あ、早苗によろしくな」

「おう。じゃあ、頑張れよ」

早苗はすぐに屋根裏から去った。

休憩を終え、お銀が屋根裏に戻って来た。

そろそろ腹が減って来る時間だった。

彼女は助三郎の傍に置いてある風呂敷に気付いた。

「あら？ それ、お弁当？」

「ああ。早苗の手製だ。お前もどうだ？」

「いいの？ じゃあ、御一緒させていただくわ」

助三郎が風呂敷を解くと、中から文が出てきた。

そこには柔らかく優しい文字が。

「お仕事大変ですが、頑張ってください。元気が出るように、助三郎さまの好きな物いっぱい入れました。早苗」

妻の優しさが垣間見える文を手には愛しい妻を思い浮かべた。

これだけでお腹いっぱいになれるような幸せを噛み締めた。

評定は行き詰ったらしく、しばらく休憩になった。

屋根裏の二人もこれを機に、弁当をつつきながらの休憩。

徐にお銀が彼に聞いた。

「…そういえば、最近ちゃんと早苗さんと寝てる?」

大好きな早苗の手料理を頼張り、上機嫌な助三郎は答えた。

「いや、それがさ、機会が無くて水戸出てから一度も……ってなに聞くんだ!？」

途中でおかしな質問をされた事に気付き、顔を真っ赤にして怒った。

お銀はそんな彼を笑った。

「…ねえ。なんでそんなに奥手なの?」

興味津々で見られた助三郎は、恥ずかしくなり彼女に背を向けた。

「うるさい!」

しかし、それ以上お銀が彼をからかう事はなかった。

彼女は茶で口直しをすると、居住まいを正し神妙な面持ちで口を開いた。

「…助さん。真面目な話、いい?」

「…なんだ?」

助三郎も、そっぽを向く事を止めお銀に向いた。

「…早苗さんと、そういう事するのに抵抗がある?」

「え？」

「男と女になるのに、抵抗があるのかって聞いているの」

子どもが一向に出来ない夫婦を、亡き光圀は大層気にかけていた。時たま、寂しげな不安げな表情を見せる早苗を見ていたお銀も心配していた。

なにが原因なのか地道に調べていたが、ようやく彼女はその本当の原因に気付いた。

夫婦として過ごす夜が少なすぎる。

光圀存命中の旅では仕方のない事と割り切っていた。

助三郎が光圀の眼を気にして、我慢しているだけだと彼女も思っていた。

しかし、助三郎が早苗を誘えない光景を目の当たりにして確信した。

率直に質問をし、その答えを待った。すると、彼は俯き加減で小さく言った。

「それは絶対はない……」

「……じゃあ、なんでそんなに我慢してるの？」

「早苗が、大事だからだ」

「え？」

「俺の欲望で、早苗に負担が掛かるのが怖い。早苗をおかしくする

のが怖い……」

お銀はなにも言葉を返せなかった。

なぜなら、彼の中に黒い物を見たからだった。

結婚前、早苗は精神を病んだ。

その原因は誰であろう、助三郎。

その時、彼女は心が壊れ、荒み、自害を凶った。

それ故、助三郎は妻の心が、肉体が、己のせいで傷付き壊れることとに猛烈な恐怖心を抱いていた。

夫婦生活が長くなるにつれ、大分治癒してきたその心の傷。

しかし、完治はしていなかった。

「ごめんなさい。もういいわ……」

お銀は仕事に戻った。

しかし、彼女は夫婦の為に何かできないかと思案を巡らせた。

その日の評定はなにも進展が無かった。

『昼行燈』の家老は上座で眼を瞑って座り、『ケチケチ』家老はおろおろするばかり。

若い藩士は『仇討』だの『籠城』だの過激な事を大声で語り、年寄りたちは涙にくれた。

日が暮れはじめた頃、欠伸を噛み殺している助三郎にお銀が言った。

「助さん、もう帰って良いわよ」

「え？　なんで？」

「貴方にこんなつまらない見張りより、最高に楽しい仕事あげる」

『最高に楽しい』の言葉に助三郎は釣られた。

「お、どんなだ？」

興味津々で聞くと、何とも単純な命令がお銀の口から出た。

「今すぐ帰って、早苗さん誘って寝るの」

「はあ!?!」

助三郎は啞然とした。

「我慢のしすぎは身体の毒」

恥ずかしくてたまらない助三郎は意地を張った。

「べ、別に我慢とか、そんなこと…」

「言い訳は十分。早く帰りなさい」

「だから…」

お銀は助三郎の言い訳など聞く耳持たず。

「あ、そうだ、知ってる？ 女の子も我慢はしてるのよ」

意外な言葉に助三郎は驚いた。

女としては早苗より大分先輩なお銀。説得力はあった。

「…本当か？」

「そう。だから、早く早苗さんの所に行きなさい！」

お銀は助三郎を屋根裏から追い出した。

助三郎は家に向かって悶々と悩みながら歩いていた。

これから向かう家にはクロ以外誰も居ない。

夫婦として夜を過ごすには絶好の機会。

…しかし、次の日に仕事がある。

妻の『早苗』以上に、同僚の『格之進』に負担が掛かる。

彼の眼に妻の妖艶な姿と、同僚で親友の爽やかな笑顔が交互にちらついていた。

「ああ！ 俺はどうすればいい!？」

助三郎は欲望と理性の板挟みになった。

その頃、家では早苗が腕によりをかけて夕餉の支度をしていた。久しぶりの休み。しかし、彼女は一日中『妻』の仕事をしていた。掃除、片付け、洗濯、繕い物：今は、煮物を作りながら傍に座っているクロに話し掛けていた。

「これで助三郎さま喜んでくれるかな？」

「ワン！」

「そう？ たまには奥様らしいことしないかね」

「ワンワン！」

「え？ ……今晚？」

「ワン！」

彼の言葉に、早苗は少し顔を赤らめた。そして、煮物を放置し彼の隣に座り、彼をギュッと抱きしめた。黒い犬は尻尾を振って、早苗の顔を舐めた。

「クロは助三郎さまが誘ってくれると思う？」

「ワン！ワンワン！」

「ありがとう。応援してね」

賢く頼もしい黒犬の頭を撫で、再び料理に取りかかった。

少しすると、クロがすつくと立ち上がった。

犬は耳が良い。

大好きな助三郎が返って来た事をいちやく察知したクロは、早苗に知らせた。

「ただいま……」

玄関で夫を出迎えた早苗は、若干やつれ顔の彼に気付いた。

「お帰りなさい。…疲れた？」

「え？ あ、いいや……」

仕事で疲れたわけではない。

帰り道の『欲望対理性』の精神的闘いで疲れていたのだった。

そんな事とは知らない早苗は少し残念そうに言った。

「ご飯作っただけ……。すぐ寝る？」

助三郎は早苗の『寝る』という言葉に過剰に反応した。

「ね、寝る！？」

「…なに驚いてるの？」

「あ、いや、えっと……。飯が良い。飯にしよう」

助三郎の眼に、先を歩く妻の姿が酷く魅力的に映った。
美しく結び上げた黒髪。白いうなじ…

我慢の限界が訪れつつあった。

押し倒したいという野蛮な気持ちを抑え、早苗の手を取った。

「…どうしたの？」

不思議そうな眼で見上げられた助三郎はもう彼女の事しか頭にな
かった。

口が勝手に動いた。

「…今晚一晩いいか？」

早苗は顔を赤らめたが嬉しそうに頷いた。

「…うん」

それから二人は一言も喋らず夕餉を終えた。

日はとつくに暮れ、いつしか空には月が出ていた。

早苗は月明かりの差し込む部屋で、夫を待った。

寝間着姿の彼がやって来、彼女と同じ布団の上に座った。

そして、小さな声でボソツと聞いた。

「…いまから、良いか？」

「…うん」

助三郎は早苗の頬にそつと触れ、眼を見つめた。
優しく温かいその瞳に、彼は吸い込まれた。

「早苗」

朝日が昇る頃、助三郎は妻を強く抱き締めた。
離したくはなかった。ずっと彼女と居たいと強く願った。

…しかし、それは叶わない。

早苗は名残惜しげに、そつと助三郎の顔に触れた。

「またね」

「またな」

「おはよう」

早苗はわざわざ外に出て、男に変わってから家に入った。
もう少し長く女で居てもよかったが、それでは気持ちの切り替えが
しづらくなる。

助三郎も、態度を同僚に対する物に変える。

「おう。おはよう。昨日は休みどうだった？」

「それなりに楽しんだぞ」

夫婦として過ごした夜があけると、二人は男同士の関係を保とうと努力する。

「そうか…。そういえば、朝飯食ったか？」

その言葉で早苗ははっとした。

夫に朝餉を出す前に男に変わってしまった。

しかし、再び女に戻ることも出来ない。

二人の精神状態では、朝餉どころではなくなる…。

「今から作る」

早苗は男の姿のまま襷掛けをし、台所へ向かった。すると、助三郎もあとに続いた。

「俺も手伝う」

二人で仲良く朝餉を準備したが、互いに未練が強く残っていた。押し黙って黙々と作業し、結局互いに一言も喋らず朝餉を終えた。

洗い物を終えた早苗の眼に、寂しげな夫の姿が映った。

縁側に座り、外をぼんやり眺める彼の横顔に、早苗は悲しくなった。

一言詫びを言いたくて、彼の隣にすこし距離を置いて座った。

「…助さん」

「…ん？ なんだ？」

「ごめんな…。俺のせいで…」

己が男に変われる能力を持ったせいで、仕事をしなければなら
ない。

そのせいで、夫婦で長い時を過ごせない。

しかし、助三郎はほほ笑みを湛え優しく言った。

「いいや。お前はなにも悪くない。気持ち切り替えれない俺の方が
悪いんだ」

「だが…」

「早苗。自分を責めるんじゃない…」

いつしか、互に見つめ合っていた。

姿こそ男同士だが、心は男女。夫婦。

助三郎は恥ずかしげに眼を逸らせた。

早苗も彼を見るのを止め、庭を眺めた。

少しすると、助三郎が口を開いた。

「早苗。やっぱり、悪いのは俺でも、お前でもない」

「…他に居るのか？」

すると彼は忌々しげに吐き捨てた。

「悪いのはすべて、柳沢様だ」

「…え？」

早苗が見た夫の眼は、怒りに燃えていた。
私怨以上の怒りをその瞳に見た。

「…利を貪り、地位を得る。その為には人の命まで切り捨てる。その悪人のせいだ」

正義感が強い夫の言葉を早苗は黙って聞いていた。

「…あの方のせいでこんな事件が起こった。だから俺らにこんな面倒な仕事 came」

いつ終わるか解らない、先の見えない仕事。

いつ夫婦の時間が持てるのか。

いつ水戸に戻るのか。

皆目見当がつかない。

助三郎は悲しげに呟いた。

「御老公が生きてたら、こんな事件起こらなかつた…」

世直しをした光圀。

この世のすべての悪を取り払う事は出来なかつたが、彼のおかげで救われた命は少なくなかつた。

正しい道へ、人々の足を向けさせる事もあつた。

その一役を担っていたのが、この場にこの世に残された二人だった。

二人はこの時、柳沢吉保を裁けない悔しさを感じていた。彼は天下の將軍の側用人。飛ぶ鳥を落とす勢いの彼に立ち向かえる者は今の世の中、誰も居ない。

かつて彼を牽制し続け、力を抑えつけた光圈は、今居ない。

突然、助三郎が思いついたように名を呼んだ。

「格さん」

「…なんだ？」

「格さんの『この紋所が目に入らぬか！』 聞きたい…」

不思議な要求に早苗は驚いた。

「なんだいきなり？」

助三郎は悲しみを抑えた表情で呟いた。

「懐かしくなったんだ。御隠居と旅してた時が…」

早苗も、その言葉に懐かしさが溢れだした。

「そつだな…。じゃあ、一回だけ」

「お。やってくれるか？ 本気でやってくれよ」

「わかった」

早苗はその場に立ち上がり、居住まいを正した。

そして、右手をかざした。

しかし、その手の中に、あの印籠はもう無かった。

印籠は無くとも、早苗はあの頃の気持ちを思い出し、あの台詞を諳んじた。

「この紋所が眼に入らぬか！ こちらにおわす御方をどなたと心得る。

恐れ多くも先の副将軍、水戸光圀公にあらせられるぞ！」

光圀は居ない。早苗と助三郎の眼の前に、恐れ慄く者も誰一人居ない。

しかしただ一人、満足げに眼を細める男がいた。

「いつ聞いても惚れ惚れする…。さすがだな、格之進」

声を張り上げたおかげか、なにやら心が少し晴れた心地の早苗だった。

しかし…

「だが、助さん。これが全部じゃない」

「なんで？」

「…助三郎の『控えおろう！』がないだろ？」

言われた本人の顔に光が差した。

彼は早苗の横に立つと脇差を抜き払い、声を張り上げた。

「一同、御老公の御前である。頭が高い！ 控えおろう！」

二人の前に、平伏す者は誰一人いなかった。

ただ、庭の草木が風にそよぐだけだった。

それから二人は思い出に浸るように、何も言葉を交わさず、縁側に座っていた。

いつしか、早苗は姿が男だという事をすっかり忘れ、夫にくっついた。

ぴったりと寄り添い、彼の肩に頭を寄せ、ほんの少しの幸せな気分浸っていた。

しかし…

「…早苗」

「…なんだ？ 助三郎」

「鬚が、少しくすぐつたい…」

「…へ？ 鬚？ あっ…。しまった！」

早苗は夫から勢い良く身体を離した。
男同士でくっ付いていた事に、彼女は焦った。

「…どうした？ そんなに驚いて」

「すまん、俺、俺…」

男の姿にも係わらず、女の心を抑え忘れた。
酷い気の緩み、心の隙に気付いた彼女はうろたえた。

いろんな思いが交錯して乱れ始めた心を落ち着かせようと、彼女は眼を強く瞑り息を整えた。

しかし、心が落ち着く前に彼女ははっとして眼を開けた。

夫の大きく暖かい手が、早苗の手に重なっていた。

そして、顔を上げた早苗の眼に入ったのは、助三郎の瞳に映る『格之進』だった。

「…我慢、してるんじゃないのか？」

「…へ？」

「…我慢してるなら、言ってくれ。その姿が嫌なら、正直に言ってくれ」

震える声で、助三郎はそう言った。

しかし、早苗は覚えていた。

『…格之進が居なくなるなんて俺は耐えられない』

その時は嬉しかった。

自分ともう一人の自分。両方受け入れてくれる夫に心から感謝した。しかし、今この瞬間、彼女は男の姿を捨てたかった。ただの女に、助三郎の妻だけになりたかった。

「…すまん。助三郎」

早苗は変わり身を解き、助三郎に抱きついた。

「ごめんなさい…。助三郎さま」

彼は今にも泣き出しそうな彼女をしつかりと抱き止めた。

「大丈夫か？」

夫の腕の中で、早苗は訴えた。

「…お願い。もうちょっと、あとちょっとだけ、女で居させて」

結局、早苗は昼まで助三郎の腕の中に居た。

一度、見張りにやってこない二人を心配したお銀が覗きに來たが、彼女はなにも言わずに去った。

早苗の乱れに乱れた心は、助三郎と触れ合う事で落ち着きを取り戻した。

彼女は、スッキリとした顔で夫を見上げた。

「…助三郎さま」

「なんだ？」

「…もうそろそろ、変わる」

助三郎は深刻な表情で彼女を見つめた。

「…無理はするな。イヤだったら、イヤって言うんだ」

早苗はその言葉に笑みを浮かべて首を振った。

「無理してない。イヤじゃない」

「…本当か？」

「本当。わたしは、貴方の親友で、同僚で、義兄弟でも居たいから…」

それが早苗の結論だった。

妻の答えに、助三郎は若干の不甲斐無さ申し訳なさを感じた。しかし、言葉にはしなかった。その代わり、早苗を力強く抱きしめ彼女の耳元で、ある約束をした。

「…早苗。この仕事が終わったなら、二人きりで温泉行こう」

「…温泉？」

「ああ。温泉でゆっくり過ごそう。一日中一緒に。いや、ずっと一緒に居よう。誰にも邪魔されずに」

早苗は、夫の顔を見つめた。

彼の優しく強い瞳には、『早苗』が映っていた。

「約束、ね？」

「約束、だ」

二人は静かな部屋で、長い長い口付けを交わした。

〔13〕 真意

「助三郎さま！ごはん！」

早苗は助三郎の布団を引き剥がした。

「もう…？」

中で丸まっていた男は、嫌そうに目を開けた。
彼女はその男に説教を始めた。

「なんでそうやって布団の中で丸まって寝るの？」

「…はあ？」

未だ寝ぼけ眼の助三郎は大あくびを飲み込んでいた。
妻の質問の真意がわからず、答えあくねていると彼女はいそいそと
布団をたたみ始めた。

「髪結いを呼べないんだから、もうちょっと私の手間考えて寝てくれない？」

その言葉で彼は頭に手をやってようやく気づいた。
鬘が乱れている。

早苗は『助三郎さま』の髪を結う事はお手の物。
しかし、『助さん』の町人鬘は未だ苦手だった。

「すまん…。ま、今日も何もないうから適当でいいよ」

再び大きなあくびをした。

赤穂に戻って来たはいいが、城では大きな動きが全然なかった。毎日評定、評定の堂々巡り…。

それゆえ、張り込みはお銀に任せ、二人はのんびり過ごす日が多くなっていた。

しかし、早苗はいつも早起き。

何かしらすることを見つけ、絶えず動いていた。

「ダメ。良い男が台無しでしょ？」

助三郎は、彼女に礼儀正しく頭を下げた。

「…お褒めいただき、恐悦至極」

しかし、乱れた髪と肌蹴かけた寝間着姿でやっても何の締りもない。

早苗は彼の様子をクスリと笑った。

「はいはい。早く着替えてご飯にしましょ」

夫婦が朝食を囲む隣で、お銀は早々に出かける支度をしていた。矢絰模様の着物で、髪を武家風に結い上げ、大きな風呂敷包みを手にしていった。

「ちょっと二三日留守にするわ」

「女中奉公か？」

「そう。でもどうにかならないのかしら、お揃いの矢絰模様って」

いやそうに顔をしかめ、気に食わないのか帯の位置を試行錯誤し始めた。

彼女を面白げに眺め、早苗は以前から疑問に思っていたことを口にした。

「録って出るんですか？」

「もちろん。結構くれるのよこれが」

お銀の潜入搜索は、時に小遣い稼ぎの意味もあった。

「でも、気をつけてくださいね」

早苗が心配すると彼女は簪を素早い動きで逆手に構えた。

「大丈夫。何時でも息の根止められるから」

そう笑顔で言った美しい顔の裏に忍びの性が垣間見えた。彼女の言葉に引っかかりを覚えた助三郎は小さく聞いた。

「…あのさ、なにかヤバイの居るのか？ 弥七が怖かったんだが」

弥七が何かを警戒するそぶりを助三郎は何度か見ていた。しかし、お銀は全くそんなことはなかった。

「もしかしたら、あれがヤバイっていうのかしら？ 吉良さまの忍びとか、公儀隠密とか？」

二人の顔がさっと青ざめた。

「それって、かなりヤバイぞ」

「うん。危ない…」

「そう？ でも、ほかにもうじゃうじゃいるわよ。日本中の藩の忍び」

あっさりと言ってのける彼女に夫婦は驚いた。普段彼らはそんな忍びに遭遇してはいなかった。

「本当ですか？」

「そう。直接関係無いのに、お殿様の興味本位でここまでくるなんて可哀想でしょ？」

「興味本位なのか…」

助三郎が遠くを眺めるような眼差しでつぶやく姿を、早苗は黙って眺めていた。

お銀が出て行った後、夫婦は茶を啜りながら一息ついていた。助三郎はふと思いついたように早苗に向いた。

「…そう言えば、早苗は潜入捜査とかしないよな？」

「…へ？ …うん、しない」

早苗は一度だけ女の姿で潜入捜査をした。

しかし、助三郎はそれを知らない。

その際、身の危険に晒された。

恐れた光圈がそれ以降二度と『早苗』を作戦に使うことはなかった。あの晩の仕事は恐ろしかったが、同時に大事な思い出でもあった。それ故、夫には黙っていた。

「…潜入捜査はお銀さんのお仕事。わたしは、助三郎さまと一緒に居ることがお仕事」

「…そうか」

その日の昼間、早苗は江戸に送る報告書をしたためていた。

そこへやってきたのは助三郎。彼女の背後に腰掛けた。

「…格之進、聞いてくれるか？」

本式の名で呼ばれ、はつとした早苗は彼を振り向いた。

背筋を伸ばし正座するその姿は、町人の身形ではあったが『佐々木助三郎』そのもの。

早苗も彼に習い、身形を正し向き合った。

「なんだ？ 助三郎」

彼は早苗をじっと見つめた。

それは、早苗に対する眼差しではなかった。

男が男に対する、真剣な何かを訴える物だった。

「俺は、殿の為にこの仕事をしてるんじゃない」

早苗ははっとした。

彼女の動揺に気づいた彼は説明し始めた。

「…殿が興味本位で俺たちに仕事を振ったとは思っていない。だが、俺は綱條公の為にやってるんじゃない」

「…だったら、誰の為だ？」

早苗はなんとなく感づいた。

しかし、彼の真意を確かめたかった。

「…御老公の為だ」

その答えに早苗は確信した。

夫は藩主に表向き忠誠を誓ってはいる。しかし、心の底から忠誠を誓うのは徳川光圀ただ一人。

亡き主を今でも慕い続けるその心に早苗は打たれた。

そして、その心が赤穂侍たちの中に存在するのだろうか、思いを巡らせた。

有ってほしいと、強く願った。

反応をうかがう助三郎に、早苗は穏やかな笑顔で答えた。

「助三郎、俺もだ」

『格之進』の心は助三郎と一緒に。

…『早苗』の心は『助三郎さまの為』だったが。

ほっとした様子の助三郎に、穏やかな表情が戻った。

「…茶淹れてくる。ちょっと一息入れよう」

「ああ」

助三郎は、早苗の為に茶を淹れに台所へと向かった。

彼は茶請けに煎餅を選び、皿に盛った。
それをクロが見ていた。

「ワン！」

「ん？ 良いんだ。早苗は饅頭だが、格さんは煎餅なんだ」

「ワンワン！」

「なに？ 一つだけだぞ」

クロにねだられ、彼は煎餅を一つ差し出した。
うれしそうにそれを啜えたクロの頭をなでようとしたその時…

「何してくれた!？」

男の怒鳴り声が家の中をこだました。

驚いた助三郎は茶も菓子もそのままに早苗の居る部屋に直行した。
クロも煎餅を啜えたまま、主の後に続いた。

「格さん! どうした!？」

助三郎の目に入ったのは、半泣きの格之進だった。
机の横に立ち、その上の文を指差しながら助三郎に訴えた。

「弥七が風車刺した! 穴空けた! 二日かかって、やっとここま
で書いた文に!」

彼女の努力が無駄になった。
ポンと肩を叩き、慰めた。

「…可哀想に」

「書き直した…。せっかく今日終わると思ったのに…。また明日も
この格好だ…」

早苗は己の右手を睨み付けた。

彼女は必ず男の姿で仕事をしなければならぬ。
それは文章を作成する時でさえ…。

なぜなら、筆跡が早苗と格之進では全く違うから。
女の筆跡で書けば怪しまれる。それゆえ、今まで藩に提出した物
すべての書類は男の姿で書き上げた物だった。

「俺が代わりに書く。な？」

助三郎が俯く早苗にそう言った途端、早苗はぱつと顔を上げた。

「ダメだ。『佐々木に書かせるな』って言われたろ？」

文章を書くのが好きな早苗は毎日日誌をつけている。
そのおかげか、文章力もかなりのもの。

上司からの評判も中々良い。

対する助三郎は仕事をあまり真面目にやらない。
文章もそこそこ。それゆえ、上からとうとうその命が下ったのだっ
た。

「どうせ俺は文章が下手だよ……」

一人がうなだれ、一人が拗ね、一匹が煎餅を口に啜えたまま立ち
尽くす部屋で、一人だけ冷静な男が居た。

弥七だった。

彼がこの騒動の発端となったにもかかわらず、彼に悪びれた様子
など全くない。

彼は赤い風車を回収すると、ニヤリと笑った。

「格さん、報告書は書かなくていいんで」

「なんで？」

「お二人の口から、殿様に直接報告すれば済むんでね」

そう言っつて彼は懐から分厚い文を取り出した。

次の日、早苗と助三郎は久しぶりに城に張り込んでいた。今度は床下。弥七からの指示だった。

「…これで一段落着くかな？」

「たぶんな」

昨日二人が受け取った文に、江戸に戻れとの命があった。なぜなら、この一連の刃傷事件に一旦キリがつくから。

その証拠が、明後日に決まった城の明け渡し。それを見届けるのが二人の赤穂出立前の仕事になった。

赤穂城の一室で家老二人が話し合っていた。

「…大石殿、淡路守様から城明け渡しについてのご相談が」

大野九郎兵衛が、文を手にそう声をかけたが、

「おや、受け取りは淡路守様？ これはまた、お上も粹なお計らい」

なんとも気の抜けた返事に、九郎兵衛は肩を落とした。

「大石殿、もう少し真面目にやってはいかがかな？」

「これはどうも失礼。まあ、仕度は準備万端。特に打ち合わせは不要にてとのお返事を」

「…ではそれで。ところで、昼過ぎからの評定は如何致す？」

「まあ、なるようになりましょう。ハハハハハ…」

あつげらかんとした彼に、九郎兵衛は更なる不安を覚えた。しかし、城代家老に任せるしかない。

「では、よしなに…」

彼の不安は的中した。

評定の席で城の明け渡しを正式に告げるや否や、若い藩士中心に不満の声が沸き起こった。

こうなつては九郎兵衛では收拾をつけられない。内蔵助の出番だった。

「大石殿、お任せ致す…」

少しばかり嫌味に言ったが、本人は気にする様子も無く上座に立った。

そして、声を張り上げようとしたがその必要は無かった。

一瞬で、大広間は水を打ったように静まりかえっていた。

しかし、その中の年配の男から声が上がった。

「大石殿、真意をお聞かせ願えぬか？」

声の主を目に捉えた内蔵助は、彼に聞いた。

「某の、真意と申されますと？」

彼は、強い眼差しで彼を見た。

「素直に城を明け渡すなど、貴方の考えではないはず……」

その言葉に、再び部屋はざわついた。

男は内蔵助から視線を逸らすことがなかった。

射るような強い視線に、彼はこの場で考えていた計画を始動することに決めた。

それは彼の目的を達成させるための、大いなる計画の第一歩にすぎない。

しかし、重要な第一歩だった。

深呼吸をすると、よく通る声で告げた。

「…某は明後日、城を明け渡す気はござらぬ」

誰一人、その言葉に目に見える反応はしなかった。

しかし、皆その言葉に驚き、動揺していた。

先ほど内蔵助に声を掛けた男、吉田忠左衛門兼亮（*1）は満足げな表情を浮かべた。

そして再び内蔵助に力強く言った。

「して、如何致すおつもりか？」

内蔵助は即答した。

「城を枕に、追い腹を斬り、殿の元へ」

再び城は大混乱にいたった。

一人だけ冷静にこの状況を眺めていた男がいた。

冷静というより、彼らの無謀な計画を愚かな選択だと見下していた。

「…については行けぬ」

彼は大広間を後にした。

この日、『ケチケチ家老』こと、大野九郎兵衛知房はこの日姿を眩ませた。

…この後、何年も『裏切り者』『不忠臣』と称される。
そんなことなど、この時の彼が知る由も無かった。

次の日、大広間には切腹袴に身を包んだ男たちがいた。
早苗と助三郎もすっかり床下に張り込んでいた。

そつと様子を伺い、藩士の数が目に見えて減っていることに二人

は驚いた。

『切腹』と聞いて、逃げたに違いなかった。

「助さん、追腹（*2）は御法度だよな？」

「ああ。だから、大石殿の真意が切腹な訳が無い。俺はそう踏んだ」

彼の自信が有るからこそ、二人はその場に居た。

もし、切腹などするのであれば、助三郎は早苗を家に縛り付けて一人で出てくるはずだった。

「…やっぱり仇討ちなのかな？」

早苗は、どつちにしる物騒な結果になることに心を少し痛めた。

「方々、某と行動を共にしてくれること、有り難く存ず」

大分減った藩士を見渡し、内蔵助は満足げな笑みを浮かべた。

そして、懐から一巻の紙を取り出した。

「では方々、ここへ御名前と血判を」

皆、切腹を覚悟してその場に来ていた。

もう何も怖くは無かった。

言われるまま、名を記し血判を押そうとした男たちだったが、その作業は一向に進まなかった。

巻物が回ってくる度、男たちは、その巻物の先頭に書いてある文言

に目を皿のように丸くし、内蔵助の顔と見比べた。
そのたび、穏やかな表情でうなづく内蔵助だった。

床下では、助三郎が自分の予測が当たったことに満足げな表情を浮かべた。

「…やっぱりな。追腹なんて大嘘だ」

すべての者に巻物が回り、それが内蔵助の手元に戻った。
彼はそれを丁寧に取り巻くと、一同を眺めた。

皆揃いの死に装束。

だが、皆の瞳は死を目の前にした人間の物ではなかった。
彼らの瞳の中では、静かに闘志が燃えていた。

内蔵助はその場に立ち上がると、よく通る声で宣言した。

「明日、予定通り淡路守様にこの城を託し申す」

もはや、それに対する不満の声は無かった。

「その後、後舎弟大学様を盛り立て、御家再興を図ります。しか
し…」

皆はもう分かっていた。

大石内蔵助が、何を望んでいるのか。

「しかし、某が本当に望むは御家再興ではござらぬ」

皆は、身を乗り出し彼の言葉を待った。

彼の口から、彼の言葉で確認がしたかった。

内蔵助は湧き上がる感情を抑えるため、瞳を瞑った。すると、亡き主の顔が浮かんだ。

『余は、良い殿様になれると思うか？』

かつて彼は少し不安げに内蔵助にそう聞いた。彼は、穏やかな笑顔で答えた。

『何もご心配は要りませぬ』

内蔵助は眼を開けると、大広間に居る同士皆の顔を見渡し、真意を告げた。

「某が望むは、吉良上野介が首、ただ一つ！」

その姿は、もはや『昼行灯』ではなかった。

次の日、赤穂城明け渡しは滞りなく進んだ。

それを見届けた水戸藩の二人はこれ以降の赤穂浪人の動向調査をお銀に任せ、すぐさま旅装に身を包み、港へと向かっていた。

「助さん、あれ…」

早苗は足を止め、城を指差した。

「なんだか、燃えてるみたいだな…」

一方、早苗は顔をしかめた。

「まるで血みたいだ…」

互いにその光景に別の感じを抱いたが、二人とも小さな不安を感じていた。

それは、『仇討』

内蔵助の口から出た、『吉良上野介が首』という言葉。間違いなく仇討を意味する。

しかし、このご時勢、仇討など無理に等しい。

途方もない計画が、果たして実現するのか。

そんな思いを胸に、早苗はぼつりとつぶやいた。

「…本当の仕事は、これから始まるのかもな」

彼女の眼に映る赤穂城は、助三郎が称した『優しくて強い』姫路城とは程遠い姿だった。

悲しみ、不安、愁いを帯びた寂しげな姿。

ぼんやり、見ていると一足先に行っていた助三郎とクロが、離れたところで声を上げた。

「おい！ 置いてくぞ！」

「ワンワン！」

二人に追いつくため、彼女は急いで歩き出した。

「今行く！」

こうして二人と一匹は赤穂を後にした。

一章 春の名残…

完

〔13〕 真意（後書き）

（*1）吉田忠左衛門兼亮よしだちゆうざえもんかねすけ

赤穂浪士の二番手的存在。近頃名誉回復し始めたあの浪士の主。

（*2）追腹おいはらひ

殉死のこと。五代將軍徳川綱吉が武家諸法度に禁止を明文化。

〔01〕 江戸の生活

その晩、彼は縁側に座っていた。
手には朱塗りの杯。

その中に揺らめくのは、弓張月。

側用人柳沢吉保は、独り言のようにつぶやいた。

「…赤穂の城は難なく落ちた。あつけないもんよ」

すると、庭先から静かな低い声が。

「…大石は、敵討ちを目論んでおります」

慎重なその言葉を、彼は鼻で笑った。

「…昼行灯に、何が出来よう。小さい田舎大名の家老」
「…とき」

しかし、男は引かなかった。

「…されど、油断は禁物。他藩の者が探っております」

吉保は姿の見えぬ男が居るであろう方向を胡散臭そつに睨むと、
杯を開けた。

そして、手酌で再び並々を酒を注いだ。

「…ならば見張りを続ける。念のためにな」

「…御意」

男の気配が、その場から消えた。
残るは吉保ただ一人。

「…昼行灯に何が出来る？ この天下は俺の手の内。俺の物」

美しい上弦の月を愛しげに眺め、一息に飲み干した。

「…何時になったら、帰れるんだろな？」

臯月。早苗と助三郎が赤穂城開城を見届けて一月が過ぎた。
しかし、ここは佐々木家ではない。

水戸藩下屋敷。

上屋敷は小石川にあるが、下屋敷は少し南に下った隅田川沿いにある。

下屋敷のほうが気持ち的に楽だったが、やはり自分の家ではない。

助三郎は懐かしい我が家を思い、愚痴っぽくなった。
しかし、すぐさま彼に活を入れる者がいた。

「仕方ないでしょ？ いつ何が起こるかわからないんだから」

早苗は、彼に袴を手渡した。

武家の妻女が夫の身支度を手伝う。
当たり前前の光景だった。

助三郎は妻から袴を受け取った。

「しかし、俺ら二人一緒の役宅でよかったな」

「そつえばそうね…」

「別居は寂しいからな」

普通であれば、助三郎と『格之進』は別の役宅。

しかし、上が何を思ったか、二人は『同居』だった。

しかも、棲家は他の藩士たちと少しはなれた静かな一角。
小さいながら庭もあって、クロが遊ぶには最適だった。

助三郎は身支度を済ました。

しかし、目の前の妻に若干惑った。

悠長に彼の寝間着を畳んでいた。

「早苗」

「なに？」

作業する手を止めず、彼女は彼女の仕事を続けていた。
彼はその傍にしゃがみこみ、心配そつに言った。

「…格さんは時間に間に合つのか？」

「あー！」

早苗はその瞬間、寝間着を放り出し、鉄砲玉のように走り去ってしまった。

「…遅刻だな」

そう言い終るや否や、台所で凄まじい物音が。何かがぶつかり合う音、何か割れる音…。

「大丈夫か！？ 怪我しなかったか！？」

驚いて声を掛けると、気丈な返事が帰ってきた。

「大丈夫！ ああ！？」

「今度はなんだ！？」

「ギャイン！」

騒がしい妻に気が休まらない彼の耳を、犬の悲鳴がつんざいた。

『御犬様大事』が一番厳しい江戸。そんな声が聞かれては、危険極まりない。

「あ、踏まれたな…」

その通り、クロは『痛い』だの『骨が折れた』だの悲しい可哀想な泣きごとを口にしていた。

そんな黒犬を、優しい声が宥めていた。

「痛い痛い飛んでけ！　ね？　もうなんとも無いでしょ？」

「クウン、クウン……」

「……まだ前足痛いの？　ブラブラさせて……。折れてるんだったら、お医者様呼ぶ？」

「キャン！」

クロが大人しくなつたと同時に、家中が静かになつた。が、助三郎が待てる時間はもう無かつた。

「先行くからな！」

しかしその瞬間、男が目の前に現れた。

「もう良い！　行ける！」

すでに身なりはピシッと決まっている。

「お、さすがだ。決まりを絶対に守る男、格之進」

「どつも。さ、行こう！」

その日の帰り道、助三郎は朝の出来事を見てからずっと考えてい

たあることを、早苗に打ち明けた。

「…やっぱり家から一人、下女を呼ぼう」

早苗は歩みを止め、助三郎を訝しげに見た。

「…俺ら二人でも大丈夫だろ？」

「大丈夫じゃないから、呼ぶんだ」

俯き加減になった彼女に、助三郎は優しく言った。

「な？ お前のためでもあるんだ」

「俺のため？」

彼女は顔を上げた。その眼に、夫の温かい眼が入ってきた。

「お前は俺みたいに適度に手を抜けない。真面目すぎる」

早苗は何も言い返せなかった。

助三郎は尚も説得を続けた。

「だから、いつか近いうちに疲れる。倒れてからじゃ遅い。倒れてもらったら、困る」

夫の優しさに、彼女は打たれた。

そして首を縦に振った。

「誰でも、良いんだな？」

「ああ。お前にすべて任せる」

数日後、二人の住処に旅装の若い女が立っていた。
早苗が出迎えると、彼女はほっとした様子で、会釈した。

「お久しぶりです。若奥さま」

「ここでは早苗にしましよ。前みたいに」

「はい。では、早苗さま」

彼女は早苗が嫁ぐときに実家から連れていった唯一の下女だった。
歳が近く、一番仲がよかった。

名を、夏と言った。

主が『格之進』になったとき、驚き顔を真つ赤にしたこともあったが。

早苗が大嫌いな『男を見る眼』では決して見てこなかった。
それゆえ、今も変わらず仲が良い。

早苗はお夏を部屋に上げ、茶を出し労をねぎらった。

「ごめんね。わざわざ江戸まで。疲れたでしょ？」

しかし、彼女は明るく答えた。

「いいえ。これぐらいなんともありません」

気心の知れた彼女に安心し、早苗は頭を下げた。

「今日からお願いします」

早苗、正確には『渥美格之進』と助三郎は仕事を掛け持ちしていた。

一つは、今回の『密命』。
赤穂藩士の動向を探ること。

播州の藩士はお銀に任せ、二人は在府の藩士を地道に調べていた。しかし、『敵方』も知らないと話にならない。弥七を吉良の調査に回し、報告を受けていた。そして、これらをまとめて藩主に報告する。助三郎中心の仕事となっていた。

二つめは、本来の仕事。『大日本史』編纂。

これは江戸の上屋敷での業務だった。
密命との兼務で、毎日の出仕は免除。

こちらはどちらかというと、文章が上手い早苗中心の仕事となっていた。

この日、早苗はお休みで国許からやってくる下女を出迎える一方

で、助三郎は上屋敷に居た。

赤穂方の最新情報を藩主徳川綱條に報告していたのだった。

お銀から入ってきたのは、代わり映えの無い情報。

『内蔵助をはじめとする藩の上層部は、残務処理に追われている』
それだけだった。

一通り報告を終え、御前を下がった助三郎は溜息をつきながら廊下を歩いていった。

「はあ……。やっぱり、無理か」

一時帰郷を遠まわしに打診したが、渋られた。

江戸の気疲れもあつたが、それよりも身内の心配だった。

人気の無い庭に面する縁側に彼は腰掛けた。

そして、ぼんやりと庭を眺めた。

木々は青々と茂り、鳥は元気にさえずっていた。

日が少しずつだが徐々に長くなっていく。春が過ぎ、もうじき梅雨に入り夏になる。

それを肌で感じていた。

しかし、明るい気持ちにはなれなかった。

思わず、溜息混じりに呟いた。

「……申し訳ございません。母上」

家を空け、母親を残して来た。

下男も下女も居て安全だが、彼は不甲斐なさを感じた。

彼の母、美佳は夫亡き後、彼を女で一つで育て上げた。

それ故、彼は母を大切にしないといけないと強く思っていた。

しかし、出来ない。水戸は遠くは無いが、近くもない。彼は再び大きな溜息をついた。

しかし、いつまでも鬱々としなのが彼の取り得。大きく息を吸い込み、伸びをした。

「…いいや。どうにか理由つけて一回は帰るぞ！」

彼は気合を入れなおし、いざ帰宅しようと思いきはじめた。その彼の耳に声が届いた。

「兄上！ 助三郎兄上！」

「ん？」

この世に彼を『兄』と呼ぶのは二人いる。

一人はふざけて。真面目に呼ぶのはただ一人。

「あ！ 千…！」

彼は思わず名を呼び、その人物に駆け寄ろうとした。

しかし、ぐっと思いとどまると慎重に辺りを見渡し、言葉を選んだ。

「…水野殿？ どうしてここに？」

彼の目の前にいた若者は助三郎の弟。千之助。

彼は緊張して、周囲に神経を張り巡らせている兄に笑いかけた。

「兄上。誰も居ません。大丈夫です」

「…ほんと、だな？」

「…はい」

助三郎は顔をほころばせた。

弟の肩を力強く叩くと、彼をちゃんと名で呼んだ。

「千之助！ 江戸に来てたのか？ どうしてまた？」

「義父上に同行させてもらったんです」

「そうか。水野様に挨拶しに行かないとな」

「では、今晚大丈夫ですか？ ついでに、これも」

「お、これか？ いいねえ」

助三郎は、千之助のぐいと酒を飲む手振りを真似た。

「…格さんはどうする？」

すると、少し申し訳なさそうな顔で千之助は義姉の出席を断った。

「込み入った話が有るので、義姉上はちよつと…」

助三郎は、早苗に聞かれては不味い情報を持ってきたと見えるその言葉を受け入れた。

助三郎と千之助は連れ立って水野家が逗留している屋敷へ向かった。

千之助の舅に挨拶し、世間話などして過ごした。

そして、日が暮れ始めたころ酒宴となった。

程よく酒が回った頃、千之助の舅はうれしそうに笑みを浮かべた。

「佐々木殿。千之助がなぜ私についてきたか、お分かりですか？」

「何か特別な理由でも？ 千之助、もったいつけずに言え」

すると、彼は兄の前で正座し満面の笑みで言った。

「実は…。出来たんです！」

水野家の二人が本当に幸せそうな顔をするのと反対に、助三郎は酒の肴のスルメを啜えたまま、ぽかんとしていた。

「…なにが？」

「香代に、出来たんです！」

千之助がそう強調したが、ダメだった。

「…香代さんに、なにが？」

呆れて天を仰ぐ婿を笑い、舅は助三郎に言った。

「佐々木殿、懐妊したんです。香代が」

「ああ、カイニン。ん？ 懐妊！？ 子供ですか！？ 父親は！？」

水野の当主は声を上げて笑った、しかし、婿は兄を睨んだ。

「…鈍感兄貴。俺に決まってるだろ」

そんなボヤキもむなしく助三郎は興味心身で弟を見回した。

「千鶴、お前本当に子供つくれるのか？」

「あたりまえです！ 私はもう完全に男です！ 千鶴って言わない
てください」

「…すまんすまん。でも、やることちゃんとやっていますねえ。水野
殿」

「ですね。若くてよろしいこと。はっはっはっは！」

からかわれた千之助は、仕返しこそしなかったが兄に質問した。
今回、どうしても兄に話さなければいけない内容に話をもって行く
前段階でもあった。

「兄上こそ、義姉上とどうなんですか？」

「…ん？ …まあまあだ」

すぐにはぐらかす兄。

そんな彼に、若年者が何を言おうが聞くわけが無い。

そこで千之助は手筈どおり、義父に話の主導権を譲った。

「佐々木殿。そろそろ真剣に考えなければいけませんよ」

実の父が生きていれば、彼と同じ歳。

弟の義父は自分の義父でもあると思う助三郎は、おとなしく彼の話を聞いた。

「…そうですか？」

真面目に話を聞くそぶりを見せた彼にひざを進め、声を低くした。酒宴の席は一転して、評定のような重苦しさに包まれた。

「…実は、そちらの大叔父殿が『千鶴』を調べ始めました」

「まさか…」

「『千鶴』は後藤様の養女となった後、橋野殿が西国の藩士に書類上嫁がせたのですが…」

女だった『千鶴』は消えた。

男となり、『水野千之助』と名を変え、婿となっている。

「…大叔父は、『千鶴』がもうこの世に居ないと、突き止めたのですか？」

「大丈夫です。橋野殿が裏工作を加えたので。ちょっとやさっとじや、ばれません」

「よかった…」

ほっとしたのもつかの間。まだまだ問題は山積だった。

「しかし、代わりに千之助の不審点に気付いたようで」

「…不審点？」

「千之助は『平居の養子』ですが、その前の出自が不明ということ。兄上に姿が似ていると言うことに違和感を拭い去れないようで…」

出自はどうにでも工作できる。

しかし、顔かたちは不可能。

自分に似た弟が、助三郎は可愛かった。

「…どうすれば、いいのです？」

「平居は、何があっても千之助を守ると言っています。信じるに足る男です」

助三郎は弟の問題にほっと胸をなでおろした。

「ありがたい…。平居様」

しかし、水野家当主にはまだ話すことがあった。

それは、佐々木家の将来に関わる大事なこと。

もっとも、千鶴の話も千之助の話も、問題の根源はそこにあった。

早苗。

「佐々木殿、今日渥美殿を、いえ、早苗さんを呼ばなかった理由、もうお解りですよね？」

すっかり三人の酔いは冷めていた。

助三郎は、早苗の笑顔を思い浮かべ胸が締め付けられる思いをしていた。

これから聞く話が、無性に怖かった。

「…なんとなく、勘付いてはいます」

水野の当主は、極力穏やかに話を進めた。

「早苗さんの度々の不在。あまりに多く長いので、不信を募らせているようです」

「やっぱり…」

常日頃心に引っかかっていた不安だった。

「それと、大変言いづらいですが、この機に乗じて、新しい嫁をとという話が出たそうです…」

「は！？ 早苗が居るのにですか!？」

助三郎は思いっきり取り乱した。

十歳のあの日から、彼のなかには早苗だけ。他の女など、考えも及ばなかった。

「あの、死に掛け糞大叔父め…」

いつになく殺気立つ彼をどうにか落ち着かせ、話は続いた。

「…ちなみに、結婚して何年ですか？」

「今年の秋で…。四年になります」

少し言葉をにこらせつつ、水野家当主は小さく言った。

「『三年子無きは去れ』 常に肝に銘じていたほうがよかるつかと…」

助三郎はゾツとした。

彼はそんな馬鹿な言葉に騙されはしない。

しかし、真面目な早苗はそれを守る可能性が高い。

…現に、結婚できない身体になりかけた彼女は身を引くために、自害未遂を起こした。

助三郎は、動揺した。

「私は、私は彼女に誓いました！ 何があろうと、一生傍に居ると！ 早苗さえ居れば、家も身分も何も要りません！」

熱いその言葉に、水野家当主は寂しげな笑みを浮かべた。

「…何から何まで、龍之助そっくりだ」

「…え？」

「あ、いえ…。とにかく、離縁が嫌なら、まずは死ぬ気で子作りしなさい。早苗さんを手放したくなかったら、守りたかったらそれしか道はないですよ」

重い言葉。

重い責務が助三郎に押し掛かった。

縁側で、佐々木の兄弟が座っていた。
もう夜も遅い。

「早く、死ねばいいのに…」

ポツリと、千之助が漏らした。

「…大叔父か？」

「…はい」

助三郎は笑った。

笑うしかなかった。

なぜ、自分の父親は若くして亡くなったのに、大叔父は生きているのか。

なぜ彼は自分たちの生き方に首を突っ込むのか。

「…兄上」

「なんだ？」

「人目なんか気にしないで、大きな声で呼びたい。兄上って…」

助三郎は可愛い弟を見つめた。

「俺もだ。お前のこと、千之助って呼びたい」

弟は兄に頭を下げた。

「兄上、大叔父を黙らせて、絶対に義姉上を守ってください。兄上にしか、出来ませんから」

「子ども、か…。子作りしろって言われてもな…」

彼は早苗をほとんどいっていいほど、抱かない。

彼女を傷つけるのが怖い。彼女を失うのが怖い。

その恐怖心から、彼は男の欲求を押さえ付けてきたからだった。

しかし、そのせいで彼女の身に危険が忍び寄っている。

助三郎を大いに苦しめ始めた。

「たとえば、上手くいって懐妊したとする。すると格さんはどうなる？」

男としての仕事が山とある。

そのために毎回男に変身などしていたら、身重の場合、命に関わる

かも知れない。

ならば、いつそ藩主に願い出て『渥美格之進』の解雇を頼み、解毒剤を飲ませればよかった。

しかし、彼にそんなことはできない。

「…なんで早苗の弟として、本当の男で生まれてくれなかった？」

無二の親友で、同僚で、好敵手である『彼』を失うのが怖かった。

「はあ。馬鹿だな俺…。ごめんな、早苗。こんな弱い旦那で…」

彼は己の心の弱さを嘆いた。

お銀は身を隠し、気配を消しながら後をつけていた。

相手は元赤穂藩家老、大石内蔵助。

彼は東へ向かって歩いていった。

「このまま、江戸に行くってわけじゃなさそうね……」

お銀はここ数日、ずっと彼の傍を離れなかった。

動きを逐一記録し、江戸の助三郎に報告するためだった。

内蔵助は赤穂での残務処理を終えた後、京に出た。

華やかな都を見物したが、彼の足はそこで止まらなかった。

最終的に彼が草鞋を脱いだのは京の東、山科（*1）だった。

「ここに住むつもりかしら？」

内蔵助は連れてきた下男に手伝いを頼み、自ら掃除や片づけをし始めた。

お銀はその様子を暫く眺めていた。

しかし、そんな光景を見ても仕方がない。

彼女は自分が住む場所を手っ取り早く見つけると、すぐにその日見たことを文にしたため、飛脚を出した。

「助さん、ごめんなさいね。またあんまり大きくない知らせで……」

それから数日は、穏やかな日が過ぎた。

内蔵助は本気でそこに住むらしく、自分の居心地の良い様に家を整え始めた。

そこで彼女は、村娘に化け彼に近づいた。挨拶に来た体を装って。

「お待さん。ここに住むん？」

お銀は村人に分けてもらった野菜を、内蔵助に手渡した。彼はそれをにこやかに受け取り言った。

「はい。新参者ですが、よろしく願います」

「へえ。こちらこそ。そやけど、お待さんお一人？」

同士を呼び込むのではないかと勘繰り、その質問を投げかけた。しかし、彼から返ってきたのは意外な言葉。

「いえ。明日、妻と子どもが参ります。男一人は寂しいですからねえ」

「それはにぎやかでええなあ…。あ、長いしてもた。ほんなら、おおきに」

「お野菜、ありがたく頂戴します」

丁寧に挨拶をする元家老の前を辞し、お銀は自分の隠れ家に戻った。そしてほっと一息ついた。

「…これじゃ、当分は仇討ちなさそうね」

長期渡った緊張がほぐれた彼女は、大きく伸びをした。

「さて、おいしいものでも食べに行こ！」

次の日、内蔵助の言葉通り、内蔵助の住み付いた家はいつに無くにぎやかだった。

「道中、大変なことは無かったか？」

内蔵助は縁側に座り、幼い娘を膝に乗せ、目の前の妻りく（*2）に話しかけた。

他の子ども達は庭で元気に騒いでいた。

「いえ。主税が助けてくれたのでなんともございませんでした」

彼女は庭で幼い兄弟の相手をする長男（*3）を、微笑を湛えて眺めた。

すると内蔵助は大きな声を掛けた。

「そうか。主税！ 褒めて取らすぞ！」

「ありがたき幸せ！」

内蔵助の長男、主税は弟と妹を庭に残し父と話そうと縁側に寄った。

「父上、これからここでどうなされるおつもりですか？」

内蔵助は庭を眺め、ポツリと言った。

「晴耕雨読…。とても言っておこうか」

丁度その頃江戸。

早苗はお孝と二人で歩いていた。

彼女は休みを利用して、由紀の家に遊びに行った帰り道だった。

おしゃべりしながら歩いているうち、お孝が突然何かに気がついた。

彼女は早苗にそっと眼に入ったものを告げた。

「…早苗さん、あれって安兵衛さんじゃないですか？」

「…え、あのお侍？」

お孝と早苗の視線の先には、身形が宜しくない酔っ払いが歩いていた。

お孝は何も深く考えず、彼に声を掛けた。

「安兵衛さん！」

すると男は大層機嫌悪そうに振り向き、二人をジロリと睨み付けた。

女二人はその恐ろしい形相に怯んだ。

しかし、男は自分の過ちに気付きすぐさま手に持っていた酒瓶を背後に隠し、二人に笑い掛けた。

「や、失礼。誰かと思ひまして…。お孝さん。それに早苗さんまで！まさか江戸にいらっしやっただとは！」

慌てる彼を見ながら、お孝は訝しげに聞いた。

「…お酒飲んでたんですか？」

すでに夕刻だが、まだ明るい。

いかにも『浪人』といった素行が目についた。

身なりもそれこそ『浪人』

髪は月代を剃らず伸び放題。顔の無精髭も目立った。

「あ、これは、その、ちょっとイヤなことあったんで。はは。ははは…。」

決まりが悪そうな作り笑をする彼に、早苗が聞いた。

「ほりさんはお元気です？」

「ええ。もう…。そういえば最近文を出せなくてすまないと言っておりました」

早苗とほりは時候の挨拶など、文を交わしていた。しかし、あの刃傷沙汰以降一度も着てはいなかった。

「いえ。よろしくお伝えください」

今度は安兵衛から早苗に気まずい質問が。

「そういえば、早苗さん。どうしてそのような格好で？」

彼女は武家の妻女の格好ではなく、まるっきり町人だった。

安兵衛は光圀生前、町人姿で問題を探り解決させる助三郎と光圀、そして早苗の姿を見ていた。

今回もその早苗の格好に『何かを探っている』と勘繰ったのかも
しれない。

事実、町人の姿で市政の噂話に耳を傾けてたりはした。

己の身を守るため、早苗は勤めて冷静に理由を述べた。

「武家の格好では、出歩きにくいでしょう？」

「それはそうですね。ハハハハハ！」

早苗は話を逸らしつついでに彼の現状を探ろうと試みた。

「安兵衛さんは最近どうです？」

「見ての通り、また浪人時代に逆戻りですよ。なかなか仕官先も無
くて…」

早苗は違和感を覚えた。

彼は婿養子。家に縛られている。

他家に仕官など、彼の舅弥兵衛が許すとは考えられなかった。
その早苗の考えを読んだのか、安兵衛は続けた。

「親父殿も他家への仕官を許してくれたんですがね。やっぱり時勢が悪いようで…」

早苗はその言葉を信じなかった。

弥兵衛が安兵衛に惚れ込んで彼を女婿にしたのはよく知っている。

しかし、彼が易々と他家仕官を許すとは思えなかった。

彼は真っ先に槍を引っさげて飛んでいくような老人だった。

しかし、早苗は一切の感情を隠し彼と話を続けた。

「大変ですね。安兵衛さんほどの剣豪が…」

すると気を良くした安兵衛、

「いつそ『高田馬場の仇討ち 十八人斬り』って売り込むしかないですね」

「冗談交じりでそう言った。

「あれ？ また増えました？」

お孝は素直に驚きの声を上げた。

「はい。一人増え二人増えいつしか十八人。いくらなんでも増えすぎだ。ハハハハハ！」

和やかに話した後、三人は分かれた。

しかし、早苗は突然足を止め隣のお孝に小さな声で言った。

「…ちよつとそこの茶店で待っててくれる？　ちよつとでいいから」

「え？　はい…」

早苗はお孝が茶屋の中に入ったのを見届けると、人気の無い場所で町人身形の格之進に変わった。そして、静かにさつき分かれた男の後を付けた。

これは水戸藩土佐々木助三郎の内儀、早苗の姿では絶対に出来ない。

一度もその姿を安兵衛に晒していない『格之進』は好都合。気配を消し、こっそりと彼を追った。

安兵衛は表の通りから奥に入った静かな場所へと入っていった。早苗も後に続いた。

彼はその先で町人風体の男と立ち話。

「…なに？　妻子を呼んだ？」

驚きの声を上げた安兵衛。

その前に立つ男は、忌々しげに話を続けた。

「お一人で住むのではないようだ…。ご長男様だけならまだしも…」

すると、安兵衛は手に持った酒樽に直接口をつけ酒を煽った。

そして忌々しげに吐き捨てた。

「一体あのお方は何を考えている？　あの日、あの場所で誓ったこ

とは嘘か？」

「…声がでかい！ …まあ、臆したんだろう。あの方なら、仕官の道はいくらでもあるだろうしな」

この赤穂藩士の話を聞こうと、早苗は必死に聞き耳を立てた。だが、位置が悪かった。風向きの加減でほとんど聞こえ無かった。必死になるあまり、彼女は自身の危険を考えていなかった。

「やはり昼行灯は昼行灯か。クソっ」

「お前もなあ、急ぎだと思いがなあ。いきなり突撃しても失敗する可能性のほうが高い」

「だが…」

彼らの会話が聞こえない早苗は必死に耳をそばだてた。しかし、その時運悪くある物が彼女に近寄ってきた。猫だった。

ほとんどの動物が格之進の姿を嫌う。

その猫も一緒だった。

トコトコと可愛らしく早苗の前を横切ると思いきや…
突然大声を上げた。

「ニャー！」

背を弓なりにし、毛を逆立て歯をむき出し早苗に向かって威嚇し始めた。

驚いた彼女だったが、声を押し殺し猫が立ち去るのを待とうとした。
しかし、恐ろしいことが彼女の身に迫っていた。

町人風体の男が、猫の妙な威嚇と人の気配に気付いた。

「…誰かいるぞ！」

その言葉で、安兵衛は腰の刀に手を伸ばし、鯉口を切った。
そして猫が唸る方向に向かって、彼は走り出した。

「誰だ！？」

彼は刀を抜き払っていた。

「居たか！？」

彼の刀の先には、誰もいなかった。

早苗は凄まじい力で、赤穂藩士二人に見つからない場所に引き摺りこまれていた。

突然背後から口を手で塞がれ、驚いた彼女はもがいた。

しかし、耳元に聞こえた男の声で大人しくなった。

「俺だ。…静かにしろ！」

羽織袴姿の助三郎だった。

それから暫く二人は身を潜めていた。

しかし、彼らを探す男の姿はついぞ現れなかった。

安全とわかった早苗は息を吐くと、笑って助三郎を見た。

「ふう……。危ない危ない……」

その顔はひどく険しかった。

「……助さん？」

彼は早苗に詰め寄った。

「なんであんな危ないことするんだ!？」

「……え？」

「あの人は気が立ってる! 赤穂関係者は皆そうだ! 今後勝手に危ないことするな! いいな!？」

一気にまくし立てた助三郎だったが、早苗は彼のその怒りに違和感を感じた。

「助さん」

「なんだ、早苗……」

彼女の予感当たった。

彼は自分を『早苗』と呼んだ。

「まただ。俺との約束、忘れたな」

「約束？ なにが？」

まだ気が立っている助三郎はぶっきらぼつに早苗に言った。

「今の俺を、女として見るんじゃない。何度も言ってるだろ？」

その言葉を聞いた助三郎の顔に、動揺の色が見えた。
しかし、早苗は構わず続けた。

「これは仕事だ。俺はお前の同僚だ。私情を挟むんじゃない」

助三郎は項垂れ、苦しげに呟いた。

「すまん…。クソツ！」

彼は握りこぶしを壁に叩き付けた。

「あ、そんなところに…。棘刺さったらどうするんだ？」

彼の握りこぶしをそつと取り、怪我がないか調べようとした。
しかし、気が立っていると見える助三郎は彼女の手を退けた。

「大丈夫だ。なんともない」

そんな彼が気がかりの早苗は彼に問いかけた。

「…なあ、イライラしてるみたいだが、どうした？」

彼はその質問に答えなかった。

「すまん。心配するな。悪いが、ちょっと遅くなる…。晩飯までには帰る」

そう言って彼はその場を後にした。

早苗はお孝を待たせてある茶店に急いだ。

すでに日が傾き、綺麗な夕焼け空だった。

一人で茶を飲んでいたと見える彼女を呼び、岐路に着いた。

「遅くなったから送るよ。この格好なら、絶対安全だ」

変わり身はこういうときにも役に立つ。

一番の護身術だった。

「格さんね。やった！」

なぜかお孝は喜んだ。

それが不思議な早苗は、首をかしげた。

「へ？なにが『やった』なんだ？」

すると、彼女は言った。

「新助さん、焼き餅妬いてくれるから」

「…は？ 焼き餅？」

すると、彼女は不敵な笑みを浮かた。

「男の人を焦らすのも、一つの手ですよ」

彼女は、過去に新助以外の男と付き合っただことが有った。

男は助三郎しか知らない早苗より、遙かに知識も技術も有った。

「ふうん…。焦らす、か…」

早苗が帰宅して少し経ったところ、助三郎も帰宅した。

少しの疲れは見たものの、先ほどとは打って変わっていつもの明るい彼だった。

そんな彼と二人で夕餉を囲み、話をした。

「由紀さん、元気だったか？」

「うん。慶ちゃんね、また大きくなったの」

彼女は由紀の家で彼女の息子と楽しく過ごした。

しかし、彼が由紀のことを『ははうえ』と呼ぶと、胸の奥が締め付けられた。

自分をそう呼んでくれる子どもがほしい。そう改めて思った。

「そうか。また遊びに行きたいなあ…」

助三郎はうらやましそうにそう言った。

早苗はきっかけを見つけた。自分たちの『子ども』の話をする機会。

「でね。由紀はそろそろ二人目が欲しいんだって」

すると、彼の食事をする手が止まった。

「二人目…」

そこで早苗は一か八か打って出た。

「でね、助三郎さま。あのね…」

せつかく出した彼女の勇気だったが、夫によって萎えてしまった。彼は突然話題を変えた。

「早苗。明日は仕事だが、お夏に朝餉と弁当の支度頼んだか？」

「え？ うん…」

その日も結局、何事もなく夫婦は眠りについた。

次の日の昼、二人は職場である上屋敷の庭で弁当をつついていた。早苗は昨晚の自分を反省し、どうやったら夫に自分の意思を伝えられるのか、どうやったら彼がその気になるのか、ぼんやりと考えて

いた。

そうこうするうちに、弁当はすっかり食べられてしまっていた。

「あ！ お前、俺の分まで食べたな！？」

早苗が食って掛かると、助三郎は飄々として言った。

「だってポーっとしてるからだ。腹が減っては戦は出来ぬってね」

ニヤツとしてそう言った彼に、早苗は小ばかにした表情を向けた。

「なにが戦だ。うたた寝ばっかしてたのはどこのどいつだ？」

しかし、のれんに腕押し。

彼は平気で口からでまかせを言っただけだ。

「さあ……。一心不乱に書き物していたんで、そんなやつ眼に入らなかった」

早苗は戦術を変えた。

彼から視線を逸らし、緑豊かな庭に眼をやった。

「はあ、お前はずっと変わらないな……」

「それは褒め言葉か？」

早苗は自分の話に彼を引き込もうと彼を挑発した。

「貶してるんだよ。ガキのまんまで、進歩がちつともないからな」

まんまと彼は引つかかった。
不機嫌そうに口答えをした。

「俺はガキじゃない！」

すぐさま早苗は独り言。

「…こんなお子さまでも、父親になったらちよつとは変わるのかね？」

そして、空になった弁当箱を片付けはじめた。

そつと脇目で様子を伺つと、助三郎は一切口答えせず、遠くを見ていた。

空振りか、と少し気落ちした彼女は、食後の茶でもと湯飲みにぬるい茶を注いだ。

それを彼にさしだすと、突然口を開いた。

「なあ…」

「なんだ？」

「…赤ん坊、欲しいか？」

「なんだいきなり…」

早苗に聞いているのか、格之進に聞いているのか解らない彼女は勤めて冷静を装い、彼の様子を伺つた。

湯飲みを一息で空にしたとき、彼の意図するところが見えた。

「…だつてさ、俺と格さんだけだろ？ 子ども居ないの」

彼は、『格之進』に話をしていた。
それ故、早苗も彼に合わせた。

「確かに。皆妻子持ちだ。だがな、俺はお前ともちよつと違う」

「どこが？」

「美帆は結婚して数日で消えた。あれきり一度も帰ってこない……」

助三郎は露骨に嫌な表情を浮かべた。

「まだ未練タラタラかよ……」

そして腰を上げた。

しかし、早苗はそれを許さなかった。
彼の袖をつかみ、眼を見て訴えた。

「真面目な話だ。お前には姉貴が居る。毎日手を伸ばせば届く場所に居る」

「ま、まあな……。さ、そろそろ仕事に戻ろつ」

「ちっ……」

すぐに話をそらす夫に苛立ち、早苗はついに実力行使に出た。

「なんだ？ おい！？」

彼女は男の武家姿のまま、夫を押し倒した。

彼の上に馬乗りになり、どすを聞かせて脅し始めた。

力が強い格之進に、助三郎は勝てない。

「助三郎。よく聞け」

「…なんだ？ 腹ごなしの鍛錬は別にしないでいいぞ」

まだ『おふざけ』の色が見えるにやけた夫に早苗は怒りを覚えた。彼の胸倉をつかみ、彼を引き寄せ耳元で低く囁いた。

「…毎晩暇なら、そろそろ俺の相手してくれ」

助三郎からにやけが消えた。

彼は焦り、もがき始めた。

「バカ！ ここ何処かわかってるか！？」

「わかってる！ なんにもここでいきなりやるわけじゃない！」

「やるって言うな！ お前とはそういう関係じゃない！」

二人で怒鳴りあいながら取っ組み合っていたが、早苗はふっと気配を感じ手を止めた。

そして、恐る恐る背後を見た。

そこには、二人の上司。

中年で小太りの男が、腕組みして二人を眺めていた。

「あのなあ……」

「…はい？ 何か？」

「ぜんぜん戻ってこないと思って来てみたらこれだ……」

呆れた表情で彼は二人を見た。

彼は江戸での上司。二人の密命はおろか、早苗の真の姿など全く知らない。

妙な誤解があつては一大事と、二人は必死に弁明を試みた。

「違います！ 私は佐々木とそのような疚しい関係などでは……」

「そうです！ ただ弁当を取った取らぬの喧嘩でして……」

しかし言い訳は無意味だった。

「どうやらこういうことに慣れっこのような上司はさうさうと云つてのけた。」

「もういい。言い訳は。江戸詰めの男はみんな溜まってるんだ」

「は？」

二人はきよとんとして彼を見つめた。

「一人者が多い。それに国に嫁さん残して来ている。我慢は身体に悪い」

「はあ……」

「だから、今日は早めに上がって女買って来い。これは命令だ。以降職場で男を襲わないように！」

その場から逃れたい助三郎はその命令に素直に従った。

「はい！ お言葉に甘えさせていただきます！ 格さん、絶対女のほうがいいって。帰りに吉原でも行こう、な？」

しかし、早苗にとってはとんでもない命令だった。

頭に血が上った早苗は感情に任せ、とんでもないことを口走った。

「女なんか絶対にイヤだ！ 俺はお前がいい！」

しまったと思ったがときすでに遅し。

助三郎が抜け殻のように立ち尽くし、上司が天を仰ぐ光景が早苗の目に入った。

「あ。いえ、その……。なんでもございません！」

早苗はその場から走り去った。

助三郎は暫く放心状態だった。

上司は理解がある男だった。

ぼんと彼の肩を叩き、励ました。

「がんばれ。やられたくなかったら、とにかく逃げろ」

「…どうだったね？」

暗闇に明かりを一つだけ灯し、その老人は硯で墨を摺っていた。彼の横で、女が答えた。

「やはり留守でございました。しかし、あれと親しい下女が呼び出されて向かったそうです。間違いなく、下屋敷にいるかと…」

「面倒なことをしおって…」

男は摺った墨の中に筆をドボツと突っ込んだ。

「…ところで、あれの素性はわかったかね？」

それに答えたのは、男だった。

「未だ調べている最中にて…。しかし、これ以上調べても私ごときでは、あのお方に敵いません」

悔しげに頭を下げた。

老人は今度は苛立ちを表に出さなかった。その代わりに、『あのお方の名前を紙に書くと、それに線を引いた。』

「なら仕方ない。わしにも無理だ。捨て置け。その分、あの男を調べろ」

「はっ」

男は部屋から出て行った。

残るは女と老人。

女は気に掛かることがあつたらしく、老人に聞いた。

「…あの、あちらのほうは？」

「ああ。新しい嫁か？」

「はい」

老人は、紙になにやら書き記すと女に言った。

「あの女にそっくりだが、身分が由緒正しい娘を見つけた。打診中だ」

女は満足げに笑った。

「それは重畳。では、そろそろ？」

「無論」

老人は紙に『早苗』と書いた。

そしてそれを勢い良く、真っ黒に塗りつぶした。

「なにがなんでも、佐々木家から追い出してやる…」

老人は助三郎の大叔父だった。

早苗の嫁入りに反対し続け、結婚後も何かと文句をつけていた男。
彼が動き始めようとしていた。

〔02〕 黒い影（後書き）

（*1）山科やましな

京都市の東。内蔵助が居住した。

仮名手本忠臣蔵 九段目 山科閑居で有名。

（*2）大石りく

大石内蔵助の妻。

（*3）大石主税良金おおいしちからよしかね

大石内蔵助の長男。四十七士で最年少。

〔03〕 思惑

その日の朝早く、助三郎はしゃがみ込んでクロの頭をグシャグシヤツと撫でた。

黒い犬は尻尾をちぎれんばかりに振り、喜びを体現していた。

「早苗のお供、しっかりやるんだ。いいな？」

「ワン！」

「頼もしいなあ。さすが御犬様！」

「ワンワン！」

早苗はその日、水戸へ発つことになっていた。

その目的は仕事。

彼女が取り組む大日本史の編纂で江戸と水戸で意見の食い違いが出た。

それを収めるため、彼女は一時帰国をすることに。

この時既に早苗は旅姿の侍。

草鞋の紐も結び、準備万端。

しかし彼女は細かく助三郎に指示し始めた。

彼女の中身は、いまだ助三郎の『妻』だった。

「お夏に頼んでおくから、ちゃんと飯食べるんだぞ」

「あ？ ああ………」

助三郎は生返事。

クロをくすぐって遊んでいた。

かまわず早苗は続けた。

「箆笥の着物の場所は教えた場所だ。引っ掻き回すんじゃないぞ」

「わかってるって……」

彼は尚もクロとじゃれていた。

早苗は顔をしかめたが、小言は言わなかった。

その代わり、次から次へと注意事項を見つけ口にした。

さすがの助三郎も耐えかね、ついに立ちあがって早苗をねめつけた。

「お前がちょっとくらい留守にしても、一人で飯ぐらい作れるし、食える。着替えもできる！」

早苗は彼のその言葉に満足した。

「そうか。じゃあ、最後に一つ」

「なんだ？」

助三郎は期待を持って、彼女の言葉を待った。

「職場で寝るな」

助三郎は大きな溜息をついた。

ついに妻から優しい言葉は掛けられなかった。

「わかつてる……」

そんな落ち込んだ夫を笑うと、彼女はすぐに彼に背を向け、玄関を出た。

「さらば！」

しかし、彼女は直ぐに腕を捕まれ引き戻された。

「……なんだ？」

助三郎は、腕をつかんだまま俯き加減に口早に言った。

「……早苗に、一目でいい。会いたいんだが、ダメか？」

早苗は奥手な夫に嘖き出しそうになったが、ぐっと堪えた。そして、何も言わずに彼の言葉に応じた。

妻の本来の姿を認めるや否や、彼は彼女の眼を見つめた。

「……道中、気をつける。油断はするな」

彼を安堵させようと、彼女は微笑んだ。

「……わかってます。貴方も、羽を伸ばし過ぎないようにね」

彼は彼女の顎をすつと掬い上げた。

「……早く帰って来てくれ」

静かに唇を重ねた。

二日後の夕暮れ、早苗は水戸の佐々木家に到着した。

先触れのク口のおかげか、家では下男下女の暖かな出迎えが。道中の疲れと埃を取った後、彼女は姑と夕餉を共にした。

「仕事は一段落ついたの？」

「いえ、相変わらず……こちらで少し仕事した後、江戸に戻ります」

すると、気丈な美佳もさすがに少し寂しげな顔をした。

「そう……大変ね……」

すぐに早苗は手を突き謝った。

「義母上さまを一人家に残し、申し訳ございません……」

「気にしなくて良いわ。しっかりこつやって顔見せに帰って来てくれているでしょう？」

嬉しそうにそう言う姑に早苗は胸を撫で下ろした。しかし、姑の怒りの矛先は嫁ではなく息子だった。

「……それより、助三郎はしっかりやっているの？」

相変わらず彼女は、早苗より助三郎にうるさかった。

世間一般の姑は息子に甘く、嫁にうるさい。

嫁を本当の娘のように可愛がり、息子を叱ってばかりいる美佳は奇特だった。

「……はい。毎日、忙しく働いています」

しかし、美佳は何もかも見透かしたような口調で言った。

「それは、格之進に叱られるから」

早苗の誤魔化しはすぐにばれた。

「わかっています。あの人は格之進に言われないと真面目に仕事をしない」

「そうかもしれません……」

母は妻よりも男のことを把握しているのかもしれない。

まだまだ未熟な自分を少し反省した早苗だった。

「でも、貴方のお陰。大分真面目になった。これからも頼みますよ。格之進殿」

「はっ」

冗談交じりで早苗は男のように返事をした。

夜が更け、早苗が寢所に向かおうとしたとき、美佳から声を掛けられた。

「……明日は朝から仕事？」

「はい」

「どれくらいで終わりそうか解るかしら？」

早苗はその問いかけに、何か引つかかるものを感じた。

「日暮れには終わるか…… なにかご用事でも？」

しかし、美佳は何も言わなかった。

「いいえ。こちらのことだから、気にせずにお仕事頑張りなさい」

次の日、早苗は出仕した。

久しぶりに顔を合わせる職場の面々に挨拶をし、世間話も少々。

しかし、重要なのは会議。

すぐさま本題に入った。

しかし、なかなか思うように行かず煮詰まった。

そこで昼過ぎに一旦解散、続きは明日ということに。

家に帰って家事でもしようと思っていた早苗を、上司の後藤が呼んだ。

彼は彼女を奥の茶室へと招き入れた。

茶室は密談の格好の場所。

それ故、何か重大な話でも有るのかと、少し緊張の面持ちで部屋の隅に座った。

しかし、茶室は茶をたしなむ場所。

後藤は悠々と茶の仕度を始めた。

彼の御点前を黙って見ていると、

「……あの事件はどうなった？」

後藤は茶杓を手にそう聞いた。

早苗はすかさず答えた。

「……佐々木が中心になって調べております。今の所、赤穂侍が本懐を遂げる為の具体的な行動に出てはおりません」

「そうか。難儀な仕事だな。何年続くか解らぬのに……」

棗を開け、中の茶を茶杓で掬い茶碗に入れた。

そこには綺麗な緑色の山が出来上がった。

「早く終わって、お前がこっちの仕事に専念できれば良いのになあ

……」

柄杓で釜の湯を椀に注ぎながらそうぼやく上司。
そんな上司に、部下は謝るしかない。

「申し訳ございません……」

後藤は笑った。

「まあ、良い。お前の才を見込んでの殿の下知だ」

二人の会話が途切れた。

茶室に響くのは、茶筌の音だけ。

心を落ち着かせ、早苗はその音に耳を済ませた。

少しすると、後藤は点てた茶を彼女の前に置いた。

「頂戴いたします」

彼女は作法どおり、その茶を頂いた。

「結構な御点前で……」

後藤は満足げにうなずいた。

「やはり、早苗殿。飲み方に艶がある……」

「……そうでございますか？」

初めて聞く褒め言葉に早苗は驚いた。

後藤は彼なりの評価を述べた。

「佐々木は荒っぽい。あれの良さは、その豪快さだ」

彼は江戸にいる部下に思いを馳せ、茶室の隅の花瓶の花を眺めた。そこには、小さな姫百合が生けられていた。

茶道具を片付けながら、後藤がおもむろに口を開いた。

「……ところで、佐々木とは、どうだな？」

「はっ。毎日必ず話し合い、仕事の内容は必ず共有しております」

「そうか……で、あれの夜はどうなっておる？」

早苗は至極真面目に答えた。

「酒は飲ませすぎないように、気をつけております」

しかし、上司が欲しかった答えとは違ったようだった。彼は苦笑いした。

「……『渥美格之進』はそっちに関しては本当にニブいな」

「……そっち？」

きょとんとしている早苗に半ば呆れ顔を向け、

「わしが聞いているのはな、あやつの閨の話だ」

はつきりと言い切った。

さすがの早苗も理解し、

「へっ！？ あ、その、それは……」

どう返していいか見当がつかず、紅くなって俯いた。すると、聞いた本人が取り乱し始めた。

「わしだってこんなことを聞くのは失礼だと思う。特に早苗殿にはだ。

しかし、これは重大問題だ。だからこそ、弟のお前に代わりに答えさせようと思っただな……」

早苗は上司の顔を見ることができなかった。

長い間、沈黙が狭い茶室を包んでいた。

しかし、早苗は意を決し、男として話しはじめた。

「佐々木の、そちらは、その、なかなかどうしてあれでして……」

「あれではわからん。なんだ？」

グダグダ恥ずかしがっていても仕方がないと早苗は思い切り、口早に事実を述べた。

「赤穂より戻って二月、姉が義兄と枕を交わしたのはたった、二度」

再び赤くなった顔を隠そうとうつむく早苗の前で、後藤は大きな驚きを示した。

「二月で、二度！？ まさか、あの若さで不能か！？」

とんでもない言葉に驚き、早苗は彼の考えを否定した。

「いえ！　そうではございません！」

「だったら、なんでそんなに少ない！？」

「さあ……。私こそ知りたいものでして……」

後藤は大きな溜息をついた。

早苗から視線をそらすと、彼女に言った。

「渥美、早苗殿に戻ってくれ」

「はい……。戻りました」

変り身を解き、本来の姿に戻った。

すると後藤は彼女にひざを向けた。

「早苗殿、正直な気持ちを聞きたい。いったい佐々木のどこがいい？」

いまさら何を聞くのか。

そう思ったが、彼女の答えは一つ。

「全てでございます」

きっぱりと言ったが、後藤は納得がいかなかった様子。

「……欠点がかなり多いが、それでもか？」

早苗は微笑を湛え、彼にこう返した。

「……それがまた、魅力というのではないでしょうか？」

あんぐりと口をあけた後藤だったが、次には膝を打って笑っていた。

「これは、これは……。佐々木に心底惚れておられる奥方には何を言ってもダメそうだ……。ハハハハハ！」

「はい。無駄でございますよ。後藤さま」

一通り二人で笑った後、上司は居住まいを正し部下を呼んだ。

「渥美に伝言だ」

早苗はとっさに男に姿を変え、上司の言葉を待った。

「……佐々木に早苗殿をもっと可愛がるようにと伝えてくれ。それと……」

後藤はすぐに続きを言わなかった。

少し言いにくそうにしている様子を感じ取った早苗は、彼を促した。

「それと、何でございますか？」

「……早苗殿が懐妊したら、すぐに連絡するように」

上司の心遣いをありがたく感じ、彼女は頭を下げた。

彼を安心させるためにも、夫ももっと仲良くしなければと反省した。

そして彼女は茶室を辞し、帰宅した。

「佐々木め…… しっかりせぬと、早苗殿が危ういというのに……」

後藤は茶室を出た後、仕事場の己の書齋で溜息をついていた。主から託された若い夫婦の行く末。それを見守るのは苦ではなかった。

しかし、助三郎が頭痛の種。

夫婦の夜が問題なことが解ったのは良いが、それを他人の彼が如何こうすることは無理に近い。

ああだこうだ考えてみたが、この場はどうしようもないと、そこで切り上げた

「さてと、残りの仕事でもするか……」

そこにドタドタと騒がしい足音が聞こえた。

表の作業場の男が、息を切らし走ってきたのだった。

「後藤様！ こちらに、いらっしやいましたか……」

息を弾ませ、ほっとした様子で彼は床に手を突いた。

「どうした？」

男は彼に要件を告げた。

「佐々木殿の御家中の方が……」

後藤は血相を変え、必死に走った。

作業場の障子を勢いよく開け放ち、大声を上げた。

「渥美は！？ 渥美はどこだ！？」

ざわついた様子の藩士たちから、声が上がった。

「渥美殿であれば、少し前に帰られましたか……」

それを聞くや否や、後藤はさらに青ざめた。

そして、玄関に待たせてあった佐々木家の家人を急かした。

「すぐに追いかけて下さい！」

後藤の命令もむなしく、早苗は既に家に戻っていた。

玄関で彼女は見知らぬ男物の草履を見つけた。

「お客様か？」

彼女は自室に戻り、女に姿を戻し身形を整えた。

そして台所に向かった。

なぜか下女が一人も見当たらない静かなその場所で茶を淹れ、菓子とともに盆に載せた。

仕度ができると、彼女は客間へと向かった。

その後をクロがおとなしくついてきた。

締め切った部屋の前に来ると彼女は膝を下ろし、障子に手を伸ばした。

しかし、その時丁度耳に入った男の話す内容に、早苗は凍りついた。

客間にいたのは、美佳と助三郎から見ると大叔父に当たる男、二人だけだった。

二人の間には、眼には見えないが火花が散っていた。

「……あの女は子を生まない。もう四年だ」

「伊右衛門殿」

大叔父の名だった。

「おや、ワシの名前を覚えていたのかね？」

美佳は彼を睨みつけた。

「早苗さんのことにこれ以上首を突っ込まないで頂きたいものです」

「そういう事言わずに。良い花嫁候補が見つかってね……」

「佐々木家の、いえ、助三郎の嫁は早苗さんだけです！」

激昂した美佳が畳を叩き、怒鳴り声を上げた。

しかし、伊右衛門はクツクといやらしく笑っただけ。

「あんなどこの馬の骨か解らん女。やっぱり同じ境遇だから守りたくなるのかねえ……」

美佳は睨みを利かせ、彼に言い返した。

「関係ありません。貴方のその勝手な思い込み、どうにかならないのですか？」

「……ふん。とにかく、あの女は実家に返して、新しい嫁はワシに任せるんだ。いいね？」

美佳の言うことを聞かず、大叔父は先ほどの話を再び持ち出した。

「何度言ったら解るのですか!？」

早苗は、驚いて声が出なかった。

部屋には入らず、後ずさりするとその場から逃げた。

クロは彼女の後を追いはしなかった。
その代わり、その場に留まって一部始終を盗み聞きした。

「あ、居らっしやっただ！」

早苗が駆け戻った先の台所では、下男や下女が集まっていた。
彼らは心配そうな表情を浮かべ、彼女を囲んだ。

「若奥様、お探ししましたよ」

「……お加減でも、悪いのですか？」

皆腫れ物を触るような言い様。不安そうな眼差し。

早苗は気付いた。

彼らの心遣い、姑の気配り……

大叔父に会わせないための裏工作を、姑は今までずっとしていたの
だった。

しかし、今回それが失敗した。

早苗は笑顔を無理やり作り、家人たちを安心させた。

「大丈夫。心配ないわ。でも、ちょっと疲れたから、夕餉まで一人
にさせて……」

早苗が自室に籠もって暫くたった夕刻、大叔父は佐々木家を後にした。

美佳は下男下女に命じ、すぐさま家中に大量の塩を撒かせた。

そのどさくさの中、クロはそつと大叔父の後を付けた。

彼には、彼の仕事があつたからだ。

それは亡き光圀から託された大きな使命。

それは早苗と産まれてくるであろう新しい命を守ること。

早苗に降りかかる火の粉は振り払わなければいけない。

そつ強く己に言い聞かせ、彼は大叔父を追っていた。

日が沈むころ、大叔父は一軒の屋敷に入った。

クロは気づかれないよう、そつと彼を見張った。

「ただいま……」

伊右衛門が帰宅を告げると、玄関に若い女が現れた。

彼女は笑顔を浮かべ、彼を出迎えた。

「お帰りなさいませ。旦那さま」

伊右衛門のムスツとした顔は見る見るうちに緩んだ。

「ああ、お袖。お前の顔を見ると癒される……」

そつ言つと、彼女の手を引き奥へと入っていった。

「今晚もワシの部屋に来なさい。いいね？」

「もう、旦那さまったら……」

クロは屋敷の床下で粘った。お腹が減って仕方がなかったが、どんなに良い匂いが漂ってきても、我慢した。

床下で必死に聞き耳をたてていると、彼の耳にはとんでもない会話が飛び込んできた。

伊右衛門は布団の上で、お袖と呼んだ下女に言った。

「あの女を、始末する」

「……それを、わたしにやれと？」

少し驚いた様子の彼女に、彼は動じずに言った。

「そうだ、物分りが良い。あの女を殺せ」

お袖は不気味な笑みを浮かべると、彼に聞いた。

「どうやって殺すんですか？」

伊右衛門はお袖の手をさすり、計画を話し始めた。

「お前の手を血で汚したくはない……。下女としてあの女に近づき、

毒を盛るんだ」

「毒？」

驚いた様子のお袖を安心させるように、伊右衛門は彼女を抱き寄せた。

「徐々に弱らせるんだ。毒殺だと気づかれないようにな……」

クロはその話をすべて漏らさず聞いていた。
そして、主の危機を感じ彼女の元へと駆け戻った。

その日の真夜中。屋敷の一角の人気のない蔵で男女が絡み合っていた。

女は先ほどのお袖。

男は伊右衛門、ではなかった。

お袖はその男に、主に使う言葉とは全く違う下品な言葉遣いで毒づいた。

「……ねえ、直介さん。あのクソ爺どうにかならないの？」

男は下男だった。お袖と同じく、主伊右衛門から命を受け『渥美格之進』を探っている……はずだった。

「……そんな口聞くな。俺だって我慢してんだ」

直介は苛立ったお袖を宥めるように、彼女の首筋に口付けした。しかし、そんなことでお袖の苛立ちは消えなかった。

「……ふん。あんたはいいさ。適当にうるついて適当に報告すればそれで済む。あたしゃ、あのヨボヨボ爺の夜の相手だよ!？」

怒る彼女を、直介は笑った。

そして、彼はお袖の上に覆いかぶさった。

「可愛そうに。でも、俺がこうやって慰めてやってんじゃないかな?」

お袖は笑みを浮かべると、直介の身体に腕を回した。

「……そうだった」

朝日が昇るころ、二人は名残惜しげに身体を離れた。

この下男下女の密会は主には内緒。

常に細心の注意を払っていた。

「……お袖。あの爺さんが憎いからって、料理にあれを沢山ぶち込むんじゃないぞ」

帯を締めなおしながら、直介はお袖に忠告した。

すると、彼女は髪を撫で付けながら薄笑いを浮かべた。

「大丈夫。あんたに言われたとおり、毎回の食事にほんのちょっと

しか入れてないからね」

「ならいい」

身支度も整い、蔵から出ようとする直介の背を見て、なぜかお袖は思い出し笑いをし始めた。

それが気に掛かった直介は、彼女に理由を聞いた。

「だって、あの爺さん、あの女に毒盛れってあたしに言ったんだよ。自分が同じことされてることに、気づいてないのにさ！」

この話を聞いた直介も手を打って笑い出した。

「こりゃ傑作だ。気づいたときにや、爺さんはあの世ってか？」

「そう！ ああ、早く死ねばいいのに！」

二人の恐ろしい笑いが蔵の中にこだました。

大叔父の思惑、二人の思惑それぞれが入り混じる。

この争いの軍配はどちらに上がるのか、それとも他の者なのか……まだ誰もわからなかった。

一方、早苗は数日の勤務を終え、江戸へと戻った。

結局、早苗は何も姑に聞けなかった。否、聞けなかった。

ただ漠然とした将来の恐怖だけが彼女の心に残った。

暗い表情の彼女を心配し、道中ク口はしきりに話しかけていた。

……勿論、大叔父の家で入手した危険な話は一切隠して。

鬱々しながら江戸の住処に戻った彼女を出迎えたのは、助三郎だ
った。

彼は、彼女が玄関で帰宅を告げると家の奥からすつとんで来た。

「お帰り！ 疲れてないか？」

「ああ……」

「飯はまだだよな？ あ、それより、風呂か？」

質問攻めにする夫に、傷心気味の彼女は癒された。

そして、彼に今一番したいことを伝えた。

「……風呂に入りたい」

助三郎はすぐさま下女に命じた。

「よし、お夏！ すぐに風呂を沸かしてくれ！」

「はい！」

しかし、風呂が沸くまで時間が掛かる。

そこで助三郎はぼんやり佇む早苗を玄関に座らせた。

そして、水を張った盥を置くと、彼女の前にしゃがみこんだ。

「風呂が沸く前に、足、洗ってやるな」

すでに彼は早苗の草履を解いていた。

しかし、己の男の足など触らせたくない早苗は慌てて足を引いた。

「……良い。自分で出来るから」

そう言っつて残る足の草履の紐は自分で解いた。

しかし、そこで退く助三郎ではなかった。

「格さんじゃなくて、早苗の足を洗うのもダメか？」

「へ？」

「たまには、いいだろ？」

早苗はその言葉に負けた。

彼に甘えたかった。

助三郎は妻の許可を取り付けると、優しく包み込むようにその足を洗った。

早苗は夫の手の温もりを感じ、幸せな気もちをかみ締めていた。

「……助三郎さま」

思わず、彼女は今まで何度呼んだかわからないが彼の名を呼んだ。

「なんだ？」

足を洗うことに集中していた彼の眼が、早苗に向いた。

その眼は優しさであふれていた。

「……ううん。なんでもない」

早苗は彼から眼をそらした。彼の優しさに、なぜだかわからないが小さな恐怖を感じたからだ。た。

この世に永遠などない。

夫を信じないわけではない。妻が信じずに、誰が信じるというのか。

しかし、万が一の覚悟を定めておかねばならない時が確実にやってきていた。

彼女の脳裏に、大叔父の言葉がよみがえった。

『子を産まない』『新しい嫁』『実家に返す』

また、姫路で会った亡霊の言葉までもが彼女を襲った。

『あなたを必ず捨てる』、

苦しむ早苗をよそに、いつしか助三郎は早苗の足を洗い終えていた。

彼は彼女の足を、綺麗な手ぬぐいで拭いた。

そして、その足に目をやったまま、触れたまま彼女の名を呼んだ。

「早苗」

その言葉で早苗は現実に戻された。

「……なに？」

助三郎は、早苗の足を再び両手で包み込むと小さく言った。

「……今晚、疲れてなかったら、いいか？」

それは久しぶりの夜のお誘いだった。

その誘いに、早苗が迷うことなどなかった。

「うん！」

彼女の旅の疲れと将来への不安は吹き飛んだ。

〔04〕 慣れとは

早苗が水戸から帰ってきて数日後の朝早く、助三郎は町人姿で歩いてきた。

ばしゃつと盛大な音を立てた後、彼は悪態をついた。

「だから雨は嫌いなんだよ……」

うつかり水溜りに足を突っ込み、ずぶぬれ。

足袋に雨水が染込み、彼は不快感をあらわにした。

しかし彼は歩き続けた。待ち合わせに、遅れてしまう。

いくつかの大きな水溜りを避けながら、ようやく待ち合わせの場所に到着した。

しよっぱりを戻し、塗れた足を拭こうとすると、隣に待ち合わせの相手が立っていた。

「水溜りにはまっただんですか？」

「あ、新助。待ったか？」

助三郎は手早く足を拭くと、手ぬぐいを懐に入れ、彼に笑いかけた。

「いいえ。さっき来たばかりです。そうだ。こちらが今回お世話になる親方です」

彼の隣には恰幅の良い中年の男がいた。

半被を身に纏い、鉢巻を締めた姿は典型的な職人だった。

助三郎は新助の伝で、彼に接触することができた。
これも、密命のひとつ。

「おう。兄ちゃん、よろしくな。人手が足りなくなつてよ。たのむぜ」

親方は二人を引きつれ歩き出した。

彼は庭師。ある屋敷に出入りができる。それが彼に近づきたい理由だった。

「新助。大丈夫だよな？」

「はい。仕事さえちゃんとすれば何も言わない人なんで」

二人は庭師として、屋敷に潜入することができた。

屋敷の大きな庭の木を切りながら、彼は屋敷に眼をやった。
庭に面する座敷では、運よく顔が知りたいもう一人の人物がやってきていた。

この好機を逃すまいと、彼は黙々と剪定をする不利をしながら、
必死に眼を凝らした。

「そこを、何とか……」

白髪の老人が、彼よりも若い男に頭を下げていた。
しかし、その男は不満げな顔。

「そう申されましても…… 吉良殿、貴方の知識と経験が必要なのですよ」

「このような老人、もはや何の役にも立ちませぬ。隠居の願い、聞き届けてはくれませぬか？」

吉良上野介義央。

彼は権勢を振るう側用人、柳沢吉保の屋敷に来て彼に言上していた。

「どうしても、隠居と申されますか？」

手に持った扇子を弄りながら、吉保は溜息をついた。

「はい……」

上野介は深々と頭を下げる。

彼に見えないのをいいことに、さも見下げたような表情を浮かべた後、彼は言った。

「再び、上様にお伺いしておきましよう」

感情がまったくこもってない一言だったが、吉良は手放して喜んだ。

「ありがとうございます！ お願い申し上げます！」

「……助さん、どうです？」

下で伐った木々の片づけをしていた新助が助三郎にこそつと聞いた。

「……吉良様と柳沢様、しかと見た」

そういう助三郎の眼は吉保を睨んでいた。

彼の思う事件の原因。それは吉良の浅野虐めではなく、柳沢吉保。

彼が一方的な沙汰を下したことで、浅野巧みの紙は切腹、自分は妻とともに密命をこなす日々。

安穩な日々は到底やっては来ない。

彼を心配して、新助は声をかけた。

「……姿だけで良いんです？」

「……ああ。内容は、そのうち弥七が持ってくる」

その時、親方から怒鳴り声が上がった。

男二人の作業をする手はいつしか止まっていた。

「ぼんやりしてんじゃねえぞ！ 手動かせ！ 手！」

「はい！」

驚いた二人は仕事に戻った。

彼から見えない場所、聞こえない場所で先ほどの二人はそれぞれ言いたいことを言っていた。

上野介が退出した座敷では、吉保がにやりと笑った。

傍には、影で使う忍びが控えていた。

「……なにが隠居だ。　さしてもいいが、そうやすやすと許す俺と思ってるのか？」

そして彼は目の前においてある、『贈り物』に手を触れた。

「本当にいい鴨だ」

彼のところには多くの人がやってくる。

皆己の願いをかなえるため、吉保に贈り物をし袖の下を渡した。

彼はそれを快く受け取り、時に願いをかなえてやり、時に無碍に斬り捨てた。

上野介はいい鴨だった。

しばしば彼を訪ね、隠居願いをし、そのたびにお礼を置いていく。

「そういえば、あの爺の屋敷はどこだったか？」

彼は忍びの者に聞いた。

「はっ。　呉服橋門内（*1）にございます」

「では、そろそろ、退いてもらおうか」

扇子をぱちんと閉じ、彼はにやりとした。すべては自分の手の内にあるといわんばかりに……

一方、吉良は……

「成り上がりの若造になぜ媚びへつらわんといかん？」

苦虫を噛み潰した顔で彼は不満タラタラ。

「しかし、早く隠居の許可を貰わねばならん。一刻も早く……」

イライラを深呼吸で一旦収め、彼は帰宅した。

なぜ彼が隠居をしたいのか？

それは、周囲の眼から逃げたいが為。

彼はあの事件で傷を負いはしたが命を取り留めた。しかし、評判はガタ落ち。

無理もなかった。

喧嘩両成敗にもかかわらず、彼だけは何のお咎めもなかったばかりか、褒美までもらっていた。

さらに、過去に勅旨響応役を経験し、彼に教えを請うた際、イヤミを言われたり苛められた皆が影で悪口を言っていた。

肩身の狭い思いをする彼だったが、己の今までの言動を改めることなどはしない。

「これもなにも、あれのせいだ……」

彼は己の額に手をやり、傷に触れた。
その傷をつけた本人を恨んでいた。

「田舎侍が……」

しかし、彼は心の隅で、その田舎侍が遺した物を恐れた。
残された赤穂の浪人たち。そしてその者たちの『復讐』だった。

「……ということは、助三郎さまはみんな顔解るってことになるの
?」

早苗は畳みにうつ伏せになっている夫の腰を揉みながら聞いた。

「まあな……」

彼らがどういう人間なのか、彼女は興味を抱いた。

「……吉良さまは意地悪そうな顔してた？」

「いや、思ったより貧相な爺さ……あう！」

気持ち良さそうに眼を瞑っていた助三郎が突然うめき声を上げた。
はっとした早苗は手を止めて夫の顔を覗き込んだ。

「ごめんなさい。大丈夫？」

助三郎は笑って妻を安心させた。

「いや、さっきのは効いた……」

すると隣の部屋からもつと惨めな男のうめき声が上がった。それを叱咤する声も。

「もう、慣れない事するから！」

「お孝ちゃん、痛いんだって……」

新助の家で、男二人はへたっていた。

その日一日こなした庭師の仕事で、彼らは足やら腰やらをやられた。それを互いの相手に、治療してもらっている真つ最中。

「だったら、お灸にする？ それとも鍼？」

お孝は若干呆れ顔でそう聞いた。すると、新助は俯いた。

「……どつちもいやだ」

助三郎は彼を笑った。

彼のほうが日ごろ鍛えているので、被害も少なかった。

「新助、泣きごといってないで全部やってもらえ！ あ、早苗。悪いがもう少し強く出来るか？」

「わかった。ちょっと待ってて」

いつしか助三郎は気分が良くなり、眠くなり始めた。妻の腕は、それくらい彼を心地よくさせていた。

「気持ちいいな……」

しかし、耳に入った声で目が覚めた。

「……効いてるみたいだな」

それは少し遠慮がちな男の声だった。

「……格さん？」

しかし、彼はそのまま彼女に身を任せていた。申し訳なさそうに、男の声は言った。

「……この姿のほうが入るから、我慢してくれ」

助三郎は彼女を攻めず、褒めた。

「……本当上手いな。そういえば、御老公も好きだったしな、お前の肩揉み」

「そうだったな……」

夫の背中を揉みながら、会話を先ほど話していた内容に戻した。

「そういえば、さっきの二人は何を話してたんだ？」

「……わからない」

「顔を見に行っただけか？」

「……まあな。人相だけは、百聞は一見にしかずだ」

「そうかもな。……だが、なんで吉良様がわざわざ柳沢様の屋敷に行っただら？」

助三郎が彼の考えを述べる前に、正しい情報もたらされた。

「…隠居の申し出でさあ」

「あ、弥七」

彼はどこからともなく現れ、助三郎と新助を見てにやりと笑った。

「お二人さんが枝伐りしてる間に、ちゃんと聞きましたんでね」

助三郎は素直に彼を誉めた。

「ほら、さすがは弥七。俺らが得たのは二人の顔と、腰痛だな」

すると早苗は笑顔で

「腰痛は余分だ。助さん」

背中のつばをグツと押した。

「うっ。効く……」

苦悶の表情を浮かべ、彼は口を閉ざした。その彼をチラツと見やり、弥七は苦笑した。

「確かに、潜入方法をちつとばかり間違えたな……」

早苗は寝ている夫を起こして座らせ、肩を揉みはじめた。

「弥七、隠居って事は、吉良様は羽州（*2）に引つ込む気なのか？」

「その通り。息子の所へね」

出羽の国（*3）、米沢藩藩主上杉綱憲（*4）は上野介の実子。

「米沢は遠いな……」

「へい。あそこに引つ込んじまったら、赤穂の連中の復讐は難しくなる」

そうなれば、水戸藩の二人の密命も困難を極める。

助三郎は忌々しげに、握りこぶしを作っていた。

「で、それに対する柳沢様の思惑は？」

早苗はそう質問し、助三郎は真剣な表情で弥七に目線をやった。

「隠居の許可を出す気はさらさらなさそうですがね、なにやら良くなえこと考えてましたぜ」

「そうか……」

「しかし、あのお方はいったいどちらの味方なんだ？」

早苗がそう聞くと、助三郎が忌々しげに吐き捨てた。

「どちらでもない。己の欲にのみ従ってるんだ」

「欲か……」

自分にはそのような規模の大きな欲は無い。

そう思う彼女は、天下を治める男の壮大な欲望がどのような物か、計り知れなかった。

そして、苛立つ夫を宥めるように肩を優しく揉み続けた。

「格さん、大分楽になった。ありがとう」

「そうか。だったらもう帰れるな？」

「ああ。あ、その前に湿布貼ってくれないか？」

「わかった」

湿布を準備し始めた早苗の横で彼は着物を脱ぎ、貼る場所を指示した。

「この腰の……」

しかし、彼女の怒鳴り声でぎよっとなった。

「いきなり脱ぐな！」

恐る恐る見やると、顔が赤い男が俯いていた。

「恥ずかしくなった彼は、食って掛かった。」

「いい加減男の裸に耐性つけるよ！ 何年格さんやってんだ!？」

妻はその言葉にさらに顔を紅くし、さらに深く顔を伏せた。

「だって……」

ここで助三郎ははっと気付き、彼女を攻めるのをやめた。

「すまん……」

彼が彼女に『男の身体に慣れる』などという強要は出来なかった。彼女が男の裸を嫌がるのは、己のせいでもあったからだ。

責任感と後悔をいまだに抱く彼は、着物を着込んだ。

そして身なりを整え、立ち上がった。

「……湿布は？」

ようやく顔を上げた彼女は、そう聞いた。

「いい。自分で貼れる」

早苗は女に戻り、頭を下げて誤った。

「……ごめんなさい」

そんな彼女に助三郎は手を伸ばした。

彼女の顔を上げさせると、穏やかな声で彼女を慰めた。

「俺こそ謝らないと。もうあんなこと絶対言わないから。な？」

早苗は申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

『ごめんなさい』という言葉が再び口について出そうになったが、心の奥底でとめておいた。

いつか慣れる。

そう言い続けてのこの様。不甲斐なさでいっぱいになった。

この気持ちが顔に出ていた。

助三郎は、顔を覗き込み、不安げに言った。

「……大丈夫か？」

「へ？ あ、うん。大丈夫」

笑顔を作り、そう答えると彼から手が差し伸べられた。

「帰ろう」

その手を彼女は迷うことなく握った。

二人は仲良く連れ立って帰宅の途についた。

早苗は握っている夫の手をじっと見た。

自分の手をしっかり握る大きな力強い手に、安心と幸せを感じていた。

彼女の視線に助三郎は気がついた。

「どうした？」

「手、大きいなって」

「そうか？　そういえば、そうだな」

早苗は助三郎の前に進み出て、彼を見上げた。

「帰ったらこの手でわたしの肩揉んでね。助さん！」

「あ、腰がまた……」

どうもないのにふざけてうすぐまる彼の様子を、早苗は真に受けた。

「うそ！　揉み方悪かったのかな？　筋痛めちゃった？　どうしよう……」

助三郎を助けようとかがみこんだ早苗を助三郎はがばつと背後から抱きしめた。

そして耳元で囁いた。

「……嘘だ。なんともない。お前の腕は一流だ」

早苗は恥ずかしさに真っ赤になって立ち上がった。

そして走って逃げた。

「もう、心配したのに!」

「あ、待て!」

次の日、仕事が早く終わった早苗は由紀の家に遊びに行っていた。彼女に相談事があったのだった。

早苗からの話を聞くと、由紀は若干呆れた様子で彼女を見た。

「で、旦那さまの裸が恥ずかしくて見られないのね?」

「そう…… 由紀、平気で男の人の裸見られるでしょ? お風呂覗き見大好きだし」

言い終わらないうちに、由紀は怒った。

「ちょっと! 人聞きの悪い事言わないでよ!」

早苗は悪びれる様子もない。

「だって、本当の話でしょ」

事実だったが、それは結婚前の話。
由紀はそう主張した。

「今はそんなことしないの！」

由紀は茶を二人分淹れ、心を落ち着かせた。
湯飲みの茶を少し啜り、ほっと一息つくと聞いた。

「助さんがダメなら。格さんのは大丈夫なの？」

「ううん。上はまだ我慢できるようになったけど、あとは無理」

茶請けの団子をほおばりながら早苗は答えた。

暢気な彼女に、由紀は驚いて言った。

「自分の見られない、旦那も無理。だったら、夜どうしてるの？」

「暗くて見えないし、お互い着物着てるから平気かな？」

由紀は大きな溜め息をついた。

「……助さん相当我慢してるわ。可哀想に」

早苗はハツとした。

「……だからかな？」

「え？ なにが？」

「ううん。なんでもない……」

彼女は理由を見つけた気がした。

なぜ夫が自分を閨にめったに誘わないのか、その理由を。

一方、由紀は彼女なりに、一つの策を考えた。

「ひとまず。格さんの裸に慣れることが一番ね」

彼女は早苗の『男の裸拒絶症』を知っていた。

しかし、結婚後完治したと思っていた。

その矢先のこの相談。出来るだけ力になろうとした。

「どうやって?」

「着替えを男の状態です。風呂も男で素っ裸で入る。勿論厠も男のままです」

早苗はぞつとした。

過去の悪夢を思い出し、鳥肌が立った。

「無理! 絶対イヤ!」

由紀も彼女の辛い思い出を知ってはいたが、心を鬼にした。

「それがいけないの! 我慢なさい! 大好きな助三郎さまのた
めよ!」

すると、早苗は大人しくなった。

「……助三郎さまの、ため?」

「そう。だから、頑張って」

早苗は帰宅後すぐに忠告を実践した。

夫に気付かれないように、彼が帰ってくる前に風呂を済ませることにした。

そして、こつそりと風呂場に向かった。

男に姿を変え、脱いだ。

ここまででは問題なかった。

「上はまだ大丈夫なのにな……」

緊急時に男のまま風呂に入るときは多々あった。

そのときは、見たくない物を必ず隠して入っていた。

しかし、由紀の忠告は『素っ裸で』

「慣れるんだ。俺の身体なんだから……」

眼を瞑って、すべてを脱ぎ捨てた。

「助三郎のためだ。我慢だ、我慢……」

その瞬間、突然ガラツと音が響いた。

「あ」

「へ？」

扉を開けた者と、見られた者は互いに固まった。

その開けたのはあるうことか助三郎。

彼は眼を泳がせ、すぐに背を向けた。

「……すまん、格さん」

そして後ろ手で扉を閉めた。

「あ、ああ……」

彼は風呂場から立ち去った。

残された早苗はそのまま風呂場で身体を洗い、湯船に浸かった。

「……見られた」

己の身体に眼をやった。

しかし、耐えれずにすぐに逸らせた。

「逆効果だったかな……」

女の方の裸も、ろくに見せたことがない。

それなのに、男の裸を諸に見られた。

猛烈な申し訳なさを感じ、彼女は大きな溜息をついた。

「こんな半分男の嫁やだよな、やっぱり……」

今後一体自分はどうすればいいのか思い悩み、彼女は逆上させてしまった。

風呂から上がって女に戻ると、彼女は居間へと向かった。夫に謝ろうと、彼の姿を探した。

「…あれ？」

彼は机に突っ伏していた。

どんよりとした空気が彼の周りに感じられたが、早苗は思い切って彼に声を掛けた。

「……助三郎さま？」

すると、彼は首だけ振り向き、彼女をぼんやりと眺めた。

「…早苗？」

「どうしたの？ 調子悪いの？」

眼がおかしかった。遠くを見るような、妙な眼だった。しかし、彼女の名を呼び、顔を起こした。

「早苗？」

「……なに？」

すると、彼はへなへたと崩れ落ちた。

「よかった。また戻れなくなったのかって思ってた……」

「あ、ごめんなさい……」

余計な心配をさせてしまったことを謝った。

「こうしてちゃんと貴方の前に居るから。大丈夫。気にしないでね？」

安堵した様子だったが、次には先ほどの原因を自分のせいにし始めた。

「…じゃあ、俺が、男の裸に慣れろって言ったのが原因だよな？」

「え？ ま、まあ……」

少し恥ずかしかつたので眼をそらすと、彼は手を付いて謝り始めた。

「俺が悪かった」

「そんなことない。わたしがわるいの……」

彼の身を起こそうとしたが、彼は再び謝った。

「いいや。俺がお前の気持ち考えてなかったせいだ。ごめん！」

何度やっても、謝りのしあいっこになって決着が付かない。

早苗は解決方法にあることを思いついた。

「……じゃあ、格之進で慣らすのは止める」

「ああ。無理はするな」

ほっとした様子の彼を、早苗は少し刺激してからかってみる事にした。

「代わりに助三郎さまので慣れる！」

「は!？」

助三郎の顔は一気に真っ赤になった。

「ね? 助三郎さまのならいいでしょ?」

「お、俺の!？」

「うん。ダメ?」

彼をにっこり見つめると、彼の顔は更に紅くなった。

「ダメ、じゃない。ダメなわけない……」

夫を少しは積極的に出来たかも知れないと、早苗は満足した。

「さて、ごはんにしましょ」

次の日の朝、早苗の前で突然下女のお夏が頭を下げた。

「帰国のお許しを頂きたいのですが……」

それは突然の出来事だった。

〔04〕 慣れとは（後書き）

（*1） 呉服橋門内いぶくばしもんない

江戸城呉服橋門内。

今の東京都中央区八重洲辺り

（*2） 羽州うしゅう

でわのくに

（*3） 出羽国

今の山形県と秋田県

（*4） 米沢藩藩主上杉綱憲よねざわはん うえすぎつなのり

吉良上野介義央と上杉富子の長男。米沢藩四代藩主。

初代はあの上杉景勝。

石高は初代三十万石 三代十五万石

お夏は悲痛な面持ちで早苗に理由を話し始めた。

「母が、倒れたと知らせが……」

「お母さまが!?!」

早苗はお夏の家の事情をよく知っていた。

母は今も早苗の実家、橋野家で下女をしている。

その母に連れられてきたお夏が、早苗の遊び相手になり仲良くなつた。

大事な母が心配に違いない。

そう思う早苗はすぐに立ち上がった。

部屋の隅に置いてある箆笥から金を取り出し、紙に包むと彼女に手渡した。

「これで滋養のつく物買って。路銀もこれで足りるはずだから」

「そんな。早苗さま、こんな大金……」

彼女は驚き、返そうとした。しかし、早苗は拒否した。

「すぐに帰るの。落ち着くまでこっちは気にしないで。ね?」

「しかし……」

「大丈夫。早く行きなさい」

主の心遣いに感謝し、お夏は頭を下げその場を辞した。そしてすぐさま身支度を始めた。

その彼女のそばには、いつの間にかクロの姿が。荷造りする彼女の膝に手をかけ、クンクンと悲しげに鳴いた。

しかし、彼女に犬の言葉は分からない。ただ、寂しがっている様子はわかったので、頭を優しく撫でた。

「すぐ戻ってくるから。留守の間、早苗さまをよろしくね」

クロはきちんとお座りし、一声吠えた。

「ワン！」

次の日の朝、助三郎は早苗の作った朝食を満足げに頬張っていた。

「お夏には悪いが、やっぱり味噌汁は早苗の味付けが一番だな」

「そう？　ありがとう」

褒められ、素直に嬉しくなった早苗は上機嫌でその味噌汁に手を伸ばした。

手短かに朝食を終えるなり、助三郎は言った。

「晩飯は俺が作る。なに食べたい？」

「え？　作ってくれるの？」

久しぶりの夫の手料理。

驚きの表情を浮かべる彼女に、言いたしっぺは胸を張った。

「当たり前だ。俺は今日非番だしな。交代交代で炊事洗濯掃除しないといけないし」

「そう。ありがとう」

妻をさらに喜ばせたい助三郎は彼女に希望を取った。

「で、なに食べたい？」

「そうね。昨日はお芋煮たのだったし、おとといは葉物……」

「だから？」

「ううん…… あ！」

「あ？」

早苗に考えている暇など残っては居なかった。

いきなり奥の間へ消えた。

そして次の瞬間、助三郎の前を羽織袴姿の男が走り去っていった。

「すまん。遅刻する！ 魚にしてくれ！ じゃあな！」

それを助三郎はあっけにとられて見送った。

「わかった。魚にする……」

それから数日、早苗と助三郎はどうか仕事に支障をきたさず生活が出来ていた。

しかし、突然の訪問者が。

それは、早苗より年上の見知らぬ女。

彼女はお夏の代わりに橋野家から早苗の手伝いに来た者だと告げた。

「先日、大奥さまに召し抱えられました。『たえ』と申します。よろしく願います」

早苗はなにも疑わず快く彼女を家に入れた。

「おたえさん。では、部屋に案内しますね」

彼女はおたえを今までお夏が使っていた部屋へと通した。

「今日は疲れたでしょう。仕事は明日から願いますね」

「はい」

早苗は居間へと戻った。

するとそこへ、猛烈な勢いで走ってくる黒い塊があった。

「どづしたの、クロ。そんなに急いで」

彼はひどく慌てていた。

早苗の着物の裾を引っ張り、けたたましく吠えた。
彼女には彼が何を言わんとするのかすぐにわかった。

「……庭に出ろって？」

彼の言葉に従い、庭に出た。

そして、奥の人目につかないところで、クロと向き合った。

彼の言葉が、早苗の耳にはっきりと届いていた。

『あれは、あのおばちゃんは、悪いじいちゃんの仲間だよ！』

突然のこの言葉に、早苗はわけがわからず問い返した。

「クロ。落ち着いて。何の話？」

しかし、クロは慌てたまま。

『クロね、見たの。あのおばちゃん。悪いおばちゃん！』

早苗はクロの眼を覗き込み、穏やかに語りかけた。

「クロ、ゆっくり最初から話して。出来る？」

これでようやく彼は落ち着きを取り戻し、きちんとお座りして話し始めた。

『出来る。えっとね、この前、一緒に水戸に帰ったでしょ？』

早苗にふつとイヤな思い出が甦った。

「……………そうね。それで?」

『その時、早苗さんの悪口言ってた悪いじいちゃん、居たでしょ?』

「……………大叔父さま」

助三郎の大叔父、佐々木伊右衛門。

『クロ、あのじいちゃんの後を着いてったの。こっそりと』

「……………それで?」

『あのじいちゃん、すつごく悪い話してた。あのおばちゃん』

「……………どんな話?」

恐ろしさで身が震えだした早苗だったが、クロに問うた。
しかし、クロは即答しなかった。

「覚えてない? それとも、難しかった?」

『覚えてる。意味もわかる……………』

早苗は、彼が恐ろしい情報を手に入れていた事に気づいた。
しかし、覚悟を決めた。

「お願い。教えて」

クロは、小さく言った。

『……早苗さんに、毒盛れって』

早苗の背筋は凍りついた。

同時に、彼女は頭を木槌で殴られたような衝撃を身に感じ、その場にうずくまった。

動悸がし、呼吸が浅く速くなった。

様子が眼に見えておかしくなった彼女を心配し、クロは彼女に必死に話しかけた。

安心させようと、一生懸命宥めた。

どうにか彼女が持ち直すと、クロは彼の意見を述べた。

『助さんに頼んで追っ払ってもらおうよ！ ああ悪いおばちゃん！
ね？』

しかし、早苗は首を縦には振らなかった。

『……クロ。お願いがあるの』

『なに？』

『……この事は、絶対に助三郎さまには言わないの』

クロは驚き、思わず彼女に怒鳴った。

『なんで！？ 早苗さん危ないんだよ！ どうして黙っちゃおうの！
？』

早苗も怒鳴り返した。

「いいから、言わないで！」

クロは、主の恐怖に染まった瞳をじっと見た。

その瞳は、強い意志を持っていた。

クロは折れた。

『わかった。助さんには言わない』

少し不満げに言う彼に、早苗は懇願した。

「絶対よ。絶対言わないで。お願い」

クロは、キッと早苗を見据えて。

『クロがずっと見張ってる。絶対早苗さん守る！』

そう告げると、その場を走り去った。

一人残された早苗は、呆然と空を見上げていた。

その空は彼女の心とは正反対の、雲一つ無い青空だった。

己の不甲斐なさに彼女は自嘲した。

しかし、そこですべてを諦めはしなかった。

頑固な大叔父に、自分の存在を認めさせようと決意した。

できる限り対抗し、彼に文句を言わせてなるものかと心に決めた。

「間違つて無いよね？」

早苗は、夫から貰つた己の身を守る魔除けのお守り袋を握り締め
た。

早苗はその日すぐに、新助の家で部屋を借りた。

男に姿を変え、文を認めた。

それは、職場への文。暫く出仕できない旨を書き記した。

大叔父に秘している『渥美格之進』の正体。

この状況下でバレれば、彼との関係はさらに悪化するに違いない。
よつて、彼の回し者と思われる下女のおたえにバレてもいけない。
夫に余計な心配を掛けさせてもいけない。

「こんな状況でしか、ずっと女のまままで居られないつても、皮肉
だよな……」

この日から、早苗にとって緊張を強いられる日々が始まった。

おたえ、否お袖はその日も適当に玄関の簾掛けをしていた。
早苗は奥で夕餉の仕度。

下女とは名ばかり。掃除洗濯しか任せてもらえない。

仕事が少なすぎて、毎日暇を弄んでいた。

「元気かい？ おたえさん？」

聞き覚えのある声にはつとした彼女が顔を上げると、眼の前に見知った顔があった。

「……ちょっと！ なんでこんなところに居るの!？」

その男は、直介。彼女の間夫だった。

水戸に居るはずの彼が江戸に居る。

この異常な事態にお袖は驚いた。

しかし、直介はいたって普通。

「……お前に会いたかったんだ。細かいことはいいじゃないか」

お袖は人目が無いのをいいことに彼にすり寄った。

「嬉しいこと言ってくれるねえ。あたしゃ、幸せよ」

普段は表立っての逢瀬はできない。

主の目を盗み、思いつきり羽を伸ばしたい二人だった。

「ちよいと出かけないか？ どうせ暇なんだから？」

「暇さ。ちょっと待ってて。すぐ仕度するからさ」

お袖は早苗に適当な理由を述べて、外出の許可を取りつけた。

茶店の奥の布団の上で、二人は思う存分楽しんでた。
しかし、ほんの少し仕事を気に掛けた。

「毒は盛れたのかい？ おたえさんよお」

「できるわけ無いでしょう？ あの女わたしに飯炊き一切させないんだから」

そう言うてはいるものの、彼女はどことなく楽しそうだった。
直介は少し緊張感が漂う顔で彼女に言った。

「お前が回し者だつて感じてるんじゃないのか？ 毒盛れなくてあの爺さんに叱られないか？」

「大丈夫！」

お袖は直介の上に覆いかぶさり、彼の顔を覗き込み誘惑した。
しかし、彼はその気ではなかった。

「根拠は？」

つれない間夫にムツとした彼女は、ぶっきらぼうに言った。

「毒っていつても、一気には殺れないだろ？ それに、渡されたのは月流し（*1）。」

盛っても盛らなくても、男に女の身体のごとは解りゃしない」

「そうなのか？」

直介を小馬鹿にした顔で彼女は眺めた。

「あたしゃ、人殺しなんてまっぴらごめんだ」

彼女はイヤなことを忘れ楽しもうと、自分の帯を解き、彼に肌を見せた。

「俺も人殺しはイヤだな。あの爺さんのいいなりもイヤだな……」

彼はまだその気ではない。

じれったく感じたお袖は、余所を見て何かを考える彼の頭を掴み、自分に向けさせた。

「月流しの薬、ろくに旦那に抱かれてないあの女に使うのはもったいない」

妖しい笑みを浮かべながら、彼女は直介を誘い続けた。

「どうする気だ？」

何かが引つ掛かる彼は、彼女に聞いた。

「あたしがありがたく使うのさ」

その返答にぞっとした直介は、お袖の身体の下から這い出した。

「……なんでお前が使うんだ？」

お袖は不敵に笑った。

「決ってるじゃないか。あの爺の子どもなんか産みたくないからさ」
彼女は痺れを切らしていた。彼を待つてなどいられなかった。

「産むのはねえ、お前さんの子なんだよ！」

直介に飛びかかった。

こんな二人の会話など露知らず。

早苗はクロが何かしら情報を持ってきても、気を張り続けた。

そんなこんなで半月ほど経ったある日の朝、助三郎が早苗に向かって口を開いた。

「なあ、聞いてもいいか？」

「なに？」

「……格さんずっと仕事休んでるみたいだが、何かあったのか？」

早苗は毎日女の姿で過ごし、男に変わることは無かった。

一日中役宅に留まり、家事をこなす日々。

「なんで？」

「ちょっと気になって……」

彼も最初は何も深く考えていなかった。

いつもは密命のため、市政調査が中心だった。

久しぶりに職場に出仕した時、上司に聞かれた。

いつになったら、格之進は復帰するのかと。

夫に隠し通す気である早苗は、まことしやかな出任せをさらっと述べた。

「殿に頼まれて、ちょっと調べたい物が有るんだって」

しかし、助三郎の顔が晴れることは無かった。

「病気とかじゃないよな？」

じつと彼女を見つめ、不安そうにそう言った。

「へ？」

「なんか最近、早苗がすごく疲れてるように見えるんだ。大丈夫か？」

心配そうな彼に、早苗は元気に言った。

「そんなこと無いわ。気のせいよ、気のせい！ どう？ ぴんぴんしてるでしょ？」

「そうか？ お前がそう言うなら……」

どうにか事の真相の発覚を回避した早苗は、ほっと胸をなでおろした。

お夏が帰郷して一月が経ったある日、事態は急転した。本当の下女が、水戸からやってきたのだった。

「遅くなりまして、大変申し訳ございません。お夏がまだ戻れないというので、大奥さまの命で代わりに参りました」

それは佐々木家から来たよく見知った下女だった。

早苗はほっと一安心したと同時に、確信した。

『おたえ』はクロの言うとおり、佐々木伊右衛門の回し者。

「さて、どうしようかしら……」

早苗は直接対決も辞さない覚悟で、おたえに会いに部屋へと向かった。

しかし、部屋はもぬけの殻。

彼女は姿を消していた。

「……でも、これで終わらないわよね？」

彼女が忍びであれば、仕損じた場合自害して果てる。

しかし、彼女はただの下女。

主の元へ戻ったに違いなかった。

再び新たな手を考え、己の命を立場を脅かすであろうと考えると、

身が震えた。

その恐怖を振り払うように、早苗は口にした。

「仕事行かないとね……」

しかし、それで元気にはならなかった。代わりに、虚しくなった。

本来の姿、『佐々木助三郎の妻早苗』は疎んじられている。

仮の姿、『渥美格之進』は藩に必要とされている。

一体自分は何なのか。何のために生きているのか、疑問を感じていた。

数日後の昼過ぎ、助三郎は台所に居た。

「……こんなもの」

仕事から戻って来るなり、羽織袴の姿のまま、竈の前でしゃがみ込んでいた。

その手には、丸めた紙が。

「……早く灰になれ」

竈の火にそれを突っ込んだ。

メラメラと燃え上がる炎が、彼の顔を照らしていた。

「あれ？ お帰りなさい。何燃やしてるの？」

助三郎は早苗の顔を見ずに口早に言った。

「母上に文書いたんだが、書き間違えてさ……」

「え、もったいない。筆拭きにすれば良かったのに」

「まあ、そつだな……」

何か含みのある彼に小さな違和感を覚えた。

しかし、早苗はそんな彼を笑顔にさせようと重大報告をした。

「助三郎さま。明日から、格之進仕事に復帰するわ！」

少し驚いたような、また少し残念そうな反応を示した。

「そうか…… 残念だな、復帰祝いに飲みに行きたかったんだが…

…」

「何か用事でもあるの？」

助三郎は、早苗に告げた。

「……明日、水戸に戻らないといけなくなった」

「お仕事？」

「ああ。でも、ついでに母上と千之助に会ってくる。ずっと留守してるからな」

そう言いながらも、あまり乗り気でない顔をしている夫が気になったが、早苗は追求しなかった。

「そうね。じゃあ、早く支度しないと」

そう言つて奥に向かおうとする彼女を、助三郎は引きとめた。

「あ、早苗！」

「なに？」

「今晚、いいか？」

もじもじせず、自然に彼は早苗を誘つた。

早苗は、即答した。

「うん。お願いします」

久しぶりの誘い。

心が浮き立つ早苗は、すばやく夫の旅支度を終えると自分の身支度に取りかかった。

その夜、寢所で早苗はいつもよりずいぶん積極的な夫に気付いた。久しぶりの睦事、互いに気持ちが高揚していた。

しかし、早苗は心を落ちつかせ、そつと眼を瞑った。

助三郎の息遣いが耳元に聞こえた。

「……早苗」

助三郎は早苗にそつと口付けを落とした。
優しく触れてくる彼の暖かい手を感じながら、早苗は彼の背にそつと手を回した。

「助三郎さま……」

彼と一つになりたかった。

しかし、次に耳に入ったのは夫の妙な声だった。

「えっ？」

同時に、身体の上の重みが消えた。

はっとした早苗は眼を開け、身体を起こした。
彼女の眼に飛び込んで来たのは、助三郎が布団の脇で俯いている姿。
必死に彼女から視線を逸らしている様だった。

イヤな予感がした彼女は、自分の身体を見下ろした。

肌蹴た女物の寝間着。

そこから覗くのは、柔らかな女の身体ではなかった。
見覚えのある、見たくない男の肉体だった……

早苗はなにも言わずにその部屋を飛び出した。
驚いた助三郎は、すぐに彼女の後を追った。

「早苗！？ どこ行く！？」

早苗は庭に出て、人目につかない庭木の中で泣いていた。

身の危険を感じてもいなかったし、男に変わろうなどとは全く考えていなかった。

気分が高揚してはいたが、それは夫恋しさのため。

前触れもなく男に突然変わった。

男女でなければ成り立たない、夫婦の睦事の真つ最中に男になった。

今まで一度たりとも、こんな失態をしたことはなかった。

精神的疲労が、とうとう身体に現れてしまったのだった。

せつかくの夫との閨のため、念入りに身支度した彼女にはあまりにも酷だった。

風呂で磨いた白い腕は太く逞しく、柔らかかった身体も骨太のがつしりとした物に。

夫とほとんど変わらない姿。これで睦み合うことなどできるはずがない。

己の身を呪い、夫に見つからないようひたすら声を押し殺して泣いた。

しかし、見つかってしまった。

「……大丈夫か？」

顔を上げると、夫の顔があった。
しゃくりあげながら、早苗は彼に謝った。

「ごめんね、わたし…… あっ」

早苗は慌てて口を押さえた。
姿も声も男、口調は女。

「……大丈夫か？」

不安げに近寄ってきた彼の目の前で、早苗はさらに激しく泣きじやくり始めた。

「ほつといて！ 来ないで！」

しかし、彼は彼女を放っておきはしなかった。
代わりに早彼女を強く抱き寄せた。

「……早苗、ごめんな」

しかし、彼女が泣き止むことは無かった。

「わたし、ふざけてなんか、無い。助三郎さまが、イヤだから、男になつたわけじゃない！」

「わかつた、わかつたから、何も言つな」

さらに強く抱きしめた。

「勝手に変わったの！ 男に、男になんか、なりたくなかったのに！」

早苗は助三郎の腕の中で泣き続けた。

泣いて泣いて泣きまくって少し落ち着いた早苗に、助三郎は手を差し出した。

「……もう寝よう。明日は早い」

「うん……」

早苗は彼に手をひかれ、部屋に戻った。

姿を女に戻せなかった彼女は、身体に合った寝間着を夫から借りた。

一緒に布団で寝ようと言ってくれる彼を拒んだ。

仕方なく助三郎は布団をもう一枚出し、隣に敷いた。

しかし、彼女はそれを極限まで夫から離れた所に引きずった。

そして布団を頭から被った。

「……早苗」

「……お願い、見ないで」

「……わかった」

夫が眠った頃合いを見計らうと、早苗は身を起こし、向こうを向いて横になっている彼の背中に謝った。

「ごめんなさい……」

再び涙が滲み出た。

「こんな中途半端な、最悪な身体で…… ごめんなさい……」

悲しさと申し訳なさど絶望感を感じながら早苗は布団に再び潜った。

低い小さなすり泣きが、寢室に響いていた。

早苗が泣きつかれて眠った頃、助三郎が起き上がった。

彼は寝ていなかった。

そつと彼女の布団に潜り込むと、静かに抱き寄せた。

耳もとで小さく囁くと、格之進の姿は消え、元の早苗に戻っていた。

「……絶対に見放さない。絶対にお前を守る。信じて待っていてくれ」

そして、彼女に口づけを落とした。

「愛してる……」

それは、かつて彼女を死の淵から救った言葉だった。

〔05〕 闘い（後書き）

（*1）月流し

墮胎薬の意味

「お袖がしくじった……」

夜更け、佐々木伊右衛門はそう吐き捨てた。

そして、彼は墨に筆を浸し、紙に書いた『早苗』の二文字を真っ黒に塗りつぶした。

「忌々しい女め……」

しかし、彼は早苗を諦めてはいなかった。

不吉な笑みを浮かべながら、彼は下男を見やって言った。

「……助三郎が留守の間に、片付ける」

「はい」

彼が去ると、伊右衛門は先ほど塗りつぶした紙を傍の灯に差し出した。

それは真っ赤な火を上げた後、灰と化した。

「ごめんなさい……」

早苗は助三郎に頭を下げていた。

すでに出立の準備を終えた助三郎は溜息ばかり。

「……さて、あと何回謝る？ クロも聞き飽きたってさ。な？」

「ワン！」

クロは一声吠えるところに走り去ってしまった。

「でも、本当に……」

彼女は朝になって初めて、夫と同じ布団で寝ていたことに気付いた。

本来の女の姿だったにもかかわらず、昨晚の出来事を思い出し、彼に謝り続けている。

「もう言っつな……」

そう言って助三郎は彼女の口を手で覆った。

「さつきも言っつたら？ 格さんとだと狭かったから、早苗に戻して一緒に寝たんだったって」

早苗は夫の手をひきはがした。

「だから、さつきから聞いてるでしょ？ どうやってわたしを戻したのよ？」

助三郎は目をそらし、ぼそつと言った。

「……内緒」

その様子を見た早苗ははっとして、彼にこう聞いた。

「……まさか、あの由紀が跳んで喜ぶ『あんな事』じゃないでしょうね?」

助三郎はニヤツとした。

「……あ、してほしいのか? 格さん?」

早苗はこらえきれず、叫んだ。

「絶対にイヤ!」

おかしな妻を見て彼は笑った。

「……『格之進その二』は大喜びするのに、早苗はイヤか。変だな
お前ら」

「へ? 何か言った?」

「いいや、なんにも。とにかく、それだけは絶対に無い。安心しろ」

そう言う夫を見て、早苗はほっと一息ついた。

「よかった……でも、それだったらなんで教えてくれないの?」

助三郎は慌てたように再びはぐらかした。

「ん!? 秘密だから! 内緒だから、言えないんだよ」

「早苗はいらだちを感じ、膨れっ面。」

「意味わかんない！」

「助三郎はそんな彼女をからかった。」

「河豚みたいだ」

「もう！」

「彼は妻の頬を引っ張った。」

「ほら、齒出して笑え。な？」

「早苗はしびしびうなずいた。」

「……うん」

「助三郎が発たなければいけない刻限が迫っていた。」

「彼の手は、彼女の頬から頭に移動していた。」

「すぐ帰って来る。俺の留守中に、あっちの仕事には首を突っ込むな」

「はい……」

「新助と与兵衛さんには気をつけてくれるように言ってある。何かあったら頼るんだ。それに……」

いつになく細かいことを言う夫を早苗は笑った。

「大袈裟ね、大丈夫よ」

しかし、彼は真剣な眼差しで念を押した。

「油断だけはするな。いいか？」

「はい、はい」

明るい妻に戻ったことに満足した助三郎は、出立した。

「じゃあ、行ってくる」

「行ってらっしゃい」

早苗は夫を明るく送り出した。

「……細っそい女だなあ」

彼女を物の影から眺め、そう呟いた者がいた。
直介だった。

「なんであんな女に助三郎様は固執してるんだ？ 山と縁談あった
だろうに……」

直介の好みに、早苗は当てはまらなかったようだ。しかし、彼はニヤリとした。

「ま、若いのが取り柄だ。さてと。暇でも潰しますかね!」

直介はその場を後にした。

その夜遅く、早苗は突然眼を覚ました。

何者かが部屋に侵入してくる気配を感じた為だった。

布団から身を起こそうとしたが阻止された。

「静かにしろ……」

男の声とともに、彼女の口は大きな手で塞がれていた。

そしてその手は、彼女を布団に押しつけた。

男は馬乗りになった。

そして懐に手を入れ、何かを取りだした。

「……大人しくしねえと、痛い目みるぜ」

部屋に差しこんできた月の光でそれがきらりと光った。

小刀だった。

驚いた早苗は、自分を襲った男の顔を確かめようと、眼を凝らした。

しかし、その顔に見覚えはなかった。

「そうやって大人しくしてるんだ、いいな？」

ニヤリと彼は笑った。

朝早苗を見張っていた直助は、早苗をそのまま見張ることなく、遊んでいた。

主から貰った金で、飲む買う打つの遊び放題。

そして頃合いを見計らった今、闇にまぎれて早苗の居る役宅に侵入したのだった。

「そのまま、そのまま……」

早苗は、もがくのをやめた。

そして冷静に、今何をすべきかと考えた。

暴れても、勝ち目はない。

「……ふん。所詮こんなもんか」

抵抗を止めて大人しくなった早苗に気付いた直助は、小馬鹿にしたように笑った。

「さて、貴女様はどれだけの値打ちでございましょう？」

早苗を舐めるように品定めし始めた。

「武家出身、学問芸事一流。これで売り込めば、けっこうな高値になると思いますがね……身請けできないぐらいの……」

直介は、ちらつかせていた刀を懐にしまうと、待ってましたとばかりに早苗に覆いかぶさった。

「貴女様の身体がいかほどか、まず調べないといけませんね……」

そして、彼は早苗の襟許に手を忍ばせた。

「……ん？」

彼の手に触れたのは、柔らかな女の肌ではなかった。

違和感を感じた直助は、組み敷いた筈の早苗に眼を凝らした。月明かりで垣間見えた身体の下的人物は、女ではなかった。

「何だこれ!？」

直助はとっさに身を起こし、逃走を図った。

しかし、間に合わず。

身軽になった早苗は、すぐに身体を起こすと彼を蹴飛ばした。

「うぐ……」

うめき声を上げて転がった彼の胸倉を容赦なくひつつかみ、顔を向けさせると、冷徹な笑みを浮かべた。

「……男がそんなに珍しいか？」

直助は最初恐怖したが、すぐに疑問の表情を浮かべた。

「……なんで？ ……どうしてお前がここに？ あ！ まさか!？」

何かに気付いたと見える彼の言葉に驚き、早苗は手を離してしま
った。

「……お前」

自由の身になった直助は、得意げに言い放った。

「お初にお目にかかります。佐々木助三郎様御内儀、橋野早苗様。

……いや、渥美格之進殿！」

「くそっ……」

己を知った男。己の変化の瞬間を見た男。

早苗は動揺した。彼は大叔父の回し者に違いないという考えが、彼
女を焦らせた。

こんな危ない男を、のこの水戸に返すわけにはいかない。

早苗は再び直助を捕縛しに掛かった。

しかし、焦りが祟ったか、彼に手を伸ばしたとたん、彼女の視界
は閉ざされた。

「う、眼が……」

直介に隙を突かれ、目くらましの粉を掛けられた。
眼が見えぬのであれば、身動きは取れない。

「は、ははは…… ざまあ、ねえな……」

一時の安堵で彼は笑い始めた。

その笑い声に不快感を露わにした早苗は、見えぬ眼で敵を睨んだ。

「おのれ…… 下郎……」

しかし、直介にもはや怖いもの無し。

軽口を叩いた。

「怖い奥様だ。さてと、助三郎様の御内儀は男だったか、助三郎様もモノ好きな……」

そう言つて彼は部屋の外に向かって歩き始めた。

「待て！ 違う！」

早苗は慌てた。

『男に化けられる』という事実より、

『本当は男で女に化けている』との間違つた情報の方が恐ろしい。

「俺は、男じゃない！」

苦しみながら、早苗は彼の誤解を解こうとした。

しかし、彼は聞く耳など持つてはいなかった。

くるりと振り向くと、

「どこからどう見たつて、誰が見たつて、あんたは立派な男だ」

早苗は弁明を試みた。

「だから……」

「あ、言い訳はダメだ。あの爺さんからたんまり褒美をせしめるいい機会なんだから」

完全に大叔父の回し者だとわかったとたん、早苗は取り乱した。

「やめろ！ やめてくれ！ 大叔父には、あの人だけには、頼むから言わないでくれ！」

早苗は懇願した。

「え？ そんなこと言われてもねえ……」

渋る彼に早苗はとうとう頭を下げた。

「お願いだ…… 頼む、この通りだ……」

そんな哀れな姿を眼にした直助は、ぼそつと気まずそうに呟いた。

「……いくらなんでも、ちょっと可哀想すぎるよな」

直助にとって、早苗は仇でも何でもない。

ただ、主の伊右衛門から命じられた『渥美格之進を調べろ』という仕事に面倒で気に食わなかっただけ。

理不尽な主の言っなりも嫌だったので、彼は早苗に近づき、小さな声で話し始めた。

「……助三郎様は早く諦める。いくら足掻いても、あなたには無理だ」

早苗は力無く俯いた。

「あの爺さん、いつぱい策を考えてる。これからもいろいろお前を排除しようと仕掛けてくる」

早苗は黙ったまま。

何も言い返せなかった。

「……自分をもっと大切にしな。あなた、水戸藩内でもかなり優秀じゃないか」

早苗はその言葉にこらえきれず涙した。

女の自分は疎んじられ、男の自分は重宝される。

「助三郎様は、男好きかも知れん。でも、あの方の幸せ考えて見たらどうだ？」

思い言葉に、早苗の胸の奥が痛くなった。

「……助三郎の、幸せ？」

そう口にして、帰ってきた直介の言葉に、さらに彼女は打ちひしがれた。

「ああ。普通に女と結婚して、子どもをつくる。それが一番だと俺は思う。あんただって、男に囲われてなんかいないで、普通に女と結婚して立身出世図ったほうが絶対にいいって」

早苗の正体が『男』と信じる直介はそう言った。

「俺は、俺は……」

泣きだした早苗を少し気まずそうに眺め、

「ま、あんたの気が済むまで好きなようにしな。渥美殿……」

ポンと肩を叩くと、彼は去った。

日が登った。

早苗は、外にある井戸で眼を洗っていた。

異物が入った上に一晩中泣きつづけたせいか、眼が腫れて最悪の状態だった。

そのまだ本調子ではない彼女の眼に、ふっと男の顔が入った。

それは、タライに張った水面に映る己の男の顔。

彼女は見たくもないそれから眼を逸らし、元の姿に戻ろうと集中した。

再び眼を開け、タライを覗き込むとそこにはまだ男が映っていた。思わず彼女は、その水面を手で払った。

「俺ができないんだ！ お前に出来るわけがない！」

自分でできない事を、助三郎が出来る訳がない。

彼は優しいウソをついたに違いない。『格之進』と寝たに違いない。

早苗はそう思った。

「ごめん…… 助三郎……」

それは何度目か解らない謝罪だった。

その時、妙な音が早苗の耳に入った。

まだ若干霞む眼に、転がる黒い塊が入った。

眼を凝らし、やっと早苗はそれが何かを把握した。

「クロ!?」

早苗は慌てて飼い犬を縛るすべての縄をほどいた。

その彼の第一声に早苗は絆された。

『クロの尻尾が、足が千切れちゃう！ 鼻も千切れちゃう！ 痛い
よう!』

大袈裟な犬を冗談半分で脅した。

「医者呼んで縫い合わせてもらおうか。もっと痛いぞ」

するとクロはしっかりお座りして言った。

『痛い嫌い！ クロなんともないよ!』

「そうか、だったら呼ばなくて良いな」

早苗は少し縄の跡が残る彼をそつと撫でて慰めた。

「…………あの男に縛られたのか？」

クロはしょんぼりと耳を垂らし、俯いた。

『夜中に起きたら、縛られてたの。クロ、悪い犬。何も出来なかつた』

情けない様子の犬を早苗は責めなかつた。

「…………クロは何も悪くない。怪我が無くてよかつた」

撫でていると、突然クロは起き上がり早苗の眼をじつと見た。

『…………格さん、これも助さんに、言ったらダメなこと？』

『助さん』の言葉に早苗はドキリとした。

「…………え、あ、ああ。心配するから言ったらダメだ」

無理やり笑顔を作り、クロに言い聞かせた。

クロは訝しげな様子を見せたが、大人しく従った。

『…………わかつた。言わない』

しばらく心地よさそうに撫でられていたクロだったが、はつと何かに気付いた。

『あ！ お姉ちゃんは？ お姉ちゃんは大丈夫？』

「へ？ お姉…… ってまさか!？」

早苗は下女の部屋に走った。

「大丈夫か!？」

障子を勢い良く開けると、そこには手と足を縛られ、猿轡を噛まされた下女が転がっていた。

すぐに早苗はその縄を解いて下女を助けた。

「……変な事されなかったか？」

本来なら、こんな重要な事を男の姿で聞きたくはなかった。

しかし、元に戻れないものは仕方がない。

そんな彼女の考えとは裏腹に、下女は気丈に答えた。

「大丈夫です。朝になってやっと縛られていたのに気付きました。それより……」

下女は心配そうに早苗を見た。

聞きにくそうな事を聞こうか否か渋っている様子が早苗にはよく分かった。

そこで彼女は精一杯明るいふりをした。

「見ての通り無事だ」

しかし、下女はまだ不安げ。

「……本当ですか？ 若奥さまを狙つての侵入では？」

早苗はウソをついた。

「いや、ただの物取りだった。そんな奴が、俺に敵う訳ないだろ？」

「それは、確かに……」

やっと納得した様子の下女の注意をさらに逸らすため、早苗は話を都合のいい方へ持って行くことにした。

「あの子……」

「なんですか？」

「目薬持ってない？」

その日一日、早苗は目薬しながら仕事をする羽目になった。

助三郎が出立して三日が経った。

早苗はあの晩からずっと、男の姿のままだった。

「どつやったら、俺元に戻れるんだろな？ クロ」

早苗は鉈を大きく振りかぶって、薪を割った。気持ちのよい音が響き、綺麗に薪が割れた。

小さくなったそれをクロが啜え、庭の隅に持って行った。そこには薪が山積み。

「クロ、ありがと。ついでに、そこに巻き藁あるよな？ 持ってきてくれ」

クロは忠実に主の言うことを聞き、巻き藁を早苗の足元に置いた。

「見物するか？」

クロはその場でお座りしていた。

早苗はクロを撫でた後、部屋に戻った。

部屋の隅の箆笥の奥、帯や着物の下から自分の大刀を引っ張り出した。

それは、嫁入り道具として持ってきた刀。

所持は良いが、夫から抜刀を一切禁じられている刀。

早苗はそれを眼の前に掲げ、引き抜いた。

一点の曇りも無い刀の刃に、己の顔が映った。

それは、男の顔だった。

「……幸せ、か」

ふっと頭をよぎったのは、笑顔の助三郎だった。

「俺の幸せって、あいつの幸せって、なんたるな……」

早苗は刀を鞘におさめた。

そして、庭へ向かった。

「クロ、助三郎には絶対に言うな」

早苗は襷掛けしながら、飼い犬に念押しした。

そして、精神統一をすると刀を抜いた。

抜き方を、刀の使い方を教えてくれたのは、誰であろう、助三郎にもかかわらず、彼は早苗に刀を抜くことを禁じている。それも、早苗の自害未遂がすべての原因。

「……助三郎、すまん。でも、練習は必要なんだ」

普段は木刀の稽古しかしない。

夫の留守をいいことに、早苗は真剣で稽古した。

そして、刀を振るう己の姿を夫が見ても、動じずに笑顔で居てくれる日が来ることを願った。

素振りを何度も行い、感触を確かめた。

そして、仕上げにとクロに持ってこさせた巻き藁を斬った。

「やっぱり、修行が足りないな……」

断面がまっすぐではなかった。

改めて、日々の精進が必要だとしみじみと感じ入っていた。

すると、突然女の声が。

「初めて見ました。格之進さまの刀の稽古」

聞き覚えのあるその声に早苗は我に返った。

「あれ？ お夏？」

そこに居たのは、早苗が一番心を許せる下女、お夏だった。彼女は笑顔で帰参の挨拶をした。

「只今戻りました。今日より、復帰いたします」

「お夏！」

早苗は彼女に抱きついた。

対格差が大きく、お夏が抱き締められていたが。

「……格之進さま？」

お夏は、男の状態の主に抱きつかれたことは一度もなかった。それ故驚いた。しかし、彼女は主の常ならぬ様子に気付いた。

「早苗さま、もしや……」

早苗は身体を離し、お夏の顔を見た。

「ずっと戻れてないんだ。もう元に戻りたい……」

お夏は、穏やかに安心させるように言った。

「落ち着いてください。何があったのか、お話し下さい」

早苗はお夏と共に家の中へ戻った。

一通り早苗はお夏に己の身に起こった事を話した。

「……頼む。あいつが帰って来ても、この事は言わないでくれ」

お夏は、本物の早苗の下女だった。

「早苗さまがそうおっしゃるのであれば、墓場まで持って行きます」

早苗の命は絶対服従。彼女は主にそう誓った。

「……ありがとう、大分気が楽になった」

気の許せる下女に、思っていたこと、不安だったことをぶちまけたおかげか、早苗の重かった心は軽くなった。

「では、もう一回試してみては？」

お夏のその提案に、早苗は乗ってみた。

「そうだな。やってみる」

心を落ち着かせ、早苗は眼を閉じた。
少しの後、お夏が声をかけた。

「早苗さま、眼を開けてください」

早苗は眼を開けると、恐る恐る自分の手に視線を落とした。
そこにあつたのは女の手。

「戻った！ お夏ちゃん、ありがとう！」

早苗は嬉しさのあまりお夏に抱きつこうとした。
しかし、立ち上がったとたん、見事に転んだ。

「早苗さま！ 大丈夫ですか!？」

「うん…… 大丈夫。着物が引つ掛かったみたい……」

まだ本調子では無かったようだ。

普段ならば姿に合わせて勝手に変わる着物が、男物のままだった。
それ故、背の高い格之進に合わせて仕立ててあつた着物は、小柄な早苗には大きすぎた。

その大きな着物手繰り寄せ、早苗は文句を言った。

「格之進って、大きすぎるわ」

お夏はくすりと笑った。

「殿方は大きい方がカッコいいのではございませんでした？」

からかつようにそう言つと、早苗は自信満々で言った。

「それは助三郎さまだけ。格之進はどうでもいいの!」

「そうですか。でも、早苗さま、そんなお着物では…… 着替えてはいかがです?」

男物をずるずる引きずつていては、面倒。

姿かたちに合わせた着物に変える必要があった。

しかし、早苗はそれ以前にもっとしたいものがあった。

「あ、でも、その前にお風呂入りたい……」

先ほどの鍛錬でかいた汗を流したかったのだ。

「はい、では沸かして参ります」

お夏はてきぱきと下女の仕事を始めた。

「お願いします! ああ、やっとこの身体でお風呂入れるわ!」

一時の幸せを噛みしめ、小躍りする早苗を、クロが首をかしげて見ていた。

〔07〕 変化

「暑いわね……」

未だ京の山科に居るお銀は、かんかん照りの天を恨めしげに仰いだ。

「日焼けはお肌によくないのよ」

それ故、彼女は夜働きの方が好きだった。

しかし今は文句など言っではいられない。

内蔵助の住まう家に、江戸から文が届いたのだった。

お銀がお目当ての屋根裏に到着すると、内蔵助は文に目を通していた。

その隣には長男の主税の姿があつた。

「……父上、堀部殿はいかなるお考えでございますか？」

「……単騎突入も辞さない考えだ」

「……それは無謀では？」

「……勿論。急いではことを仕損じる。安兵衛を止めんといかなら

どつちやら、江戸の仲間の中の過激派が、行動に出ようとしているらしい。

重要な情報をお銀は洩らさず聞いた。

「暑つついな……」

弥七は江戸の町を歩いてきた。さすがの彼も暑さにはかなわず、顔をしかめた。

急いで日陰を見つけると、手拭いで汗を拭った。

そして涼しい日陰をくれた親切な屋敷を見やった。

「この殿様は…… 確か、土屋様だったかな？」

今から彼が行こうとしている場所は喧騒に包まれていたが、その『土屋様』の屋敷は、対照的に静寂に包まれていた。

汗が少し引いた弥七は、すぐにその日の仕事へと向かった。

「申し訳ございませぬ！」

弥七の眼に、一人のまだ若い侍が、頭を地面にこすりつけている姿が入った。

上司らしき男が彼に説教をしている。

「どうしてそれならそうと報告をせぬ！ 勝手にあのような者達を入れおって！」

彼が指差す方向には、大工の集団が忙しそうに作業していた。

「申し訳ございませんね！ 腕は確かと聞き、つい。人手も足りませんでしたので……」

「人数が足りんだと！？ どういうことだ！？」

「は。上杉家でも改修工事が重なり、大工が足りないとの仰せで……」

その二人の隣で、老人が口を開いた。

「……足りなかったのならば、仕方あるまい。もともとこちらが無理を言ってるのだからな」

「しかし、殿……」

不満げな侍をよそに、大工の一団の中から男がやって来た。

「俺らの腕をなめてもらっちゃあ、困りますぜ！ 殿さま」

すぐさま侍がその大工を叱った。

「殿に口を聞くな。町人の分際で！」

すぐさま大工は言い返した。

「これだから侍はイヤなんだよ！ 刀差してりゃえらいと思いやがってよ！」

「なに!？」

侍は刀に手を掛けた。

そんな姿を大工は鼻で笑った。

「おう、お前さんらの武器は刀だが、俺らの武器はこの大工道具だ」

持っていた金槌を突き出した。

「だからどうした」

対抗するように鼻で笑った侍に、大工は怒鳴り付けた。

「俺らはこれに命かけてんだ！　これで飯食ってんだ！　舐めても
らっっちゃ困るんだよ！」

彼の背後から、大工仲間の男たちの野次が飛んできた。

「さすが棟梁！　日本一！」

「よ、平兵衛！　男前！」

どんどん野次は大きくなり、味方の居ない侍が負けた。

怒りで顔を真っ赤にした彼は、捨て台詞を吐きその場を後にした。

「黙って仕事をせい！」

現場には笑い声が響いていた。

威勢の良い大工達と吉良の家来の喧嘩。

その光景を見た弥七は冷笑した。

「……江戸の大工を使わず、息子の所の大工を使うってか」

弥七は見抜いた。

言い争っている大工以外は、すべて米沢からやってきた大工達。

もしも、屋敷の間取りや設計図が外部の大工を通じて赤穂方に漏れたら、一大事だからだ。

「吉良様もなんだかんだいって、仇討に怯えてるんだな。面白れえ」

弥七はこの情報を、新鮮なうちに持つていくことに決めた。

早苗は久しぶりに会う弥七の、ある行為に眼を丸くしていた。

彼が茶を飲み干したのだった。

今まで一度たりとも、彼が彼女の前で茶を飲んだことは無かった。

「あ、飲んだ……」

早苗のその眩きに弥七ははっとし、なぜか謝った。

「え？ あ、すまねえ……」

妙な彼を早苗はクスリと笑った。

「いいえ。凄く嬉しいです。やっとわたしが淹れたお茶、飲んで貰えたんですから」

「あ、その、あまり茶を飲む習慣がないんでねえ……」

珍しく照れる弥七に早苗はまたも笑った。

「せっかくです。もう一杯どうぞ。今日は暑いから、喉乾きますよね」

早苗は空になった湯呑に茶を淹れた。

急須から茶が出てくる様子を黙って見ていた弥七だったが、はっと気付き膝を進めた。

「おっといけねえ。本題だ」

早苗も急須を置き、仕事の顔になった。

「大きな動き、あつたんですか？」

「へい。吉良様が本所（*1）に屋敷替えを」

早苗は頭の中で地図を描いた。

「本所ですか？ ちょっと江戸の中心から外れてますね」

吉良の屋敷は江戸城とは至近距離。

それが今度の屋敷替えでかなり遠くになってしまった。

「柳沢様が、吉良様を厄介払いしたんです」

弥七はそう断言した。

「……それって、お城の近くで仇討されると、迷惑だからですか？」

「いや、あの御方は仇討を信じちゃいねえ。ただ吉良様の居た土地が欲しかったただでさあ」

策士の柳沢。なにか思うところがあってそうしたのだろうと、早苗は弥七の話に納得した。

「そうですか……　それで、吉良さまはもう本所でお住まいですか？」

「いいえ。貰った場所に屋敷建て直してましたぜ。大騒ぎしながら」

ニヤリと弥七は笑った。

先程の大工と侍の喧嘩を思い出していたのだった。

「吉良さまは引越しか……　大石さまは大石さまだし……」

「そう言えば、お銀からの連絡は？」

早苗は彼について先ほど到着したお銀の文を見せた。

「江戸の仲間から、再三仇討を促す書状が来ているそうです。でも、大石さまは動かないそうです」

「時期尚早ということだな……」

「でも、しきりに御家再興の嘆願書を送っているようですね？」

「それは確かだ。柳沢様の屋敷で何回か見た」

早苗は少し疑問に思っていた事を確かめた。

「大石さまの本懐は、討ち入りですよね？」

弥七は文を畳むと即答した。

「へい。赤穂で見た通り。なんで、御家再興の嘆願書は目くらまし。仇討を信じてない柳沢様にはちょうどいい」

平和的解決は出来ないのかと、早苗はふと思った。

「もしも、赤穂浅野家が再興すれば仇討ちも無くなるのではないかと。」

「……御家再興って、やっぱり無理ですよね？」

すぐに弥七から答えが帰って来た。

「無理でしょうね。赤穂は柳沢様がつぶしたようなもんだ」

その答えを、早苗は分かってはいた。しかし、思わず溜息を洩らしていた。

茶を三杯飲み干した時、弥七はあることに気付いた。

「ところで、今日助さんは？」

途端に早苗の表情が曇ったのに彼は気付いた。

「長い間留守なのかい？」

「水戸に帰ってるんです。忙しいのか、戻るのが遅くて……」

既にその時、助三郎が江戸を発ってから半月を越し、一月になるうとしていた。

すぐに戻って来ると言ってお出で行った夫の帰宅を、心待ちにする早苗だった。

「そうですかい。寂しいですね……」

「はい……」

それから数日後の夜遅く、早苗はお夏の声で眼を覚ました。彼女はなぜかクロを抱っこしていた。

「……どうかした？ クロに何かあった？」

「クロがなにか言いたげなので、早苗さまならお解りになるかと思
いまして……」

「何かしら」

早苗はクロをお夏から預かると、何事が聞いた。
すると彼はこう言った。

『虎轍こつちにお水とご飯あげて！』

「へ？ 虎徹？」

『水戸から助さんに乗せて一生懸命走つたの。お腹空いてのど乾い
てるって』

夜中に騎馬での帰宅。助三郎は馬を無理に跳ばしたに違いない。

早苗は助三郎の愛馬、虎徹の労を労うことにした。

傍に控えていたお夏に、仕事を命じた。

「お夏ちゃん、庭に虎徹が居るだろうから、水あげて。飼葉は無い
から、野菜でもあげてくれる？ なるべく良いやつを」

「はい。分かりました」

お夏が仕事へ向かうと、早苗は夫の行方をクロに聞いた。

「助三郎さまは？ どこ？」

するとクロのピンとたった耳は少し萎れ、尻尾は力を失った。

『ここまで来た。でも、すぐに奥の部屋に行っちゃった。ク口撫で
てくれなかった……』

クンクンと悲しそうな声を上げた犬の頭を、早苗は代わりに撫で
てやった。

「泣かないの。助三郎さま、きっと疲れてるのよ」

早苗は少し元気を取り戻したク口に礼を言うと彼を寝かしつけ、
早速夫を探した。

そして、奥の書斎として使っている部屋で彼を見つけた。

布団も敷かず、旅装も解かず、壁にもたれて刀を抱いて眠ってい
た。

早苗は、久しぶりに見る夫の姿にほっとし、寝顔をじっと見つめ
た。

しかし、すぐに彼の身形が酷く悪い事に気付いた。

着物はところどころ破れ、ほつれ、道中で付いたと見える埃やど
ろですっかり汚れていた。

顔の無精ひげも目立ち、更に埃と汗で汚れていた。

早苗はそんな夫の旅の疲れを、少しでも取ってあげようと思立
ち、盥に水を張り手拭いを浸した。

それを硬く絞り、夫の顔に着く泥を拭うことにした。

助三郎の頬に、手拭いが付いたか付かないかの一瞬だった。

彼は突然眼を開け、凄まじい速さで、抱いていた刀を抜き払ってい
た。

ガチツという鈍い音が部屋に響いた。
と同時に、男の怒声が飛んだ。

「助三郎！ 落ち着け！ 俺だ！」

早苗は助三郎の白刃を、傍に転がっていた小太刀の鞘で受け止めていた。

もしも、刀に手を伸ばして防御する動作が遅れていたなら、変身せずに女のままであったら、彼女の命は無かったに違いない。

彼女の怒声で助三郎は我に返った。

「格さん！？」

急いで刀を鞘に戻すと、早苗から大分距離を置いて土下座した。

「すまん！」

助三郎は顔を上げず、謝り続けた。

「大丈夫だから、顔を上げてくれ……」

しかし、助三郎は顔を上げなかった。

「お前の命、危うく奪う所だった……」

泣きそうな声でそう呟きながら、彼は震えていた。

早苗も夫のとった恐ろしい行動に心底動揺していた。

しかし、平静を装い笑顔を作り、彼を安心させようとした。振るえ続ける夫の手に、そっと手を重ねた。

しかし、瞬時に助三郎は手を引っ込めた。

「…………大丈夫か？」

普段とは様子が大分違う夫が気に掛かった。帰ってきた返事はなんとも弱弱しい声だった。

「…………大丈夫だ」

そうは言っても、大丈夫そうでない彼を早苗は気遣った。

「顔色が悪い…………」

顔を覗き込んだが、助三郎はなぜか早苗と眼を合わせようとしなかった。

その代わり、低く言った。

「大丈夫だ………… 寝れば治る…………」

そして、早苗に背を向けると、ゴロンと畳に横になった。

刀を抱きよせ、抱いたまま。

勿論、先程のようにとっさに抜いてしまわないよう、刀の柄を足の方に向けてはいた。

早苗はそんな夫の姿に驚いた。

「ここで寝る気か？ 布団も敷かず？」

助三郎は寝ながら言った。

「……お前と同じ部屋で寝て、またおかしなことになったら敵わん。布団は面倒だ。別にいい」

あまり調子が良さそうでない彼に、これ以上声をかけてはいけな
いと感じた早苗は、大人しく下がることにした。

「お休み。助三郎……」

返事は帰ってこなかった。

まだ夜が深かった。

早苗は寢所に戻ると、女に戻り、布団へ潜り込んだ。
そして再び眠りに落ちた。

朝、早苗は少し起床時間が遅くなった。

急いで身形を整えると、書斎の助三郎を見舞意に向かった。

「おはよう！ 助三……」

部屋の襖は開け放たれていた。

しかし、中には誰も居なかった。

早苗はそれから家の中の心当たりを探したが、彼は何処にもい
なかった。

「お夏ちゃん、助三郎さま見なかった？」

台所で食事の支度をしているお夏に声を掛けた。

「そういえば、朝とても早くなにも言わずに出て行かれました……お伝えせず、申し訳ありません」

早苗はがっかりしたが、彼女を責めはしなかった。

「謝らなくていいわ……ありがとう」

早苗はその日出仕日だった。手際良くその日の仕事を終えると、急いで帰宅した。

出迎えたお夏に、すぐさま聞いた。

「助三郎帰って来たか？」

「いいえ。まだです」

その言葉に早苗は安堵した。

「よし。帰って来る前に夕餉作ろう。あ、お夏は休んでいいぞ」

助三郎の好きな物をいっぱい作って、一緒に食事をしたかった。しかし……

彼は待てど暮らせど、帰ってこなかった。

早苗は箸をつけていない料理を前に、船を漕ぎ始めた。
そんな彼女に、お夏が声を掛けた。

「……早苗さま、もうお休みになつては？」

「……ううん。待つわ。せつかく作つたんだもん」

しかし、結局早苗は寝落ちしてしまつた。

彼女がはっと気付いた時、既に空が白け、部屋に日の光が差し込んでいた。

「寝ちゃつた……」

盛大に落ち込む早苗は、はらりと落ちた物に気付いた。

それは男物の羽織。助三郎の紋が染め抜いてあつた。

「……助三郎さま」

夫が帰つて来た事に気付くと同時に、寝てしまつて出迎えが出来なかつた事を詫びようと、早苗は助三郎を探した。

しかし、またしても彼は居なかつた。

「……なんで会えないの？」

しかし、くよくよしてばかりも居られない。

夫に食べてもらえなかつた夕餉は無駄にせず、弁当箱に流し込むと職場へと向かつた。

その夜、早苗は昨晚の無念を晴らすため意気込んでいた。

「今日は絶対寝ないわ！」

何処から出してきたのか、鉢巻をして、襷がけまでしていた。

少しおおげさな姿にお夏は少し笑ったが、彼女は早苗の味方だった。

「わたしも早苗さまがもし寝てしまわれても良いよう、起きています」

「ありがとう。心強いわ。よし！早く帰ってこい！助三郎さま！」

しかし、そんな早苗の願いもむなしく、助三郎の帰宅はその日も遅かった。

早苗はどうにか出迎える事が出来たが。

出迎えるなり、助三郎は驚いた様子で早苗を見た。

「……なんだ、起きてたのか？」

彼に早苗はにこつと笑い掛けた。

「うん。起きてた」

そして、いつものように夫から刀を受け取ろうと手を差し出した。しかし、彼は渡さなかった。

「……起きて待つてなくていいから、寝てる」

冷たくそう言い放ち、早苗の横をすり抜けて行った。

早苗の眼は一瞬で冷めた。

そして、困惑した。

「でも、でも……」

奥へと向かう夫を追いかけると、彼は彼女の顔も見ず無感情に言った。

「とにかく、寝るんだ。身体に悪い」

そして、書斎として使っている部屋の障子を開けた。もちろん、そこは夫婦の寢所ではない。

「あ、待って……」

夫の後に続こうとした矢先に、鼻先で障子を閉められた。

早苗は悲しくなったが、ぐっとこらえ夫に声を掛けた。

「……お風呂は？」

「いい」

「……ご飯は？」

「要らん」

なんとも冷たい言葉に、早苗は言葉が出なかった。期待した彼の笑顔はどこにもなかった。

諦めて早苗は居間へと戻った。

そこではお夏が助三郎の食事の支度をしていた。

「お夏ちゃん、ごめんね、ご飯要らないって……」

お夏は手を止めた。

早苗は俯き加減で言った。

「明日のお弁当に持っていくね……」

深い溜息をついた彼女を、お夏は見逃さなかった。

「お疲れの御様子。そろそろお休みになつては？」

しかし、早苗はそこから動こうとしなかった。

様子がおかしい主に気付いたお夏は、彼女の傍に座り話を聞いた。

「……助三郎さま、わたしがあの男に襲われそうになつた事、知つてるのかな」

早苗が心配するのは、あの夜の出来事だった。

大伯父の配下の下男に、手籠めにされそうになつた事。

しかし、早苗は無傷だった。なにも無かつた。

「大丈夫です。あの方、あの夜になにも見てない、聞いて無いとおっしゃつてたんでしょう？」

「でも……」

あの夜この役宅に居たのは、お夏と入れ替わりで水戸に帰つた佐々木家の下女。

彼女はなにも見てない、なにも聞いて無いと言っていた。

しかし、早苗はそれを信じきれなかった。

「もしかしたら、嘘かも…… どうしよう。全部知ってて、助三郎さまに話してたら……」

佐々木家の下男下女は皆早苗に優しくかった。

しかし、一番腹を割って付き合えるのは、実家から付いて来たお夏だけ。

お夏も早苗を支えようと日々頑張っていた。

この時も、なんとか早苗を落ち着かせようと、彼女に声をかけ続けた。

「落ち着いてください。大丈夫です。なにも心配はありません」

数日後、早苗は非番だった。

相変わらず助三郎は早苗に顔も見せず、すれ違いが続いていた。

それ故、早苗の鬱憤は溜まって行く一方。ちよつと気を抜くと、嫌な事ばかり考えてしまうようになっていた。

しかし、それではいけないと思った彼女は、気分転換の為に部屋の模様替えをし始めた。

一通り、満足のいく配置になった後、早苗は掃除にとりかかった。

普段からちよくちよく掃除しているので、そこまで汚れは酷くない。

しかし、彼女がどうしてもしなければいけない部屋が一つあった。

しばらく手を出せなかった、書斎。

助三郎が寢所として使うようになってから、早苗は一度も足を踏み入れてはおらず、掃除もしていなかった。

彼はは恐らく今晚も夜遅くまで帰ってこない。

早苗はまたも鬱々としそうになったが、頭を切り替えた。

「よし！ やるわよ！」

勢い良く障子を開け放つなり、目の前に広がる景色に、一瞬言葉を失った。

書斎は酷く散らかっていた。

書き損じた紙を丸めた物が床に散らばり、何処から運んで来たのか布団は敷きっぱなし。

汗をかいて汚れたであろう寝間着も、自分で洗濯したと見える下帯や手拭いも、畳まずに部屋の隅に丸めてあった。

ここまでだらしない事をした夫を見た事が無い早苗はこの光景に驚き、しばらく立ち尽くした。

まさかこんなことになっているとは思ひもなかった。

「とにかく、掃除しなとね……」

万年床と化しつつある布団を部屋から運び出し、洗濯が必要な物とそうでないものをよりわけた。

ひとつおり部屋の床が綺麗になると、今度は机の上の片付けに着手した。

質が悪い紙に殴り書きしたもののや、清書したと見える紙。様々な物がぐちゃぐちゃになっていた。

早苗はそれを一枚一枚選りわけ、纏めて行った。

「こんな良い紙にこれだけの文字？ 勿体無……」

早苗の手がピタリと止まった。
上質な紙に書かれている文章を眼にした途端、彼女の血の気は一気に引いた。

「なに？ これ……」

震えだした早苗の手の中の紙には、こう書かれていた。

『あの婚姻の届け出は紛い物。それ故、あの女子は我が妻に非ず。早々に離縁を申しつくる物成』

「これって……」

最悪な答えが頭をよぎった。

しかし、それを口に出す前に、早苗は人の気配を感じとった。

恐る恐る、その気配を確かめようと振り向いた。

それは、助三郎だった。

こんな時間に彼が戻ってくるとは思いもしなかった早苗は驚き、声を上げた。

「お、お帰りなさいませ……」

助三郎は、訝しげな眼で早苗を見た。

「……ここで何やってる」

早苗は手に持っていた紙を背後に隠した。

「掃除を……」

助三郎はジロリと部屋を見渡した。

部屋はもとより、机の上の紙がほぼすべて纏められていることと、早苗が背中に一枚紙を隠し持っていることに気付いた。

その途端、彼は早苗から紙を奪い取り、ぐちゃぐちゃに丸めると、低く言った。

「勝手に触るな……」

「ごめんなさい……」

気まずい早苗は後ずさりした。

追い打ちを掛けるように、助三郎は彼女を追い出そうとした。

「早く行け」

「でも、まだ片付けが……」

そう言っただけで彼女が掃除道具に手を伸ばした瞬間、彼は怒声を上げた。

「掃除なんかいい！ 良いから早く出ていけ！」

早苗は彼の声に驚き、身一つでその場を走り去った。

「くそっ！」

一人残った助三郎は、その場に崩れ落ちた。畳に気だるげに転がると、しばらく瞑想していたが、突然、キツと眼を見開き天井を睨みつけた。

「……これも、すべて計画通りなのか？」

忌々しげに吐き捨てた。

〔07〕 変化（後書き）

（*1）本所

現在の東京都墨田区。両国国技館の近く。

〔08〕 『……助三郎？』

早苗は部屋から一目散に逃げた。

自室に駆け込み、障子を閉めるなり畳にへなへたと座り込んだ。

『あの女子は我が妻に非ず』

『早々に離縁』

この文句が彼女の頭を駆け巡った。

自分は近い将来、夫に捨てられるのか。

はたまた、元から結婚は嘘だったのか……

しかし、しばらくすると彼女の中に一つのある考えが浮かんだ。

「調べたら解る……」

覚悟を決めるその時が来るのを早苗は感じていた。

その日の夕方、早苗は気晴らしに料理をした。

助三郎の好きな煮物を作った。彼に食べてもらいたい。その一心で。

書斎に籠っている居る筈の夫を訪ね、彼女は声を掛けた。

一緒に食事をしたいという、小さな希望を持って。

「助三郎さま、夕餉できたんですけど……」

しかし、部屋の中から返事は無い。

「……助三郎さま？」

やはり返事は無し。そこで、早苗は思い切って部屋の襖を開けた。その部屋の中には、誰もいなかった。

「居ない……」

同じ家に住んでいる筈なのに夫に会えない。顔を見られない。声を聞けない。

早苗は深く溜息をついた。

「逢いたい…… 助三郎さま……」

こんな弱気を、彼女はほとんど言ったことがなかった。なぜなら、彼はいつも傍に居たから。

早苗は眼を瞑った。

これしか彼に逢う方法は無かった。

まぶたに浮かぶのは、笑顔の助三郎だった。

『早苗、なに湿気た顔してる？』

早苗の耳に聞こえるのは、からかうように笑う優しい声だった。

「助三郎さま……」

諦めた早苗は、その日もお夏と二人で夕餉をとった。

しかし、くよくよしてばかりも居られなかった。

仕事がある。これで彼女は寂しさと漠然とした恐怖とを忘れようとした。

その日も黙々と大日本史の編纂の仕事をこなしていた。

そんな折、同僚の一人が彼女に声を掛けた。

「渥美、二年前の藩士名簿って何処に置いた？」

「その三つの山の右端の上から二番目です」

書類の整頓を行ったのは早苗。

皆が適当に置きすぎて、酷い山になっているのに我慢が出来なくなつた。

そして使いやすいように種別、年代別に分けたのだった。

「お、あつたあつた。ありがとな。几帳面なのがいるとほんと助かる」

彼は満足げに早苗の肩をポンポンと叩き、自分の机と戻って行つた。

早苗はその時、ふと気がついた。

藩士の名簿がある。

それと同様に、婚姻関係の事が記された書類があるに違いない。

そのような人事の書類を管理しているのが彼女の父、又兵衛。

彼に聞けばすぐにすべてが解る。

しかし、父に確認するのは気が引けた。

そこで、彼女は自分で調べることにした。

思い立ったが吉日と、昼過ぎに早苗は上司の部屋を訪ねた。

「お聞きしたい事が有るのですが、よろしいでしょうか？」

「なんだ？ 要件を言ってみる」

彼は忙しいらしく、仕事をする手を止めはしなかった。

早苗は簡潔明瞭に言った。

「藩士の姻戚関係の書類は、書庫に保管して有りますか？」

上司は筆を置き、早苗の顔を見た。

「有るはずだ。が、それでなにを調べたい？」

「妻の名前がまだちゃんと残っているか、確認をしようと思いましたが」

格之進の配偶者は『美帆』

彼女は行方不明。格之進は新たに嫁取りせず、彼女をずっと探し続けています……

誰が言ったか知らないが、そんな噂が横行していた。

どうやらそれはこの江戸の職場にも入って来ていたようだ。

上司は溜め息をつきながらも、少し悲しげな眼で早苗を見た。

「お前は、本当に一途なんだな……」

早苗にその言葉が突き刺さった。

その言葉の通り、彼女は幼い時からずっと助三郎一筋だった。何が有ろうと、彼を想う気持ちに揺るぎはなかった。

返す言葉が見つからず、うつむくしかなかった彼女に上司は穏やかに言った。

「お前には余計なお節介かもしれん。だがな、待っても帰ってこない嫁さんを待つより、諦めて早く新しい嫁さん見つけたほうがいい」

その言葉が更に早苗を苦しめた。

それはあたかも『助三郎を諦め離縁し、新たに嫁ぎ直せ』と言っているかのようにだった。

その日、早苗は覚悟が決まらず、書庫に向かえなかった。

代わりに気分転換にと由紀の家に遊びに行った。

お孝も丁度来ていて、ワイワイ三人で話して気分も幾分晴れた。

しかし……

「そうなんですよ。何に遠慮してるか解らないんですけど、今まで一度も誘ってくれたことないんです!」

お孝の新助に対する不満だった。

「新助さんって、誰かさんみたいに奥手じゃないでしょ？ ね？」

早苗

その『誰かさん』は、早苗を閨に誘うどころか姿さえ見せない。

「へ？ あ、うん、そうね……」

曖昧な返事しか返せなかった。

「待つてないでお孝ちゃんか押し倒せばいいのよ。家がダメなら昼間でもいいから茶店でね」

相変わらずの過激な由紀の発言に、早苗は眼を見張った。それに答えるお孝にも早苗は驚きを隠せなかった。

「はい。ですから連れ込んで押し倒したんです。でもそれって、雰囲気なんか全く出ないでしょう？」

不満げに言うお孝に由紀は納得顔。

「それもそうね…… 雰囲気は大事だわ」

早苗は、もうずいぶん前になってしまった夫との夜に思いを馳せた。

その時の彼は優しく、温かかった。

数日前まで、いつか元の助三郎に戻り自分の所に帰って来ると彼女は信じていた。

しかし、あの文を見た日から変わった。

不安と恐怖にさいなまれる日々になってしまった。

「早苗も頑張るのよ。分かった？」

とうとうこの日も、早苗は親友二人に相談できなかった。乾いた笑みを浮かべただけだった。耐えきれず、早苗はその場を抜けることにした。

「……じゃ、そろそろ帰るね」

「はあ……」

玄関で男に変わり、刀を腰に差した。

男の姿が変わっても、鬱々が晴れることは無い。思わず漏らした溜息を、丁度帰宅した由紀の夫に聞かれてしまった。

「お疲れですか？ 格さん」

「あ、お疲れ様です。与兵衛さん。今お帰りですか？」

「はい。最近忙しくて」

「それは大変ですね。では、私はこれで失礼……」

玄関を出ようとした途端、早苗の腕は与兵衛に掴まれていた。

「……格さん、悩み事が有れば言ってください。力になれるかもし

れません」

早苗は、親友の由紀でさえ気付かなかった己の悩みに気付いた彼の洞察力に驚いた。

しかし、何も言えなかった。

「……原因は、助さんですね？」

核心を突く彼の言葉に、早苗は更に驚いた。

しかし、それ以上にも無かった。幸か不幸か邪魔が入ったのだ。

「あ、与兵衛さまお帰りなさいませ。すぐ来て！ 早く来て！ あ、早苗またね！」

奥から出てきた由紀が、夫を急かし引っ張って行ってしまった。

「由紀、私はまだ格さんに用事があるんだ。そんなに急がなかったって……」

仲が良い友人夫婦を羨ましげに眺め、早苗は一人寂しく、役宅へと戻って行った。

次の日、早苗は藩主から呼び出された。

狭い茶室に呼ばれ、緊張しながらも主の茶を頂いた。

「……最近どうだ？」

茶を点てながら、綱條は早苗に声を掛けた。

「はっ。大きな動きは見られませぬ。佐々木からの報告は？」

少し不安だった早苗は主に伺いを立てた。

すると彼はフツと笑った。

「あるが、文書だけだ。酷く忙しいようだな？」

どうやら主の所にも顔を見せていない様子。

早苗はますます助三郎が解らなくなつた気がしていた。

「役宅にも夜中に帰って、早朝に出て行くらしいな？」

「はっ、そのようで……」

「そなたともほとんど顔を合わせておらぬのらう？」

時たま、己の正体や渥美格之進と佐々木助三郎の真の関係を知っているような話し方をする主。

一体何処まで何まで知っているのか分からない。

そんな主に、早苗は毎回緊張した。

しかし、彼は彼女の緊張など知ってか知らずか、

「たまには二人で共に顔を見せに来るように。また義父上の昔話をしたいからな」

茶室から出ると、綱條は急に思い出したように言った。

「そうじゃ。今日は職場に戻らずともよい。お前に会いたいと参られた方が居る。書院にて待っておれ」

突然の客人の知らせに早苗は驚いた。

上屋敷で藩主に面会の申し出をする客人。

一藩士でしかない自分に会いたいと言う。

並みの人間ではない。

そんな考えを巡らしていると、綱條は優しい笑みを浮かべた。

「……そなたの元気が、ちょっとは出るといいがな」

早苗は真意が解らず、きよとんとするだけだった。

言われた通り、早苗は書院で一人客人を待った。

誰が来るのかと考えていたが、候補がありすぎて見当がつかなかった。

旅の道中で様々な藩の人間と触れあった。誰が来てもおかしくない。

また、己に会いたいのには建前で、実際は光圀の話をしたくて来る可能性も否めない。

ああでもないこうでもないと考えていたが、客人はなかなか現れなかった。

いつしか早苗は、初めて藩主徳川綱條に謁見した時を思い出していた。

彼女の隣には、助三郎。

もちろん、彼は早苗の大好きな袷姿。

その姿を褒めると、惨めになると妙な事を言った助三郎。

物凄く昔のようなことに思え、早苗は懐かしさを感じていた。

「助三郎……」

眼を瞑る事しか、笑顔の優しい彼に逢えない。
心の中で、彼の声を聞くしかない。

「待たせたな、早苗！」

心の奥底ではなく、耳元で聞こえた夫と同じ声に早苗は驚いた。
そして思わず振り向いた。

そこには、あの顔があった。

「早苗。元気だったか？」

早苗は本当に久しぶりに見る彼に笑みを浮かべた。

……しかし、それは心からの、本当の笑みではなかった。

「……義勝様、お久しゅうございます」

早苗は、夫と瓜二つの信濃の国の藩主とを決して間違うことは無

かった。

化けの皮が剥がれた、偽助三郎ならぬ義勝は、申し訳なさそうに言った。

「やっぱり早苗さんの眼はごまかせない。さすがです」

彼は本物の助三郎により近づける為、地味な着物にしていた。

主網條の言った『元気がちよつとは出るらしい』

それはこういう意味だったのかと早苗は実感した。

主と義勝の冗談混じりの気遣いに早苗は心から感謝した。

「当り前です！ 申し上げたではありませんか。誰が夫と他人を間違う物ですか！」

そう言つて彼の羽織を片手に入れて来たのは、小夜。

義勝の幼なじみで腰元だったが、彼に求婚され正室になっていた。

義勝は彼女に言い訳を始めた。

「だって、水戸様が早苗さんが元氣ないっておっしゃってたから、笑わせてやれつて……」

「ああ、呆れた。何処が笑えるのですか？ 笑えますか？」

「どうかな？ 面白かったですか？」

中身が助三郎と真反対の大人しく上品な性格義勝と、姉さん女房で気が強い小夜の応酬。

早苗はその面白さに、久しぶりに声を出して笑った。

「よかった。笑ってくれたよ。小夜」

「はいはい。解りました。殿、早くお座りになってください」

「はい……」

早苗は再び二人を見て笑った。

それから三人は互いの近況報告をし合い、楽しい時を過ごした。そして、小夜からの申し出で義勝には席をはずして貰い、二人だけで話すことになった。

「わたくしはあなたの真の御姿に御会いしたことがございません」

「そういえば、そうでした」

あの時、早苗は義勝と光圀を守るためずっと男のままだった。そしてその気疲れの結果、忘れもしないあの事件が起こったのだった。

あの事件の発端となった男、あの事件を解決し、己を救ってくれた最愛の男。

彼は今居ない。

「しばらくの間、嚴重に人払いをしています。早苗さん、よろしければ女子に戻って頂けませぬか？」

「はい」

早苗は小夜の前で女に戻った。もちろん、一国の藩主の正室に面

会するのにふさわしい着物に身を包んで。

一通り挨拶を済ませると彼女は思いがけないことを口にした。

「ほとんど初対面のわたくしが言うのもなんですが……」

「なんででしょうか？」

小夜は深刻な顔で早苗にこう言った。

「うちの殿に瓜二つのあの男が、貴女を悲しませているようにしか
思えませぬ……」

早苗はその言葉に驚き、目を見開いた。

「やはり……誰かに相談はされましたか？」

早苗は動揺のあまり答えを返せなかった。

「あの貴女の一番のお友達の若菜さん、いえ由紀さんにも？」

「はい……ただ、事情を知る下女にはすこし……」

早苗の沈痛な面持ちを見た小夜はこう提案をした。

「わかりました。早苗さん、今からわたくしに一切からすべてお話し
なさい」

「え？ 小夜さまに？」

豪快な言葉に早苗は驚いた。

「わたくしは他藩の人間、誰にも貴女の話は漏らしませぬ。それに、うちの殿が御迷惑をかけた分、早苗さんに恩返ししないと」

「ありがとうございます……」

早苗は小夜に、一つ一つ己の悩みを話し始めた。

話して行くうち、早苗の眼から涙が出てきた。

それは下女の前では、決して出なかつた涙だった。

なにも聞かず、ただ早苗の話しを真剣に話を聞く小夜の前で、早苗はいつしか大泣きしていた。

「助三郎さまに逢いたいのに、助三郎さまに逢うのが怖いんです……」

小夜は大泣きし続ける早苗を、己の豪華な打ち掛けが濡れるのもいとわずにそっと抱き締めた。

「あの人の事、いつか諦めないといけなかつてもって、忘れないといけなくなるかもって、ずっとどこかで覚悟してたはずなのに、怖くて、出来ない……」

わんわん泣く早苗の頭を撫で、小夜はずっと早苗の話を聞き続けた。

そこへ突然、

「せつかくだから三人でお茶でもどう？」

暢気な義勝がフラフラつと入って来た。

その声を聞いた早苗の涙は更に激しさを増した。

「助三郎さまの声が、顔が、すべてが忘れられないんです。優しくった時の、あの……」

小夜は凄まじい勢いで義勝を睨みつけた。

「人払いを命じたのに、勝手に入ってくるとは何事ですか！」

妻の恐ろしい雰囲気気押しされた義勝は、大泣きしている早苗にも謝った。

「ごめんなさい。早苗さん、大丈夫ですか？」

早苗からの返事は無し。

そして妻からはキツすぎる言葉をもたらってしまった。

「その顔と声が余計酷くさせるんです！早く出て行きなさい！偽助三郎！」

「そんな……酷い……」

しよげた偽助三郎は、とほとほと一人で何処へ姿を消した。

しばらくの後、小夜は泣きやんだ早苗の涙を拭いてやり顔を上げさせた。

「さあ、早苗さん、前を向きなさい」

そしてすっかり彼女の眼を見て言った。

「いいですか？ あの男は、貴女しか見ていません。あの男には貴女だけです。そう強く信じなさい」

「はい……」

「そして、いつまでも待っててはいけません。勇気を出して、貴女からいきなさい」

「はい……」

「貴女は溜めこむ性格のよう。泣いて吐きだして、少しはすっきりしたでしょう？」

「ほんとだ、身体が、心なしか軽いです」

「そう、そうやって思いつきり泣きなさい。泣く場所がないのなら、わたくしの所に来なさい。江戸住まいなので、いつでも居ますから」

早苗は、優しい姉を見つけた気がしていた。

そして、彼女の言葉に甘えまた相談しに行こうと思った。

それから、早苗と小夜はどこかへ行ってしまった義勝を探した。ふてくされ、いじける彼の機嫌を直すと、三人で茶を楽しんだ。

「では、早苗さん、また会いましょうね」

「はい。小夜さま」

早苗はスッキリとした心持で、二人を見送った。悲観にくれてばかりの生活はダメだと心を新たにしていた。

次の日の夕方、帰宅の準備をする早苗に同僚の一人が声を掛けた。

「渥美、今から暇か？」

「特に予定はございませんが。なにか？」

「みんなで飲みに行こうって。上のおごりだ」

嬉しそうに言う彼に、悪い気はしなかった。

どうせ帰ってもすることは特にならない。

職場の人間ともっと親密になっておいた方がいいと前向きに考えた早苗は、誘いに乗った。

「では、一緒にします」

一件目で結構な量を飲んだ一行だったが、まだまだ序の口だといつて、二件目に梯子ということになった。

「渥美、お前酒強いな！」

少し顔が赤い男が早苗の肩を叩いた。

「そうですか？ 先輩には負けますよ」

楽しい酒の席だったので、気分が良い早苗だった。

「じゃ、次の店で飲み比べ勝負でどっちが強いか調べるぞ！」

「ええ？ 勝てるかな」

「あ、顔に余裕が見える！ 恐ろしい男だ！」

「はははは！」

笑いあつて、店を探しながら皆で歩いていると、突然声を上げた者が居た。

「なあ、あれつて、佐々木じゃないか？」

「え？ あ、ほんとだ。佐々木だ」

早苗は彼らの視線の先を追つて、固まった。

否、頭が真っ白になり、一気に身体の血の気が引いた。

「……嘘だろ」

かつて、己の精神と肉体を崩壊寸前まで追いつめたあの悪夢。それと同じ光景が早苗の眼の前で現実となっていた。

〔09〕 夢幻の……

助三郎が一行に気づいて振り向いたその時、早苗は物陰に身を隠していた。

彼女に聞こえてくるのは声のみ。

「皆さん、お久しぶりです」

酔っ払いの男達は、そんな助三郎に絡んだ。

「お前、最近職場に顔出さないじゃないか。え？」

「ちょっと国許が忙しいので……」

さらっと受け流す助三郎だったが、酔っ払いは尚も彼に絡んだ。

「精が出るな。だが、渥美が寂しがってるぞ」

「そうだ、そうだ！ 可哀想になあ」

「は、はあ、そうですか……」

早苗は、藩主のみならず職場の皆にも、感づかれていたことを知った。

そして、あえて今まで何も聞いてこなかった彼らの心遣いに、感謝していた。

しかし……

「……その、そちらは、嫁さんか？」

助三郎は一人ではなかった。

隣にいたのは、女。

早苗は、一言一句漏らさずまいと、耳を済ませた。

彼女の耳には、緊張で高鳴る心臓の音がうるさく響いていた。

「いつも夫がお世話になっております。妻でございます」

その声は、彼女に聞き覚えのある声だった。

しかも、それはこの世で一番嫌いな女。

早苗はあふれ出てくる強い感情を歯を食いしばって抑えた。

そんな早苗とは対照的に、酔っ払いどもはニヤケていた。

そして、酔いに任せて助三郎を冷やかした。

「美人じゃないか。うらやましい！」

「若くて綺麗。お似合いの夫婦！」

「いやあ…… はははは……」

助三郎はそれから少しの後、皆の前から立ち去った。

もちろん、女と共に。

物陰から出てきた早苗が眼にしたのは、『妻』と自称した女と腕を組んで楽しそうに歩く助三郎の後姿だった。

男どもはそんな彼女に気付くと、面白半分でからかおうとした。

しかし、早苗の顔色が酷く悪いことに気付くと、腫れものに障るように接し始めた。

「渥美、どこ行ってたんだ？」

「……顔色悪いが、酔いが回ったか？」

早苗は同僚たちの気遣いなど気にしていなかった。

そんなことなどもうどうでもよかった。

それよりも大事なものは、眼の前に来た現実と向き合うこと。

早苗は深呼吸をすると無理やり笑顔をつくった。

「すみません！ 急用ができてしまいました。飲み比べはまたの機会に……」

すると、中から残念そうな声が上がった。

「ええ！？ なんでだよ……」

「せっかく朝まで飲もうと思ったのに……」

早くその場から立ち去りたい早苗は、精一杯愛想良く振舞った。

「また後日、絶対に飲み比べしますから！ ね？」

「よし…… わかった。行って来い」

「ありがとうございます」

酔っ払い一行から解放された早苗は、すぐに二人の後を追った。

彼女が二人に追いついた時、女は助三郎の腕に抱きつき、甘えるような声を出していた。

「……ねえ、いつ引越しされるの?」

「すぐにするぞ……」

そっけなく返す助三郎に気付いた女は、疑うような眼で彼を見上げた。

「やっぱり、まだ話つけてないんでしょう?」

その途端、助三郎は声を荒げた。

彼の言い放った言葉に、早苗は愕然とした。

「だから、早苗とは離縁したって言ったろ!? ちゃんと三下り半渡して、実家に帰して、書類上でも縁切ったって! 俺とはもう何にも関係ないって!」

それは突き付けられた現実。

彼が自分のもとに『夫』として、二度と帰ってこない。

夫婦で無くなった事が分かった瞬間だった。

しかし、早苗は気丈に二人の会話を聞き続けた。

「そんなに怒らなくてもいいじゃない、わたしはただ……」

女は俯き、泣きだした。

早苗は知っていた。それは『嘘泣き』だと。

しかし、助三郎は気付かないのか、慌てた様子で彼女を抱き寄せた。

「すまん。泣くな。泣いてる顔見たくない……」

顔をぱっと上げた女の眼に涙は無かった。

「早く一緒に住みたいの。ね？」

さすがに嘘泣きに気付いた助三郎は、呆れたように彼女に返した。

「あ、ああ、そのうちな……」

早苗は溜息をつくとき、その場から静かに立ち去った。

本人が気付いては居なかったが、遠ざかっていく早苗の後姿を眺める者があった。

「……お気の毒さま。早苗」

助三郎の横の女は冷酷な笑みを浮かべた。

「……わたしの勝ちよ。負け犬さん」

早苗は考えなしに、ふらふらと歩いていた。

役宅に帰るでもなし、どこかへ行くでもなし……

ぼんやりしていたが、顔に当たる冷たい物でやっと我に返った。

「あ、雨……」

それは通り雨かと思われたが、次第に雨脚が強くなっていった。雨宿りする場所を探すと、小さな御堂を見つけた。

その中に入り、雨がやむのを待つ事にした。

雨をぼんやり眺めていた彼女の口から、ある言葉が突いて出た。

「三年子無きは去れ……」

彼女はそのとたん、苦笑した。

「……そうだ、子ども産めなくて、ろくに旦那の世話もできない。こんなやつは、妻失格だ」

自分に言い聞かせるように早苗は続けた。

「だから、赤ちゃん産める、世話好きな良い嫁さんをとる。当たり前のことだ……」

早苗はそんなこと分かっていて。受け入れようとした。

しかし、どうしてもその妻に選ばれた女に納得がいかなかった。

「……だが、なんで弥生だ？ どうして、あのバカでどうしようもない性悪女だ？」

助三郎の横に居たのは、紛れも無く弥生。彼女は早苗の天敵だった。

顔を見れば喧嘩ばかりしていた。

しかし、結婚後、彼女と直接会う機会はほとんどなかった。

だが、昔の天敵は今も天敵。嫌いで顔も見たくない。

そんな女に、どうして愛する男を任せられる事が出来ようか。

「……もつと良い家の、可愛くて性格の良い娘にしろよ。佐々木家に、あのバカ女の血が入るじゃないか。どうしてなんだ……」 助三郎……」

早苗は懐に手を淹れ、夫からもらった大切な守り袋をギュツと握った。

その時だった。

彼女の耳に突然、気味の悪い声が聞こえた。

アイツガ ワルイ

オマエハ ワルクナイ

オンナヲ ヤッチマエ

オンナガ ワルイ

それは、人成らぬモノ達の声。

かつて早苗をあの世に連れ去ろうとした連中だった。

しかし、早苗は彼らに怯えることは無かった。

「……うるさいから黙ってる」

キツと睨みつけたが、彼らは一步も引か無いばかりか数が増え始めた。

ツライダロ クルシイダロ

イッシヨニ イコウ

ソウダ イコウ

「誰が行くか。ほつといてくれ……」

彼らはしつこかった。

シカタナイ

ツレテイコウ

ムリヤリ ツレテイコウ

早苗はその言葉に驚き、腰の刀に手を当てた。

「おい、何する!？」

イコウ イッシヨニ イコウ

「やめろ! 来るな!」

早苗は、太刀を抜き払い、振りかぶった。

その時、雷鳴と共に、お堂の中にずぶ濡れの男が勢いよく飛びこ
んできた。

半被を見に付け、手には大工道具。中年の男だった。

「ひでえ雨だ…… 大事な商売道具が台無し…… ん？」

その男は、先客の早苗に気付いた。

彼女は、髪を振り乱し、大刀を片手に、震えていた。

「来ないで！」

男はその凄まじい様に驚き、平伏した。

「平にご容赦を！ ただ雨宿りをしようとしただけでして、それ以
外は何も……」

しかし、早苗は男を脅しているのではなかった。

脅していたのは、この世のモノでは無いモノ達。

第三者の乱入で、彼らの攻撃は失敗に終わった。

ダメダ ジャマガキタ

マタニシヨウ マタクル

マタクルカラナ

彼らは残念そうにつぶやき、一人また一人と消えていった。

早苗はそれを見ると、刀を下ろした。

「わたしの、勝ちね。ハ……ハハ……ハハハハ！」

勝ち誇つての高笑い。

その狂気の沙汰を、ギョツとした眼で先程の男は観ていた。

どう見ても、彼女は精神的に正常ではない。

そう思ったのか、彼は早苗から離れ、お堂の隅で濡れた着物を乾かしながら、雨がやむのを待つことにした。

相変わらず外は雨。雷も鳴りやまない。

しかし、男はいつしか夢の中。早苗も、気が抜けたこともあつてか、うとうとし始めた。

しかし、彼らは去つて居なかつた。

早苗の隙を窺い、好機を待っていた。

そして、早苗が浅い眠りについた時、行動に出た。

早苗の眼が開いた。

「……助三郎さま？」

その場にすつくと立ちあがった。

「助三郎さま！ 来てくれたの！？ あ、待って、今行くわ」

お堂の外へと歩き出した。

眠っていた男はその早苗の声で眼を覚ました。

連れが迎えに来たのかと、寝ぼけ眼で辺りを見渡したが、それらしき人影は無かった。

眼に入ったのは、早苗が裸足のままお堂の外へ掛けて行く様だった。

「助三郎さま……」

早苗の耳には、人成らぬモノ達が聞かせる助三郎の声が聞こえていた。

眼には助三郎の幻が映っていた。

彼女は幻に手を差し伸べた。

「助三郎さま……」

しかし、幻の彼は早苗の手を取らなかった。

彼女の前を距離を置いて歩いて行った。

操られるように、早苗は幻の後を追って歩みを速めた。

「待って……置いてかないで……」

彼女はいつしか、お堂の傍にあった池の方へと歩を進めていた。しかし、水際でその歩みが止まることは無かった。

ヒトならぬモノたちは、早苗を溺れさせようと図ったのだった。

正気を失っている彼女は、ひたすら助三郎の幻影を追った。

……池の中までも。

最初はくるぶし程度の水の深さが、進めば進むほど、深くなっていた。

着物が水を含むにつれ、どんどん重くなった。

「待っ……」

冷たい水に引きずり込まれ、早苗は意識を失った。

『……苗、早苗？』

優しく懐かしい大好きな声に気付き、早苗は重い瞼を開けた。その眼に映ったのは、誰であろう。助三郎だった。

『……助三郎さま？ どうしたの？』

そう言った途端、彼はホツとしたような、泣きそうな、嬉しそうな顔になった。

しかし、すぐに目を吊り上げ、彼女を怒鳴り付けた。

その声は震えていた。

『どうしたもこうしたもあるか！　なんで泳げないのにあんな危険な事した！？』

しかし、彼女は怒られる理由が分からなかった。

『だって、助三郎さま、呼んでも逃げてっちゃったから、追い掛けたの、だから……』

助三郎は彼女からすべてを聞く前に、ギュツと彼女を抱き締めた。

『……可哀想に、悪い夢見たんだな？　怖くなかったか？』

久しぶりにしっかりと抱き締められる彼に、早苗は甘えた。

すっかり彼を抱き返し、彼の温もりを感じた。

その時、早苗の脳裏に、助三郎の不在中の辛い日々、違う女との逢瀬の光景が浮かんだ。

『……あれは、あれは全部夢なの？』

助三郎は身体をいったん離すと、早苗の目をじっと見つめて、優しく安心させるように言った。

『そつだ。夢だ。全部夢だ。俺はここに居る。お前の前に居る』

早苗は助三郎にしがみついた。

『ほんと？ もう一人にしない？ ずっと傍に居てくれる？』

助三郎は早苗の眼を覗き込み、優しい眼差しで言った。

『ああ。ずっと一緒だ。歳とって死ぬまでずっと一緒だ』

そして、彼の顔が近づいてきた。

早苗の胸は高鳴った。眼をそつとつぶった。

『助三郎さま……』

しかし、その時、聞き覚えのない濁声が突如として邪魔をした。

「戻ってこい！ 死ぬんじゃない！ 眼、開ける！」

『……へ？』

驚いた早苗は眼を見開いた。

たちまち眼の前の助三郎は消え失せた。

彼女の眼に入ったのは、見覚えのない天井。

しかし、そこがどこなのか、自分は何をしているのかを思い出す前に、彼女を猛烈な吐き気が襲った。

それから彼女は、ただひたすら飲み込んだ水を吐きだした。

その間、彼女は自分の背中をさすり、懸命に励ましてくれる男の存在に気がついた。

もうこれ以上水は出ないと分かった途端、その男は安心した様子で、彼女の傍に足を投げ出してへたり込んだ。

「よかった…… よかった……」

早苗は、必死に考えを巡らせたが、彼が何者なのか、どうして自分はここにいて、こんな事をしているのか、何も理解できなかった。記憶は、雨宿りしていたお堂で、人成らぬモノ達を追い払った所で終わっていた。

早苗は、意を決して男に声を掛けた。

「……あの、すみませんが、貴方は一体？」

男は、早苗の質問にすぐに答えてくれた。

「お堂で一緒に雨宿りしてた者だ。覚えてるか？」

「いいえ……」

「そんじゃあ、池で溺れたのは覚えてるか？」

「えっ……池で？」

すべて全く記憶に無い。

早苗が眼を白黒させていると、男は笑った。

「まあ、正気失ってたからな……もう大丈夫みてえだが？」

早苗は命の恩人に頭を深々と下げた。

「本当に、申し訳ございません……」

すると、男ははっと何かに気づき、早苗から離れて突っ伏した。

「こちらこそ、申し訳ねえ！ あ、すみません！ お武家さまにこんな口聞いて……」

「あ、やめてください。どうぞ、頭を上げてください。それに、貴方が話しやすい話し方でどうぞ、構いません……」

男にそう言うと、彼は頭を恐る恐るあげた後、ホツとした様子でその場であぐらをかいた。

「……そうですか？ じゃ、お言葉に甘えて」

早苗はその男をしばし観察した。
江戸っ子の威勢の良い男。

歳は父親の又兵衛くらの歳であろうか。日に焼けて居る上に体格も良く、至って丈夫そうな男だった。

その彼に、自分を助けてくれたことを心の中で感謝した。
一方、彼も早苗の事が気になったようだった。

「……一つ聞きたい事があるんですが、いいですか？」

「はい。なんででしょう？」

男からは妙な質問が帰って来た。

「……その、あなたさまは、お侍さんですかい？ それともお武家の奥方様ですかい？」

「……へ？」

「……溺れる前は、確かに奥様だったんだが、ほら、今は立派なお

侍さんなのでねえ」

早苗ははっとして自分の身体を見た。
おぼれた際に防衛本能が働いたせいか、姿と身形は武家の格之進だった。

早苗はすぐさま女に戻った。

「……すみません、女です」

しかし、眼の前で大きな男が小柄な女に変わるのを見て驚かない者は居ない。
男も例外ではなく、大層驚いていた。

「……すげえな あんな男前に化けられるのか」

早苗は正直に答えた。

「男前はともかく…… 変われます……」

「へえ…… 芝居だけと思ってたが、本当にそういうのってあるんだなあ…… すげえなあ……」

「お芝居、ですか……」

言われたことの無い例えに、早苗は少し答えに詰まった。
少々の沈黙が二人の間を流れたが、男がそれを断ち切った。

「……もし、差支えなかつたらでいいんですが、あなたさまの事、ちっとでいいから、教えてもらえませんか？」

早苗は簡単な身の上と、お堂に来るにいたった理由を話した。男は涙もろかったようで、早苗の話しを泣きながら聞いた。そして、早苗の力になると彼女を励ました。

仲の良い人には言えない悩みを、全くの初対面の人間に話し、少し気が楽になった。

そして眼の前の男に興味がわいた。

「……貴方のことも、御伺いしてもよろしいですか？」

「あ、いけね。そうだった。本所の大工で元締め、平兵衛と申しや
す」

「平兵衛さん。大工さんですか。本所で……」

こんなときでさえ、早苗は仕事を忘れていなかった。

『本所』と言えば、赤穂の浪人たちの仇、吉良上野介が移り住む土地。

何か関係があるかもしれない。そう考えていた。

「あと…… 娘が一人いる。早苗さんと同じくらいじゃねえかな？」

「あ、娘さんいらっしゃるんですか」

興味深げな早苗の表情に気付いた平兵衛は、早苗を元気付けようと冗談交じりに言った。

「早苗さんみてえに、おしとやかとか、お上品ってえのとは程遠い
ですけどねえ」

早苗はクスツと笑った。

「おしとやかなんで。そんな事ありませんよ。わたしなんか、ほら、半分男ですから」

その途端、平兵衛の声は震え、目は潤んでいた。

「よかった。笑えるなら、冗談言えるなら、もう大丈夫だ……」

早苗は己の事のように悲しんでくれる彼を見て、しばらく会っていない水戸の父を思い出していた。

いい加減で、どこか抜けていて、母のふくの尻に敷かれっぱなしの父親。

しかし、そんな彼でも早苗の事は心配してくれる。

急に彼女は実家の家族が恋しく思った。

平兵衛は彼女のその寂しげな遠い眼に気付くと、膝をポンと打った。

「さてと、だいぶ遅くなっちゃったな。どうします？　水戸様のお屋敷はちと遠いですが」

早苗は何も迷うことなく、自力で帰るつもりだった。

「大丈夫です」

そう言って男に変わり立ち上がろうとした。

が、溺れて身体が冷えたせいか、めまいに襲われふらつき、立ち上がれなかった。

「……ほら、無理しない方が良い」

「しかし……」

尚も無理しようとする彼女を平兵衛は止めた。

「いいから、今晚は俺ん家に泊まってくだせえ。ここから近えから、そこでゆっくり休んで。ね？」

事実、立ち上がれないのに、歩いて帰るなど無理だった。

早苗は平兵衛の言葉に甘えることにした。

「すみません……では、一晩、よろしく願いします」

早苗は大人しく彼に背負われ、彼の家へと向かった。
その途中、彼は一つだけ頼みごとをした。

「早苗さん。頼みがあるんですが……」

「なんですか？」

平兵衛は申し訳なさそうに頼みごとの内容を伝えた。

「俺の家で、さっきのお侍さまには化けないでくれませんかねえ？」

体調不良と精神疲労の早苗。勝手に変わるかもしれない。

念のため、確認した。

「……町人風体にもなれますが、それもダメですか？」

「え？ 町人！？ もっとヤバいなそれは……」

侍の格之進はともかく、町人の格さんまでダメという。

早苗はその理由にすぐに気がついた。

普通ではありえない変身。それを怖がったり、気持ち悪がったりする人は少なからずいた。

それなのだとわかった早苗は、素直に従うことにした。

しかし、平兵衛は慌てて早苗に説明し始めた。

「あ、気分害さないでくださいね。変だとか、怖いとか、そういうんじゃないんで」

「では……？」

それ以外の理由。思い当たる節が無いので、早苗は気になった。

「さっきのお侍さま…… そういえば、名前有るんですかい？」

「格之進です。格で構いません」

「格さんか。良い名前だ。ぴったりだな」

ますます理由が解らない早苗は首を傾げた。

しかし、すぐに平兵衛から答えが返って来た。

「その、格さんがねえ…… イイ男すぎるんですよ」

「へ？」

早苗は耳を疑った。

しかし、平兵衛は続けた。

「男の俺から見ても、男前で背が高くってイイ男だった」

「……へ？」

「で、早苗さんと話してみて、真面目で一途ってわかった」

「……は？」

「そんな外身も中身もイイ男に、娘が惚れられちゃったら、困るんですよ。本当の男なら良いんですがね。早苗さん、困るでしょう？」

結局、平兵衛は自分の娘の心配をしていた。

父親として当然のことだった。

「はい！ 困ります！」

早苗は惚れられるなどまっぴら御免と、力強く返事した。

平兵衛の家に着いた。

「今けえったぜ」

彼がそう声を掛けると、中から若い男が二人出てきた。
平兵衛の弟子だった。

「あ、親方、お帰りなさい」

「お帰りなさいまし。お嬢さん。親方帰って来ましたよ」

すると中から娘が駆け出してきた。

「おとつっあん！ 一体こんな時間まで何してたんだよ！？」 心配
した…… あ、その子どうしたの？」

彼女は父親の背中におぶわれてる早苗に気がついた。

平兵衛は彼女に説明した。

「具合が悪くてよ。一晩泊まらせる。いいな？」

早苗は、その娘に会釈した。

「すみません。お世話になります」

彼女はすぐに早苗を平兵衛の背中から降ろすと、父親に向かって
言い放った。

「おとつっあん、この方に変なことしなかったでしょうね！？」

平兵衛は娘に怒鳴りつけた。

「バカ野郎！ そんなこと言ってねえで、早く何か食うもんと茶出

せ！」

娘はすぐに父親の言葉に従った。
余計なひと言が付いていたが。

「わかりました！ ……ガミガミ親父」

そんなこと知ってか知らずか、平兵衛は若い男二人に指示を出していた。

「おう、客人用の布団出してきてくれ。おい、風呂熱くしてくれ」

「はい」

「へい。ただいま」

言つとおりに仕事をこなす男二人を満足そうに見た平兵衛は、早苗の方を向いた。

「早苗さん、まずは風呂…… おい、お艶、何してんだ」

早苗の隣には、平兵衛の娘お艶がいた。

彼女は父親が連れてきた早苗に興味津々だった。

「え？ じゃあ、わたしと同年？ じゃあ、早苗ちゃんって呼んでいい？ わたしの事はお艶でいいから」

友達を見つけたという感じのお艶は、楽しそうに会話していた。

「お艶ちゃん。お父様に助けて貰いました。ありがとうございます」

「お父様だなんて…… そんなカツコいいもんじゃないよ」

平兵衛は咳払いし、娘を制した。

「おい、お艶、早苗さんは調子が悪いんだ、そうぺらぺらしゃべるんじゃない」

お艶も分かっていたのか、すぐに話を切り上げた。

「わかった。じゃ、早苗ちゃん、お風呂行って温まって来て」

夜中のうちに、早苗は高熱を出した。

仕事があるので役宅に帰ろうとしたが、平兵衛に必死に止められた。

無断欠勤は出来ない。しかし、身体も動かない。

そこで上司に当てる文を認めた。

平兵衛にそれを託すと、彼女は倒れるように床についた。

昼近くに目覚めると、気分は大分良くなっていた。

傍にはお艶がいた。

「……大丈夫？」

彼女は早苗の汗を拭き、額を冷やす手拭いを取り換えた。世話をしてくれる彼女に、申し訳ないと早苗は感じていた。

「……今晚には帰れるかな？」

「……ううん、また夜に熱が上がるかもしれない。寝てたほうがいい」

「ごめんね……」

その通り、早苗の熱は再び上がった。

そして、最悪な事に、悪夢に魘された。

助三郎の名を何度も呼び、むせび泣いた。

その様子を傍で見ていたお艶は、早苗の事が気に掛かり、父親から彼女の話を聞いた。

お艶は怒りをあらわにした。

「酷過ぎる。何も言わないで出て行くなんて、他の人と一緒になるなんて！ あんなに早苗ちゃん苦しませて！」

「可哀想だが、俺達にはどうしようもならねえ……」

「早苗ちゃん、そんな酷い旦那さん、諦めれば良いのに……」

「あの様子じゃ、無理なんだろう……。出来ても、相当時間かかる心底、惚れて……」

平兵衛は、言葉に詰まった。眼には涙が浮かんでいた。

「ちょっと、泣かないでよ。こっちまで、泣きたくなるでしょ……」

平兵衛は鼻を強く咬むと、ぶっきらぼうに言った。

「お艶、酒出せ。飲まなきゃやってられねえ」

「わかった。でもほどほどにね」

結局、早苗が床払いできたのは、それから五日後だった。

その間、お艶は早苗の話を彼女本人の口からも聞いた。

そして、彼女を懸命に励ました。

仲良くなった二人は、またの再会を約束して別れた。

「早苗ちゃん、また、遊びに来てね」

「うん。ありがとう。またね」

お艶と平兵衛は早苗の遠ざかっていく姿を眺めていた。

「……励ましてやるんだぞ。旦那の事を綺麗に忘れるまでな」

「そう……でも……」

「でも、なんだ？」

「お武家の男って、最低」

娘の爆弾発言を、父親はその場で諫めた。

「おい、滅多な事言うんじゃない。お前には関係ない」

「そう。関係無い」

「そう、だからお前は、腕の良い大工を……」

お艶はサツと両手を耳に当て、父親を睨んだ。

「また始まった！ わたしはまだ婿取りなんかしませんよ！」

べーつと舌を出し、彼女は身を翻し家の中に駆け込んだ。

彼女を父親は追い掛けた。

「またそんなこと言って！ やっぱ好きな男居るんじゃないのか！？ 教える！」

「居ない！ 居たとしてもおとつっあんになんか言わない！」

「なんだと!？」

ギャーギャー大騒ぎをしている傍で、平兵衛の弟子二人は笑っていた。

「お嬢さんまたやってるねえ」

「棟梁も大変だなあ」

このお艶、後に『最低』呼ばわりした『武家の男』に恋してしま

それは悲しく辛い恋だった。

〔10〕 決心

「お帰りなさいませ」

お夏が早苗を迎えてくれた。

「ごめん。ずっと留守にして……」

「それより、もうお身体は大丈夫ですか？」

「ああ。明日から仕事に行く」

「ではまた明日から、お弁当作りますね」

するとそこへ黒い塊がすっ飛んできた。

「クワ。元気だったか」

彼は純粹に主の帰宅を喜び、尻尾を振っていた。

『帰って来た！ 格さん帰って来た！』

「ああ。帰って来た」

しかし、彼は悲しそうな眼で早苗を見上げた。

『助さん、全然帰ってこない…… なんで？』

助三郎はもう帰ってこない。

しかし、クロの一番は早苗と同じく助三郎。彼を悲しませたくない。彼とまだ別れたくない。そう思った彼女は、事実を隠蔽した。

「……助三郎はな、忙しいんだ。そのうち、落ち着いたら帰ってくる」

やさしく彼の頭を撫でながらそう言った。

『ほんと？ そしたら、クロといっばい遊んでくれるかな？』

「ああ。遊んでもらえるさ……」

黒犬は無邪気に吠えた。

『やった！ じゃあ、今日は格さんと遊ぶ！ 良いでしょ？ ね？』

「わかった。先行つててくれ」

早苗はほんの少し癒されたしかし、大きな溜息をついた。

彼に近いうち、本当の事を言わなければならぬ。

その時は、彼との別れの時。それを思い、ただ溜息をついた。

お夏は主の様子をしつかり見ていた。

「格之進さま、大丈夫ですか？」

「へ？ あ、ああ。大丈夫。ちょっと疲れただけだ」

「「無理はなさらず……」

「ああ……」

彼女は仕事に復帰した。

余計な事を考えないよう、仕事に没頭した。

そして、同僚と飲みに行った。朝まで飲んだ……

それ故、本来の女の姿に戻ることが無かった。

そんな生活が続いたある晩、日誌をつけている彼女の所へお夏がやって来た。

「お茶をお持ちしました」

盆の上の湯呑は二つ。

常ならぬ何かに、早苗は気付いた。

「……俺に話？」

「……はい」

お夏は、主の顔をじっと見つめた。

早苗は筆を置き、下女と向き合った。

「……なんだ？」

お夏はすぐには答えなかった。

すこし躊躇う様子を見せたが、言った。

「早苗さまに、お戻りにはならないのですか？」

その途端、お夏は主の顔が強張ったのに気付いた。

それ以上問い詰めはせず、ただ湯呑を勧めた。

それは少し温くなっていた。

黙って啜った後、早苗は湯呑の底を見ながら言った。

「戻れない訳じゃない。好きでこの姿なんだ……」

お夏は何となく感づいた。なぜ主が男のままなのか。

しかし口には出さなかった。

「……お茶、淹れなおしますね」

温かいお茶を啜った早苗は、湯呑を置くと大きな溜息をついた。そして、本当の事を打ち明けた。

「……あいつ、もう二度と戻ってこないんだ」

「えっ」

「新しい嫁さん貰ったらしいんだ」

お夏の顔が青ざめた事に早苗は気付いたが、そのまま続けた。

「だから、俺とあいつは、ただの同僚ってわけだ。は、はは、はははは……」

苦しい乾いた笑い声が部屋に響いた。

お夏はそれを打ち消すように、早苗に厳しい眼差しを向けた。

「早苗さま。差し出がましいようですが、御無理はなさらずと申し上げた筈です」

早苗はそんな下女から眼を背けた。

「無理なんかしてない……」

「いいえ。無理なさってます!」

お夏が声を荒げると早苗も怒鳴り返した。

「じゃあ、どうしろってんだ!？」

お夏は驚き、何も言わなかった。

早苗はとうとう溜まっていたモノをぶちまけた。

「あいつだけじゃない。そのうち、クロまで手放さないといけないなる! そうなったら、そうなったら、今度こそ俺は一人だ……どうすれば……」

男の姿のまま泣きだした。

ずっと女に戻らなかつたのは、助三郎を忘れる為。泣かないようにするためだった。

しかし、男の姿でも限界が来ていた。

「まだ助三郎を想い切れないんだ…… 夢に出てくる。逢いたくない。どうすればいい？ どうすれば忘れられる？」

「早苗さま……」

お夏は早苗に寄り添った。

そして涙を流し続ける主の手をそっと握った。

「忘れるなどと…… あのお優しい旦那さまです。勝手に離縁など、あり得ません」

「でも、でもな……」

すすりあげながら、早苗はお夏に見た事すべてを語った。
すると、彼女は優しく主を勇気づけた。

「それはきつとお仕事だったんです。なにか、調べたいことがあったんです」

「……そんなことって、あるか？」

「はい」

夜が更けた。

ずっと泣いていても仕方がない。

「そろそろお休みになったほうが」

「そうだな。ごめん、付き合わせて……」

「いえ。では、これにて失礼……」

お夏は部屋から立ち去ろうとした途端、その手首をがしっと掴まれていた。

「やっぱり、待ってくれ、一緒に寝てくれ」

「えっ!?!」

あっという間にお夏の顔が真っ赤になった。

主が女だということは百も承知だが、さすがに男の姿で『寝てくれ』と言われたら……

早苗もそれに気付き慌てて弁明した。

「あ、違う!。そういう意味じゃない!」

「そ、そ、そういう、意味とは!?!」

ひどくうるたえる下女を前に、早苗は女に戻った。

「……一緒に部屋の寝てくれる? もう一人寝はイヤなの」

お夏はやっと女に戻った主を見て安堵した。

「では、お布団持って参ります」

次の日の昼過ぎ、早苗は町人姿で本所を歩いていた。修理ももう終わり、そろそろ引越しを始める吉良の屋敷を見がてら、弥七と情報交換。

「最近こっちはどうなってる？」

「こちらの堀部殿が仇討ちを急んで、単騎突入も辞さないってんで、大石殿が数人寄越して説得を」

「安兵衛さんらしいな。で、その成果は？」

「フツ。木乃伊取りが木乃伊になっちまいやしたよ」

京の内蔵助は『待った』と宥め、江戸の安兵衛たち急進派は『すぐに仇討を』と迫る。

遠く離れていれば、意思も通じない。

元赤穂藩の仇討ちを誓った者たちの結束が揺らぎ始めていた。

「そついや、助さんなんですがね……」

突然の話に、早苗の胸は詰まり、耳をふさぎたくなった。しかし、ぐっところえ冷静を保った。

「……なんだ？」

「お銀から報告が。京で合流したそうぞうで」

早苗は大いに驚いた。

「京？ あいつ今京に居るのか？」

そんな彼女の様子に、弥七が驚いた。

「大石様に少し動きが有るようで、あつしにこちらを任せて……まさか、御存じないんで？」

「何の連絡も来てない……仕事は別だろ、あのバカ野郎！」

『夫婦』と『同僚』は別。

そう今まで何度も彼に言い聞かせていた。

仕事中は『男』として扱えと。

自分でもそれは、努力していた。

工作中、彼は『夫』ではなく『同僚』であると。

しかし、彼は仕事の連絡を彼女に寄越さなかった。

間違いなく、『女』として見ている。

「……俺の中身が、早苗だからだよな」

昔の女と連絡など取りたくないのは当たり前。

その女が、まだ自分に未練タラタラであれば接触などしたくない。

そうに違いないと早苗は思った。

「格さん、助さんと……」

丁度その時、早苗の視線の先を見知った顔が通った。

それは命の恩人、大工の平兵衛だった。

「弥七、急用だ。じゃ、今日はこれで！」

これ幸いと早苗は弥七の前から走り去った。
しかし彼は彼女の異変に気付いていた。

「……なんか隠してるな、ありゃ」

早苗は棟梁に駆け寄った。

どうやら吉良邸からの帰りらしい。大工道具を持っていた。

「棟梁！ 平兵衛の棟梁！」

その声を掛けると、彼はすぐに振り向いた。

「あ、これは早苗さ…… じゃなかった格さん」

にこやかな彼に、早苗は頭を下げた。

「その節はお世話になりました。おかげでこの通りです」

「よかったよかった。しかし、町人風体でも男前は男前だ、羨ましいねえ……」

早苗は固まった。

『男前』言われたくない言葉だった。

「あ、しまった。『美しい』の方が良かったな。男も女も両方使え

る。とにかく、早苗さん、負けずに頑張りなよ」

平兵衛は早苗を応援していた。
彼の優しい言葉に、励まされた。

「……………ありがとうございます」

「……………何かあったら、家にいらっしやい。お艶も待ってるんでね」

「はい。でも、その時はちゃんと女で窺いますね」

「そうだった。お艶が格さんに惚れたら困る！　ハハハハ！」

早苗もそれは承知だった。

愛する男が去っても、女の子に走ることは出来ない。

「では、お艶ちゃんにもよろしくお伝えください。失礼します」

「へい。では、また」

別れた二人だったが、平兵衛は遠ざかっていく早苗の姿を振りかえり、怒りに燃えていた。

「旦那め……………」

その日の夕方、仕事を終えて帰宅した早苗は、役宅にただならぬ

気配を感じた。

門前に大八車。中ではクロがけたたましく吠え、お夏も声を荒げている。

しばらく様子をつかがっていると、お夏が飛び出して来た。

「あ、格之進さま。お帰りなさいませ」

「ああ。それより、何かあったの？」

「はい。いきなり二人連れが押し入って来て、旦那さまの物を持ち出してるのです」

早苗は物取りだと判断した。

お夏から紐を借りて襷がけ、何があっても良いよう太刀の鯉口を切った。

「危ないからここで待ってる」

早苗は役宅の中へ入った。

そこには見知らぬ男。

彼は助三郎の着物を風呂敷に包んでいた。

「おい！ 何をやっている！」

男は驚いて腰を抜かしたが、早苗の質問には答えなかった。代わりに声を上げた。

「奥様！ 奥様！」

すると、奥から女が出てきた。

「騒がしいわねえ。……あら？ 渥美さま。お邪魔しております」

早苗はその場で立ち尽くした。

その女は彼女がこの世で一番嫌いな女。

助三郎と一緒に歩いていた女。

早苗の天敵。

弥生だった。

「……この役宅に何用ですか？」

感情を押し殺してそう聞くと、弥生は悪びれもせず答えた。

「旦那さまの荷物を引き取りに来ただけです。お構いなく」

「……荷物？ なに故ですか？」

「この役宅は引き払い、我が屋敷に引越すものですから」

早苗の嫌いな笑みを浮かべると、彼女は再び奥へ引込んだ。

茫然として、早苗はいつたん庭に出た。

そこには、お夏とクロがいた。

真っ先に飛んできたクロは悲しそうに泣いた。

『あのいじわるおばちゃん、クロを蹴飛ばしたの』

「えっ。大丈夫か？」

生類憐みの令があるにもかかわらず御犬様のクロを蹴った。

とんでもない女だと、改めて早苗は怒りを覚えた。
しかし、クロは自慢げに報告した。

『うん。だから仕返しに、草履ボロボロにした』

早苗も胸がすく思いだったので、クロを思いっきり撫でて褒めた。

「褒美に後で遊んでやるから、外で遊んで来るんだ。いいね？」

『わかった。新助のそこ行ってお孝さんにおやつもらってくる！』

クロが居なくなると、早苗はお夏と向き合った。

「……………如何でした？」

「物取りじゃないから大丈夫。だが、厄介だ……………」

早苗とお夏は彼らの動向を見極めようと、庭で待つことにした。

薄暗くなった頃、どうやら用を済ませたらしい弥生が出てきた。
そのまま帰ると思いきや、彼女は早苗を呼び寄せた。

「少しお時間よろしいですか？」

居間で早苗は弥生と向き合って座った。

二人は何も言葉を発しなかった。
しかし、どこかで鳥が一声鳴いた時、弥生はなぜか笑い始めた。
なぜか、早苗は嫌な予感がした。
それは的中した。

「……隠しても無駄よ。早苗」

正体を言い当てられ、驚きのあまり否定するのを忘れてしまった。

「……どこでそれを？」

「さあ？ どこだったかしら。忘れたわ、そんなこと」

そう言うと茶を啜り、早苗の嫌いな笑みを浮かべた。

ジロジロ舐めるように見た後、勝ち誇ったような顔で言った。

「どこからどう見ても見事に男ねえ。可哀想に……」

早苗は彼女を睨みつけた。

「……お前に可哀想だなんて思われたくない」

弥生は、笑顔で嫌味を言った。

「赤ちゃん産めなかったのにな。ご愁傷様でした」

「うるさい！」

怒りだした早苗を軽蔑するかのように鼻で笑った後、弥生は嫌味を続けた。

「いくらでも言っておける。助三郎さまも嫌がってたのよ。夜布団に入ると、男のその身体を思い出して、萎えるって。気持ち悪くて抱けたもんじゃないって」

早苗は腸が煮え繰り返る思いだったが、それもそうかもしれないと思ってしまった。

彼が己を滅多に抱かなかった理由が、そこにあるのだと。己が、半分男であるからだ。

「あ、良い事教えてあげる」

早苗はそんなもの聞きたくないと彼女を睨みつけた。

しかし、彼女は気付かないふりで勝手に話し始めた。

お腹に手を当てて。

「わたしのここにね、赤ちゃんいるの」

早苗の背筋が凍った。

「助三郎さまの赤ちゃんがね」

早苗は声が出なかった。

「あなたが産みたくても産めなかったあの人の赤ちゃん、わたしが産むの。応援してね」

そんなことできるわけがなかった。

大好きだった夫を取られ、子を産む権利まで取られた。

早苗にはもう何も残っていなかった。

だが、必死に耐えた。

「なに？ その顔。おめでどうの一言も言えないの？」

早苗は女の心を押し殺し、手をついて頭を下げた。
格之進として、助三郎の同僚として。

「おめでどう、いざいます……」

「ありがと。あ、そうそう、もちろん分かっているわよね？ あなたはもうあの人と夫婦関係は一切無いってこと」

悔しかったが、悲しかったが、辛かったが、早苗は耐えた。
そして声を絞り出した。

「わかっています。同僚以外の関係は何も、ありません……」

弥生はそれを聞くと満足げに言った。

「そう。それを聞いて安心したわ。大好きなお仕事、正体がバレない限り頑張ってるね。じゃ、さよなら、負け犬さん」

早苗は憎い弥生が消えるまで耐えた。
噛み締めた唇は血の味がしていた。

次の日、早苗は弥七を呼び出した。

「……連れて行って欲しいところがあるんだ」

少しの後、早苗はある屋敷の屋根裏に居た。

そこは南部坂（*1）の屋敷。剃髪して瑤泉院（*2）と名を改めた阿久里の住いであった。

彼女は夫の菩提を弔う日々を過ごしていた。

早苗がここに来た理由は二つあった。

一つは密命の遂行、もうひとつは、遺された妻の心情を知ること。

早苗の眼には、一人で静かに手を合わせる瑤泉院の姿が映っていた。

「もうじき秋です。一昨年は、共に紅葉を愛でましたね……」

寂しげな笑顔で亡き夫に語りかけていた。

「桜も、紅葉も、雪も、もっともっと共に愛でようございました……」

つと、涙が瑤泉院の頬をつたった。

「殿……」

早苗はその姿に涙した。

そして、己の望み。助三郎に女として会いたい、側に居たいという望みは贅沢だと思いついた。

相手が生きていさえすれば、逢える。側にいられる。それがどんな形であろうと。

心なしか、身体が軽くなったように感じていた。

しばらくすると、瑤泉院の部屋に侍女がやってきた。

「瑤泉院さま、文にごさいます」

瑤泉院はそつと涙を拭うと、文を受け取った。

それを一通り読んだ彼女の顔が晴れた。

そして亡き夫に語りかけた。

「殿、お喜びくださいませ。内蔵助から文が参りました。近々、殿にご挨拶に参るそつで……」

早苗は頭を切り替え、情報を逐一聞き取り書きとめた。
大事な情報だった。

瑤泉院はその後、控えている戸田局（*3）と話し始めた。

「戸田……」

「はい」

「時折、思うのです。わたくしが、あの時吉良さまを拒んでいなければ、殿は今生きてらっしゃったのではないかと……」

瑤泉院は横恋慕した吉良をきっぱり断った。

愛する人に、自分の愛を示すため。

しかし、吉良はそれを理由に夫を苛め、追い詰めた。

結果、瑤泉院は愛する人を失った。

そつ思い詰める彼女は日々鬱々と過ごしていた。

戸田局は主の取った行為を正当化した。

「いいえ、瑤泉院さまは正しい道を取られたのです。悪いは、すべて吉良さまにごぞいます」

「ほんに、そうであるつか？」

「はい。いつか必ず、殿の御無念晴らす日が参ります……」

瑤泉院は手の内にある書状に目を落とした。

少し晴れた表情で、彼女は頼みの男の名を呟いた。

「内蔵助……」

その後、早苗は迎えに来た弥七と共に邸の屋根裏から外に出た。

弥七は、情報を手に入れたことに満足げだった。

「格さん、これから忙しくなりません。大石殿が江戸に来るってことは、助さんもきつと……」

早苗は彼の話の聞いていなかった。

助三郎が帰ってくる前に、己の始末をつけようと心を決めていた。これからの仕事をしっかり遂行するためにも。

「弥七、しばらく本業が忙しくなるんだが、こっちの仕事完全に任せてもいいか？」

「へい。お任せを…… あ、格さん」

「なんだ？」

弥七は気に掛けていたことをとうとう口にした。

「……本当に、大丈夫ですかい？ もし早苗さんになんかあったら、助さんに殺されちまう」

弥七も、助三郎のことを知らない。

そう早苗は合点した。

「心配するな。次会うときは、もっと元気になってるから」

弥七は、無理に笑顔をつくっている彼女のその言葉を信じたかったが、無性にイヤな予感がした。

しかし、それ以上何も聞かずその場から消えた。

一人になった早苗は大きく深呼吸した。

もう溜息は出なかった。

「よし！ 思い立ったが吉日。準備だ準備！」

早苗はもう泣かなかった。振り向きもしなかった。スツキリとした顔で、歩き出した。

数日後の夜遅く、早苗はお夏を呼び出した。

「……俺の味方だよな？」

にっこり笑って、そう言った。

その年初めての木枯らしが吹いた朝、門前に旅装の男が立っていた。

彼は懐から小さな包みを取り出した。

その中から出てきたものは、玉簪。

玉に白い花が散らしてある上品な一品。

彼はそれを手に微笑んだ。

それを受け取る人の優しい笑顔を思い浮かべて……

彼は玄關の引戸を開け、家の中に入った。

「どこだ？ 早苗……」

助三郎はもぬけの殻の役宅の中で、愕然と立ち尽くした。

早苗への贈り物の簪が入った包が、彼の手をすり抜けて畳に落ちた。

完

[10] 決心（後書き）

（*1）南部坂なんぶざか

現在の東京都港区赤坂6丁目と六本木2丁目の間

（*2）瑤泉院ようせんいん・ようせんいん

浅野内匠頭の正室、阿久里の仏門に帰依した際の名。
最初は寿昌院だったが、五代將軍綱吉生母の桂昌院と名前が被るためこの名前に。

（*3）戸田局とだのつぼね

瑤泉院に仕える女性。後々あの名シーンに登場予定！？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8615/>

凌霄花

2011年12月11日11時47分発行